NHK趣味百科

人形をつくる

講師 与勇輝
Yûki Atae

◉教育テレビ
1991年7月2日――9月24日
毎週火曜日 午後9:30――10:00
◉再放送
毎週水曜日 午後2:00――2:30



筆一筋200年

Raphaël

名門ラファエル

アクリル画にラファエルの筆

二〇〇年の歴史と豊富な種類。選び抜かれた毛質…。

アクリル画にはラファエルの**軟毛**、**中硬毛**の筆が最適です。ナイロン製には無い使い易さと



- ▼863 黄テン 丸 10号 ¥1,150 2~24の12サイズ
- ▼873 黄テン 平 12号 ¥1,600 2~24の12サイズ
- ▼8732 黄テン フイルバード 12号 ¥2,050 2~24の12サイズ
- ▼8752 パーミー フイルバード 12号 ¥1,750 2~24の12サイズ
- ▼8762 ジャコウネコ フイルバード 12号 ¥1,550 2~24の12サイズ
- ▼8772 マングース フイルバード 12号 ¥1,750 2~24の12サイズ
- ▼8782 牛 フイルバード 12号 ¥1,600 2~24の12サイズ
- ▼882 コリンスキー 丸長穂 6号 ¥1,800 2~24の12サイズ
- ▼862 赤テン 丸 10号 ¥2,000 2~24の12サイズ
- ▼8722 赤テン フイルバード 8号 ¥2,700 2~24の12サイズ
- ▼803 カザンリス 丸羽管 3号 ¥4,400 3/0~12の15サイズ
- ▼16684 コリンスキー フランス面相 5号 ¥3,000 2、5、8の3サイズ
- ▼916 カナダリス 平 12号 ¥1,600 6~24の7サイズ
- ▼8354 カナダリス 丸 5号 ¥470 1~12の12サイズ
- ▼8404 コリンスキー 丸 5号 ¥4,900 5/0~12の17サイズ

※写真の筆は原寸の約65%のサイズです。



えのぐ除去剤 Aqua Magic アクアマジック

●安全、無公害、水溶性、不燃性、無臭で特に衣類についたアクリルえのぐには適量含ませよく揉んで水洗いでOK/ ●パレット等、皮膚の清掃にも最適。●アクリルえのぐで固まった筆も長時間浸すと再生されます。

●20cc¥190 ●200cc¥1,300 ●500cc¥2,800



数世紀の伝統をくつがえす はくり剤のいらない画期的なパレット… ペコット

●固まったアクリルえのぐが(厚さに関係なく)指先やナイフで楽にはがせる。●はくり剤や掃除の時間が全く不要、いつもきれいなパレットで制作できる。

●4号角白¥3,000 ●4号角茶¥3,950 ●6号角白¥4,950

(全国有名画材店でお求め下さい)

株式会社**丸善美術商事**

〒142 東京都品川区旗の台5-27-21 電話:(03)3788-4800㈹ FAX:(03)3785-1828

NHK趣味百科

講師 与勇輝

人形をつくる

◉教育テレビ　7月2日～9月24日
毎週火曜日／午後9：30～10：00

◉再 放 送　毎週水曜日／午後2：00～2：30



椿峠の合戦　1988年



目次

Contents













追憶　1985年



ピーターパン　1985年



八匹の妖精　1987年



三面鏡　1991年





夏の日　1985年



レッスン　1990年



バラ持つ少年　1987年



さる　1984年

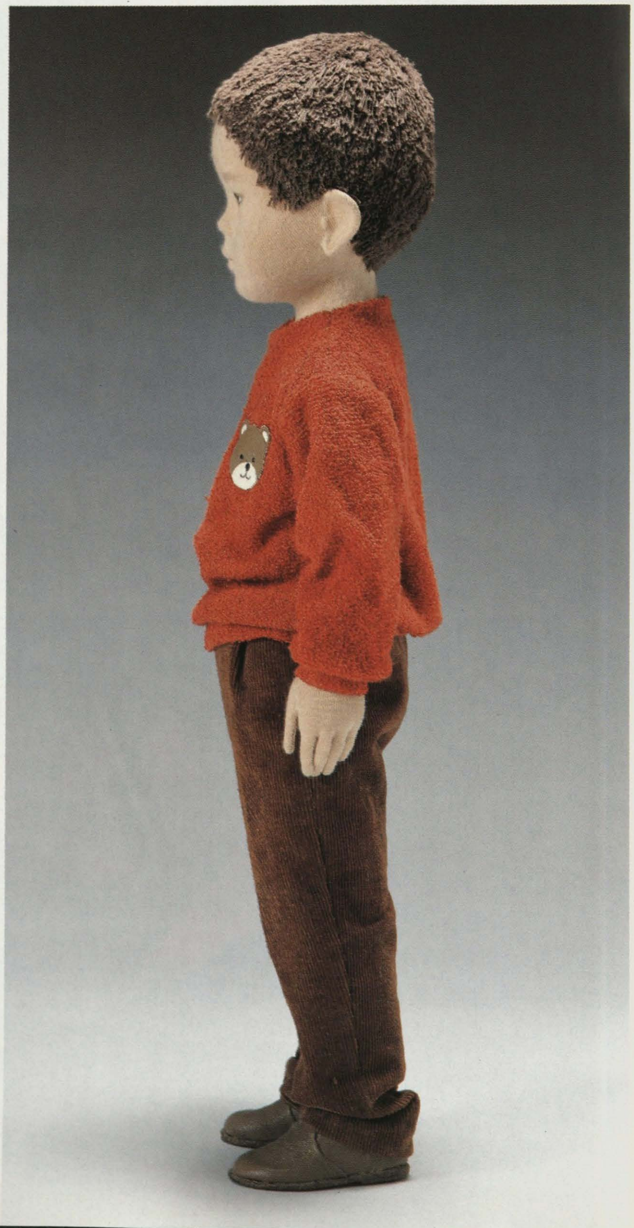


小春　1987年

男の子［1〜11回放送］







道化
［12～13回放送］









開講にあたって

人形はあなたそのものです。つまり創るあなたの分身なのです。

たとえそれがどんな人形でも、つくり上げた時の感動は、あなた以外の人には分かりません。

人形は、顔かたちもさることながら、つくる人の心の奥までも映す鏡です。

あなたはそれを見て、時にははじらい、時にはよろこび、そして哀しく感じる時さえあるかもしれません。それでいいのです。

人形とあなた、その両者をつなぐ心の糸が、人形を、あなたを、幸せにするのです。

与　勇輝

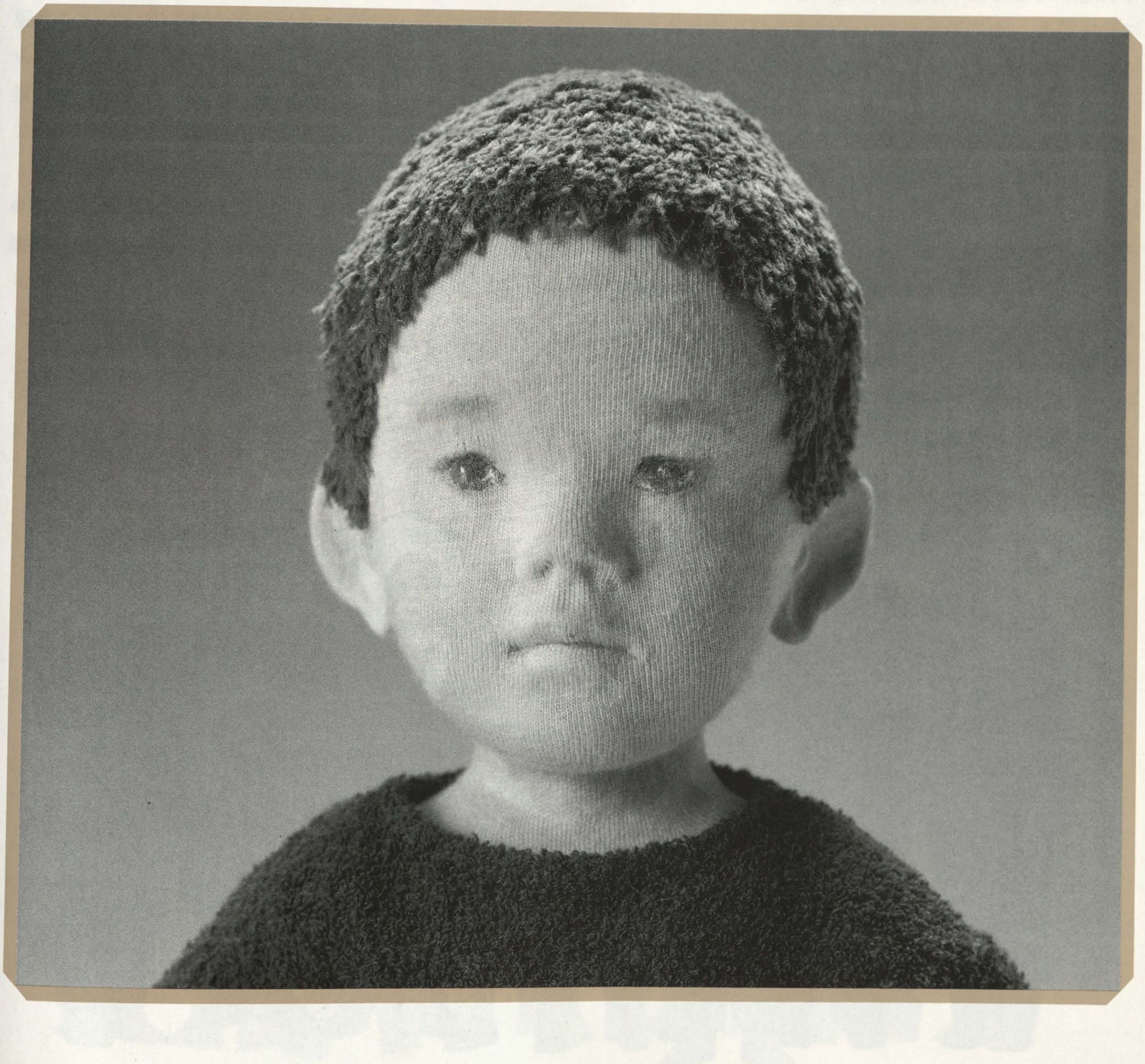


オンディーヌ　1991年

1

人形への誘い（いざない）～与 勇輝の世界～

放送日 7月2日(火)
再放送日 7月3日(水)



与 勇輝の世界

子どもが子どもらしかった時代

僕がつくる人形は子どもが多いんです。これは、大人が上から子どもを見おろすような目でつくっているのではなく、自分自身の子ども時代に帰ったつもりで、その子どもたち、仲間たちに同化してしまうような感じで、つくっています。

僕が生まれ、育ったのは、多摩川に近い、川崎市の小杉というところです。川や池で小さいころから泳いでいました。今ではハイウェイが通って、河原も舗装されていますが、昔はただの土手。その土手や原っぱで一日中転げ回って遊んでました。今の子どもは土の感触って味わえないでしょ、みんなコンクリートになってしまいましたものね。

子どもが群れて遊ぶっていうのもなくなりましたね、集団で、夕焼けの下で遊ぶような光景が見られない。空も、あの時代の空と今の空とでは違うでしょう。夜は星が降るように見えたし、月の明かりで長い影が出て、影踏みだってできた。そういうのどかな光景があって、子どもは自然の中で育っていった。

物はなかったですよ。それに産めよ、増やせよの時代だったから、どこでも兄弟が多い。僕は七人兄弟で、下から二番目だったけど、おやつなんかもみんなで分けなきゃならない。おもしろいですよね。どうしても弟や兄のほうが多く見えてしまうんです。そんな物のない時代だからこそ、あれが欲しい、これが欲しいという欲望も強かった。夢や希望がたくさんあった。今はなんでもある。お金があればなんでも手に入る。たしかに物質的には豊かだけれど、でも精神的には貧しいんじゃないんですか。

最近は見た目にはきれいな子が多いけど、どこか違うんだな、昔の子どもと。僕らが子どものときは、みんなやせぎみで小さく、はななんかたらして、服も継ぎ当てばかり。でも遊び道具でもなんでも自分でつくり出したり工夫したりして創造性も自立心もあった。したたかで、ずるがしこくって、一本筋金が入っていた。そういう子どものイメージが、いつも自分の意識の底に重なり合っていて、作品の原点になっている。

自分を映し出す鏡

作品をつくるとき、あまり構えてつくったりしないんです。自然に、そのときの気持の流れに従ってつく





ります。かわいい子をつくるんだとか最初から決めてつくらない。気持のおもむくままにつくってみて、ああ、あの子に似ているなとか思うんです。

人形って、誰かしらに似てしまうんですね、現在、あるいは過去の自分のかかわった人に。

人形は、初めてつくると必ずといっていいくらい、自分に似るものです。やはり、ふだん一番よく見ている顔だからでしょうね。それと手や指が、自分の顔の骨格や筋肉の感触を覚えていて、自然に形づくってしまうんではないですか。

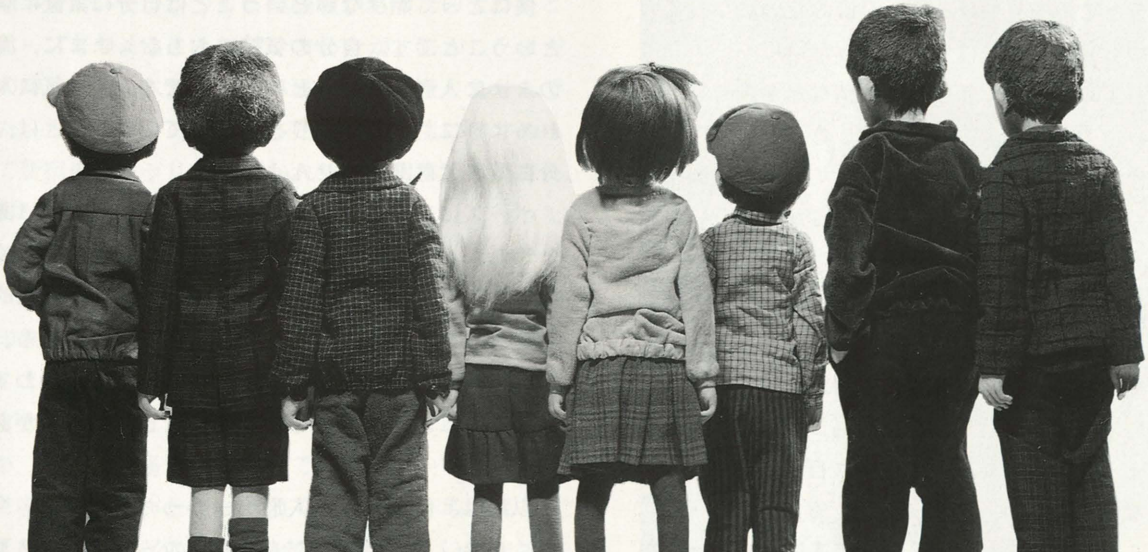
顔かたちもそうですけど、人形はそのときどきの人間の喜怒哀楽や心の奥までも映し出します。そう、鏡なんです。そこから逆にいろいろな自分を知り、ときには叱ったり、反省したり、あるいは新しい自分を発見して、心ときめかしたりするんです。

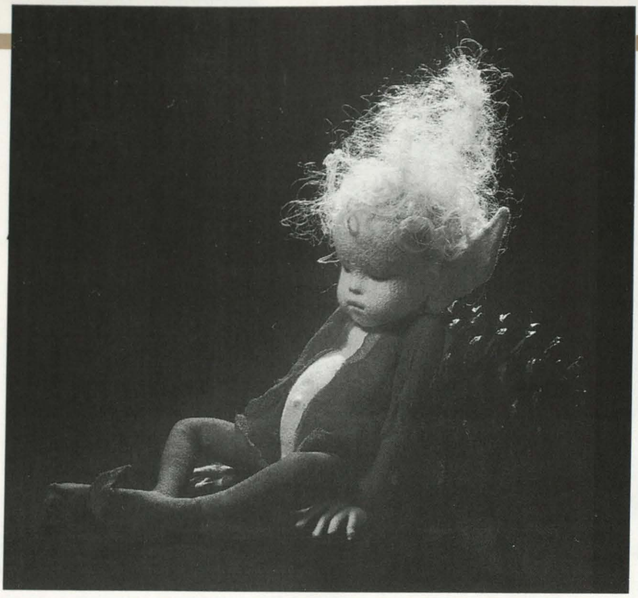
木綿の手ざわりがいい

素材は、主に木綿を使っています。やはり手ざわりと、素朴な雰囲気に魅かれます。それと、自然な深いしわ、ひだといってもいいでしょうか、化学繊維ではなかなか出ませんね。

子どもの洋服をつくるときは、ちょっと大きめにつくっておいて、着せるときだぶつかせる。もっと古びたようにするときは、つくった後で洗濯をして感じを出すんです。あまり上等な服は着せないですね。

着物には、たいてい古布を使います。時代ものの古着などは、高価で、とても手に入りにくくなっています。まめに骨董市なんかへ行ったりして探すんです。古着は、たくさん押入れや棚にも積んであって、仕事場はほとんど布に占領されています。画家の絵の具と





同じように、使っても使わなくても、置いておくと安心して仕事ができるんです。

目に入るものすべてが創作のヒント

創作のヒントは、こういうのがいいなって思ったらメモをしておくんです。本を読んで登場人物にこだわったり、街中で出会った子どもに魅かれたり、テレビや新聞、写真などからヒントを得たり、いろいろですね。また、布地の柄などからイメージする場合も多いです。

子どもって、ひょっとした瞬間、あどけない、なんともいえないかわいいポーズをするときがあるでしょ。そういうところを見つけることが癖みたいになっている。いつもアンテナをはっているみたいに……。

妖精もよくつくりますけど、妖精なんか誰も見たことがない。でも妖精は、わずらわしさのない自由と幻想の世界にいる。妖精みたいになりたいという願望は誰にでもある。だからみんな心のどこかにこういう世界をもっているんだと思う。

立たない人形は死んでいる

作品をつくる作業に入る前に、構想を練る時間がとても長いですね。試行錯誤を繰り返して寝られないときもしょっちゅうです。つくること自体は、わりと苦にならないのですが、なにしろ考えることが……。

テクニックはいつも磨いておきますよ、イメージが固まったら一気につくれるようにね。ちょっと怠けて休んだりすると、すぐに落ちる。物づくりなんだから、物ができなければしょうがない。それにはどうしても技術がいるでしょ。いくらイメージを膨らませても、それを立体に表現するテクニックがなければね。

日ごろの観察、構想、そしてテクニック、それらをひっくるめた、いわゆるデッサン、そのデッサンをいつも心がけておかなければなりません。

よくいわれるんですけど、あなたの人形は、重しもないのに、どうして立っているんですか……と。人形は、しっかりしたデッサンをして、しっかりつくれば必ず立つんです。力学的にいっても、ちゃんと立つことになっているんです。多少の揺れでも、起き上がりこぼしのように立ち直ります。心配するほど倒れはしません。立たないということは人形として生きていないのだと思います。

自分に素直になる

あなたの作品には、笑っているのがない。先日、ある人にいわれてみて、ああ、なるほど、そういわれてみればと、始めて気がついた。媚びたものをつくりたくないという日ごろの気持の現れではないかと思っています。笑うということは一瞬の表情ですよね。だから人形がしょっちゅう笑っていたら、気持ちいいものではないし。

僕にとって媚びないということは自分に素直になるということです。自分の気持のおもむくままに、流れのままに人形をつくるということです。人に気に入られるように、それぱかりを気にしてつくることは、自分に素直ではありませんよね。

ポーズにしても、あまり大げさなのは好きではありません。ポーズはいろいろありますが、数多くつくっていると、それにも限度があります。あとは内面的なものしかない。腕の角度、指のわずかな動きでも、作品全体が変わることがありますから、その指のわずかな動きのことで、何日も考え込んでしまうことがあります。

以前は、僕のつくる人形大きかったんですよ。今の倍くらい、それがだんだん小さくなってきた。人形って、小さければ小さいほどかわいいですよね。でも、

理想は20センチメートル前後、あまり小さいと布の人形は指などつくりにくくなりますから。

布の人形との出会い

小さいころから画いたりつくったりすることが好きで、絵かきになることを漠然と夢みていました。

いつのころからかその夢も消えたけれど、今こうして人形づくりをしているのも、そういった素地のようなものがあったからなのでしょう。

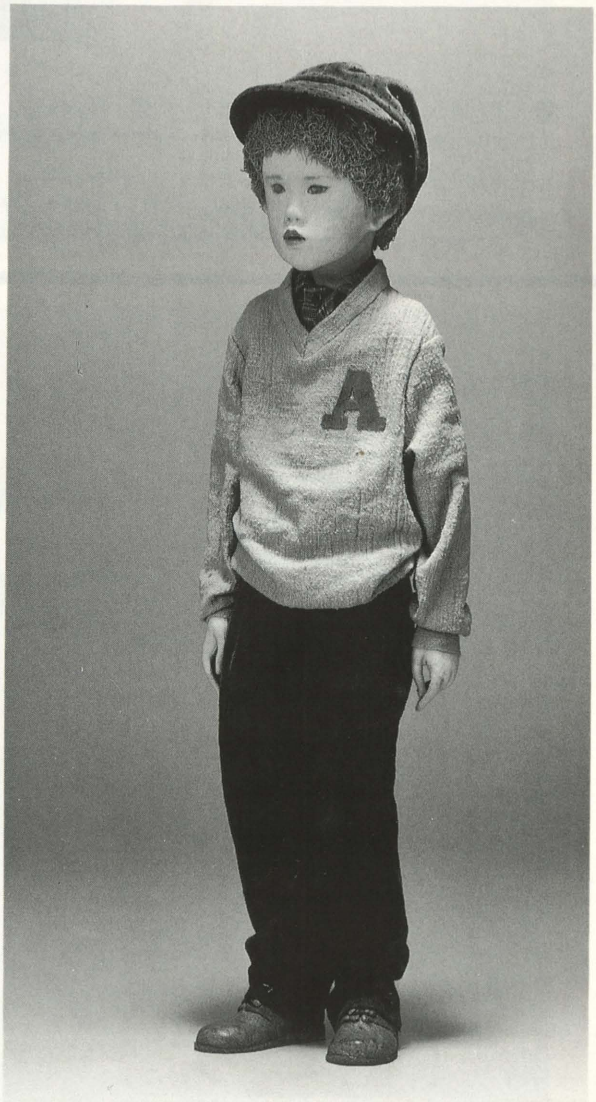
地元の中学から商業高校へ進み、そこを２年で中退し、マネキン人形の会社へ就職したのが18歳の時でした。特別に望んで入ったわけではないのですが、人間の形を造型する彫刻的なこのマネキン制作は肌に合っていて、その後20年あまり携わりました。しかし、つまるところマネキンは衣紋掛、それも会社の製品、いつのころからか飽きがきていました。何かをしなければ、独創性のあるものを、焦りのようなものを感じ始め、悶々としていたころ、人形作家の曽山武彦氏を知ったのです。31歳の時でした。曽山先生の人形は、綿を布でくるんでつくる、いわゆるぬいぐるみ式のものでしたが、ほのぼのとした情感が漂っていて、僕はとても好きでした。

それで、ご指導を受けて、２、３体の人形をつくってみましたが、実は、それまでに布の人形は自己流で興味半分にいくつかつくった経験があったのでわりとスムーズにつくることはできましたが、しかし、まだその時は本腰を入れてつくるまでにはいたりませんでした。ちょうどそのころでした。曽山先生にすすめられて新宿のギャラリーで開かれていた川本喜八郎さん、辻村ジュサブローさんたちのグループ展を見に行ったのです。そこにはそれまで見たこともなかった布でつくった人形がたくさん並んでいました。とても衝撃的な印象でしたね。布という素材で、こんなにも彫刻的で、こんなにも巧緻に人間の形ができるのかと。

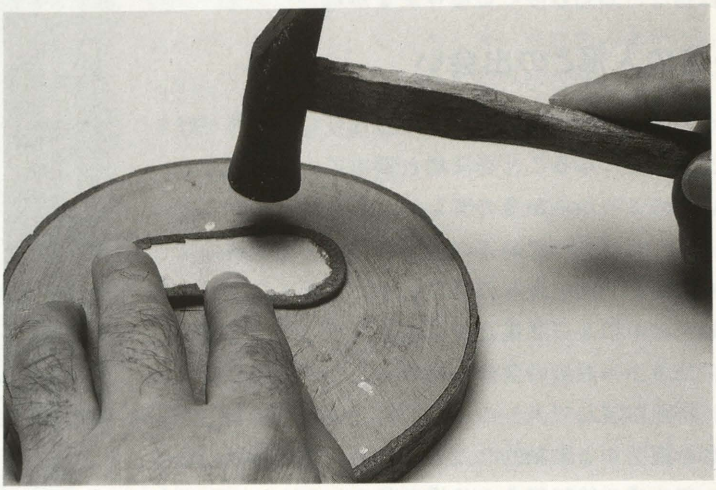
自分もつくってみたい、自分にもつくれるのではないか、すぐその場で申し込んで、次の年からグループ展に参加させていただいたのですが、それまで他人に見てもらえるほどの人形を一つもつくっていなかったのに、こわいもの知らずというのか、無鉄砲さには、今さらながら身の縮む思いです。

そのころから本格的な創作活動に入りましたが、マネキンづくりと違って、自分の気持を思いのままに表現できる楽しさ、布という素材の面白さなどに急速に魅かれ、どんどんこの世界にのめり込んで行きました。

昼間会社で働いて、夜人形づくりをする。そんな生活を７～８年も続けたでしょうか、無理がたたって体をこわしてしまいました。体力的に限界を感じましたね。会社か人形か、どちらかを選択しなければならなくなり、それでは、やりたいことをやろう、命をかけて――。というわけで、結局人形づくりのほうをとったのです。



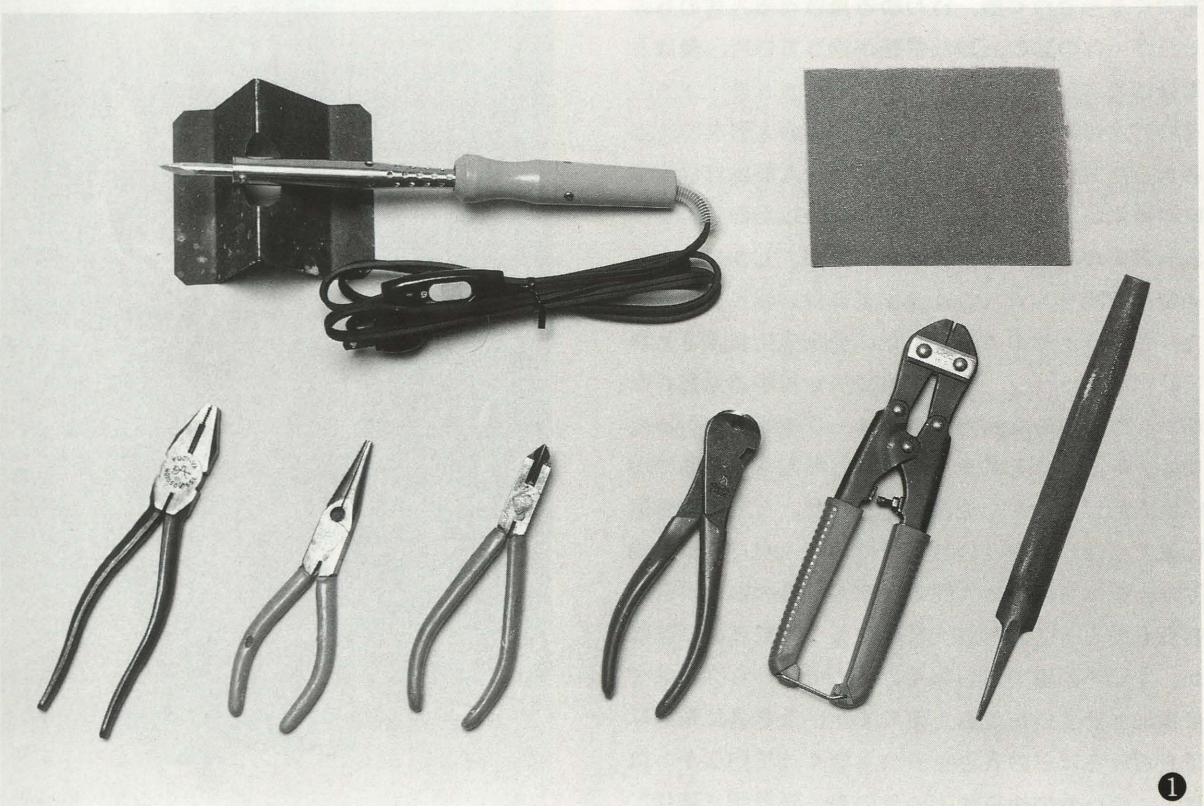
道具と材料



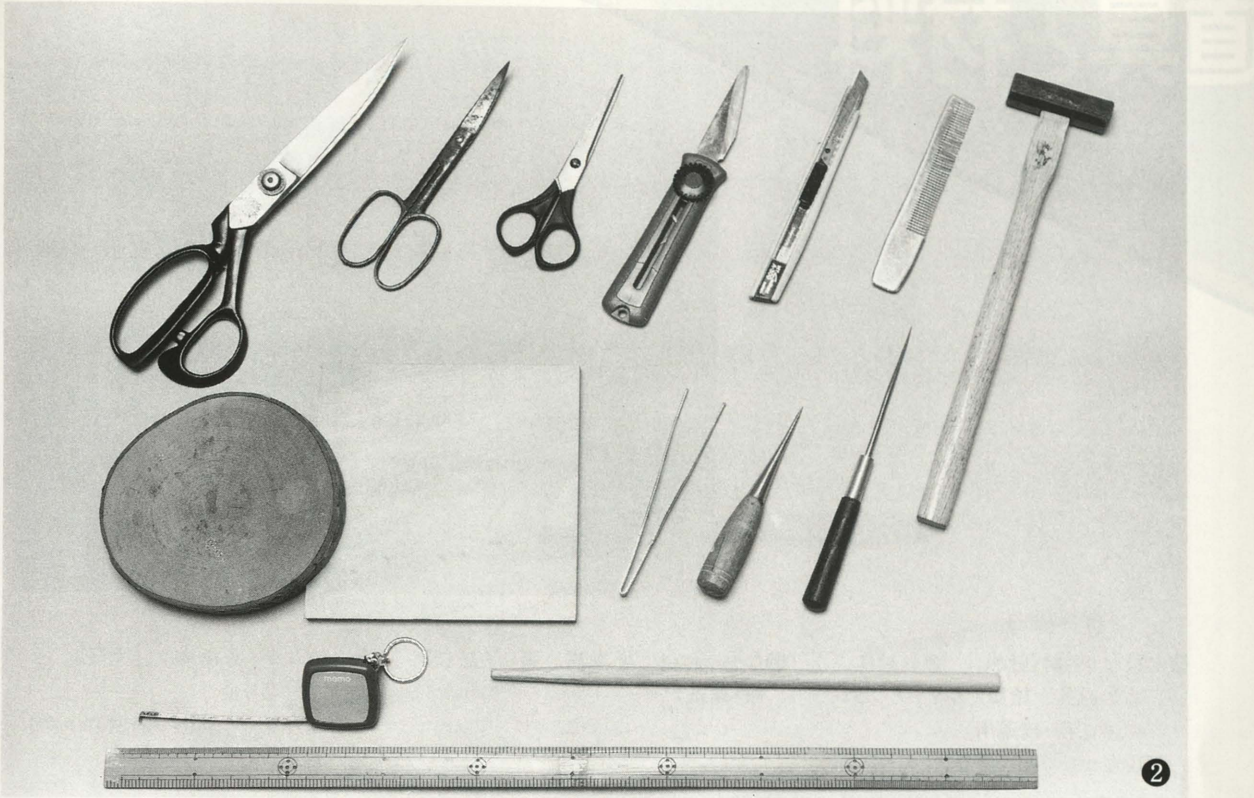
❶上段左から　はんだ用のこて　紙ヤスリ(120#)
下段左から　ペンチ　ラジオペンチ　皮むきニッパ　ニッパ　圧着ペンチ　鉄工ヤスリ(中目)

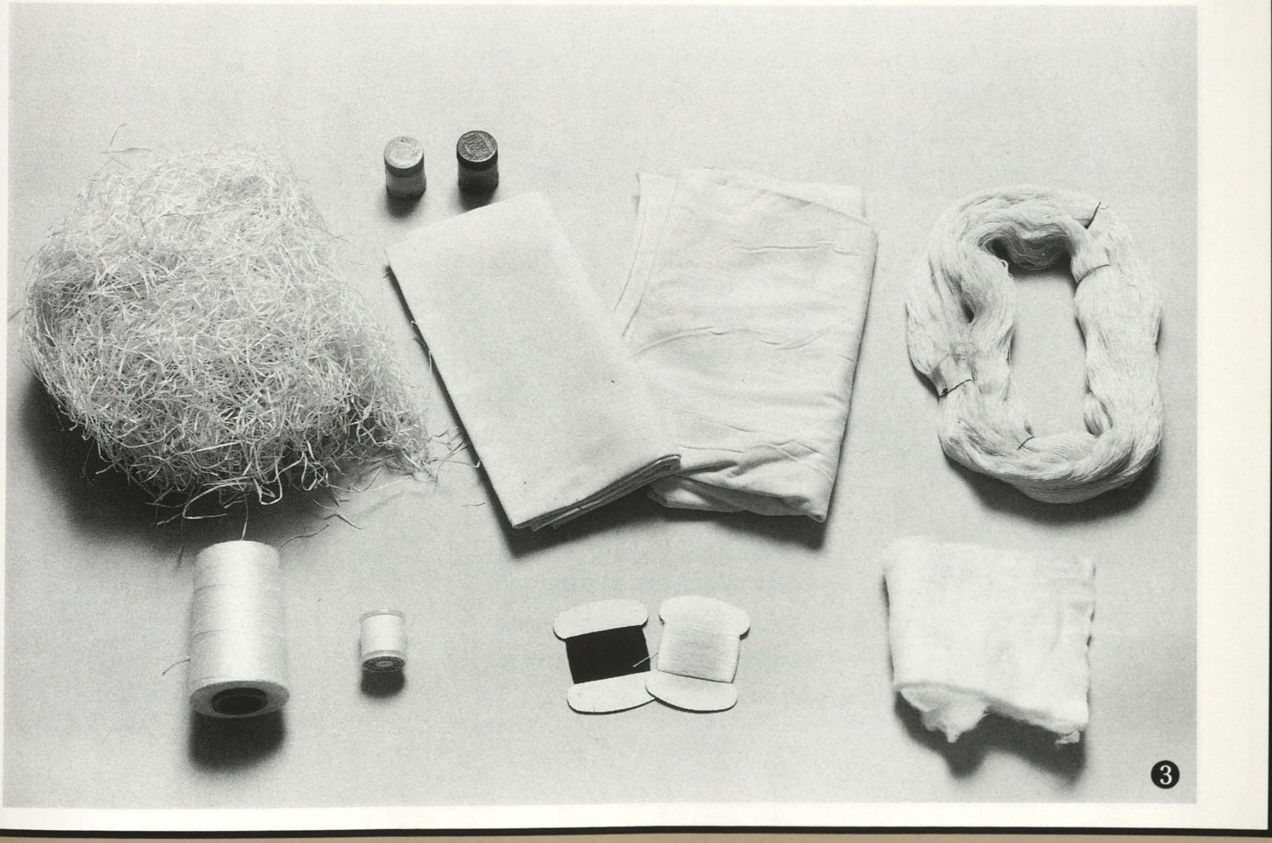
❷上段左から　はさみ(大・中・小)　カッター(大・小)　くし　げんのう
中段左から　台(2種)　ピンセット　目打ち　千枚どおし
下段左から　巻き尺　定規　はし

❸上段左から　木毛　染粉　メリヤス天竺白毛
下段左から　もめん糸　絹糸　穴糸　脱脂綿

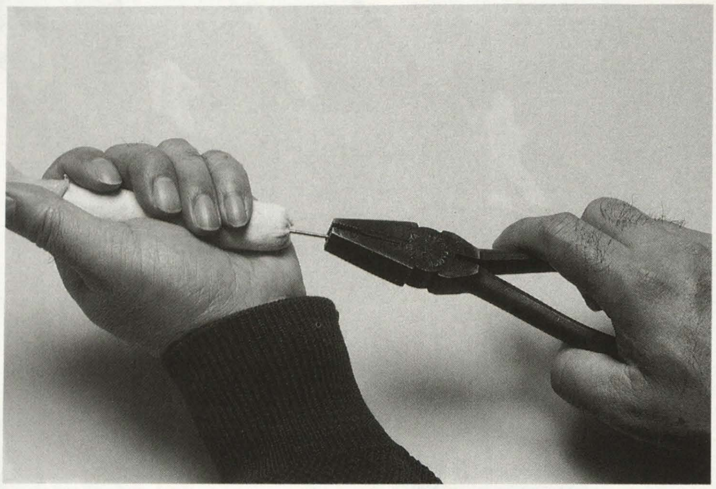


❶


❷


❸

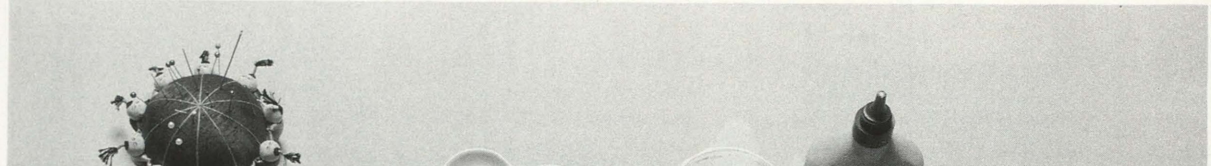
道具と材料



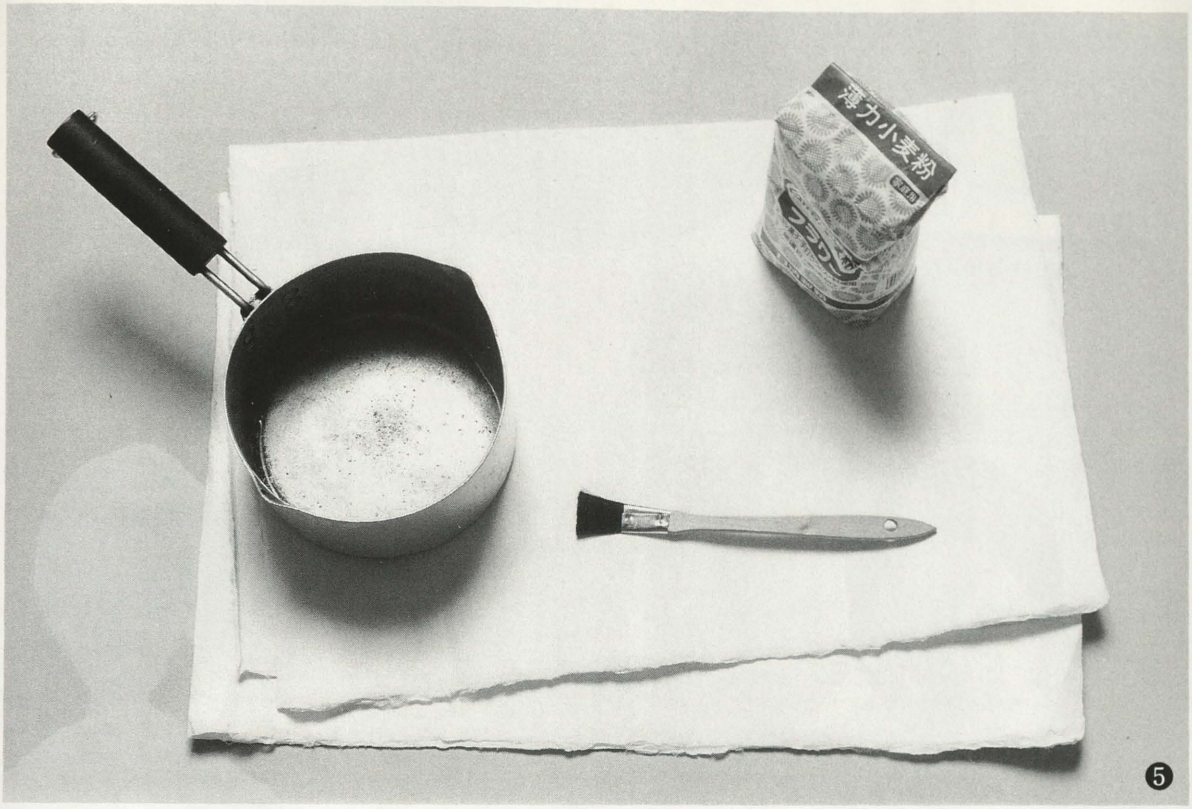
❹上段左から針(針さし)　顔彩絵具　水彩絵具　絵皿　ジェッソ　ボンド(木工用・皮革用)
下段左から　筆　針金(12＃・14＃)　ヒューズ

❺なべ　はけ　小麦粉　張り子紙(厚紙・薄紙)

❻上段左から　ボール　焼石膏　ラップ　切り金
下段左から　油土　角材(1cm角)　石膏べら　竹べら



❹



❺



❻

「男の子」をつくる

デッサンと完成

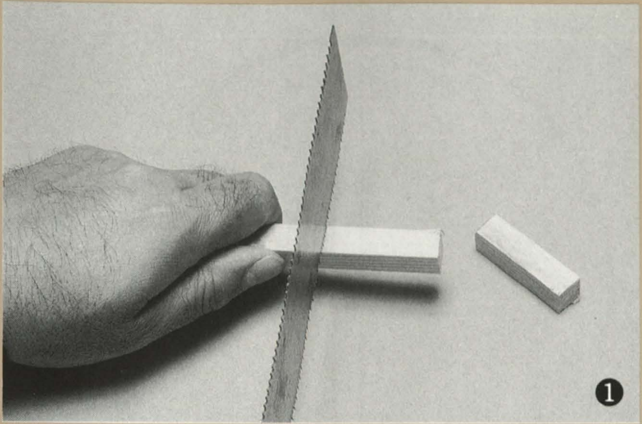


「油土で頭部をつくる」

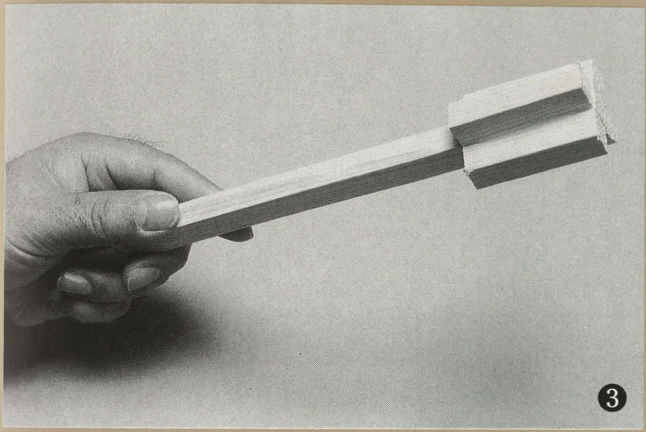
◉角材でしん棒をつくる

1−❶ 1cm角の角材を長さ5cmのものを4本と25cmのもの1本に切り分ける。

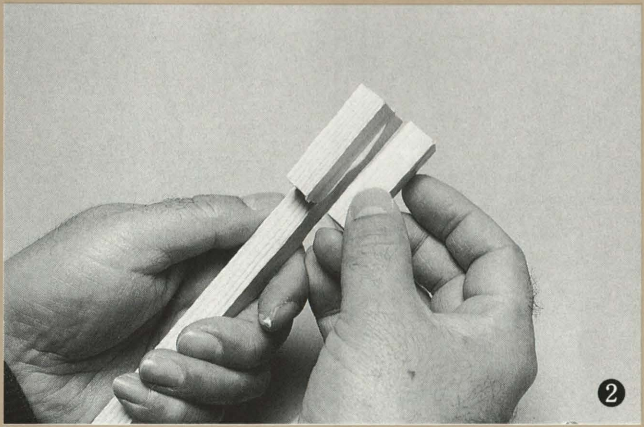
1−❷ 25cmの角材に5cmの角材4本をボンドで接着する。これが頭部原型のしん棒になる。



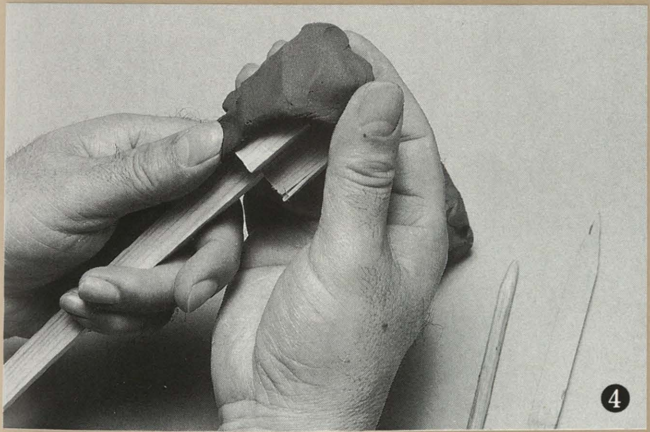
❶



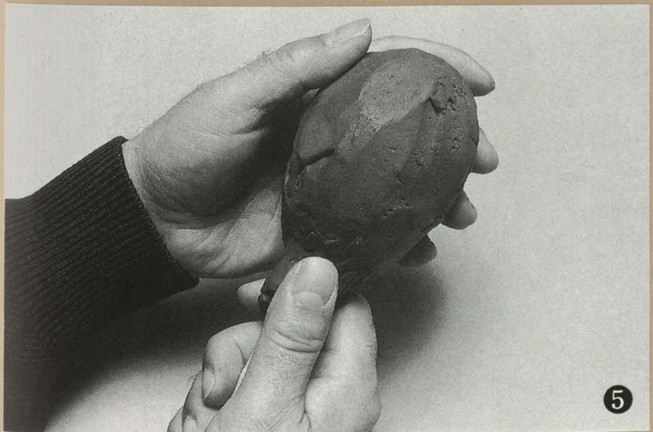
❸



❷



❹



❺

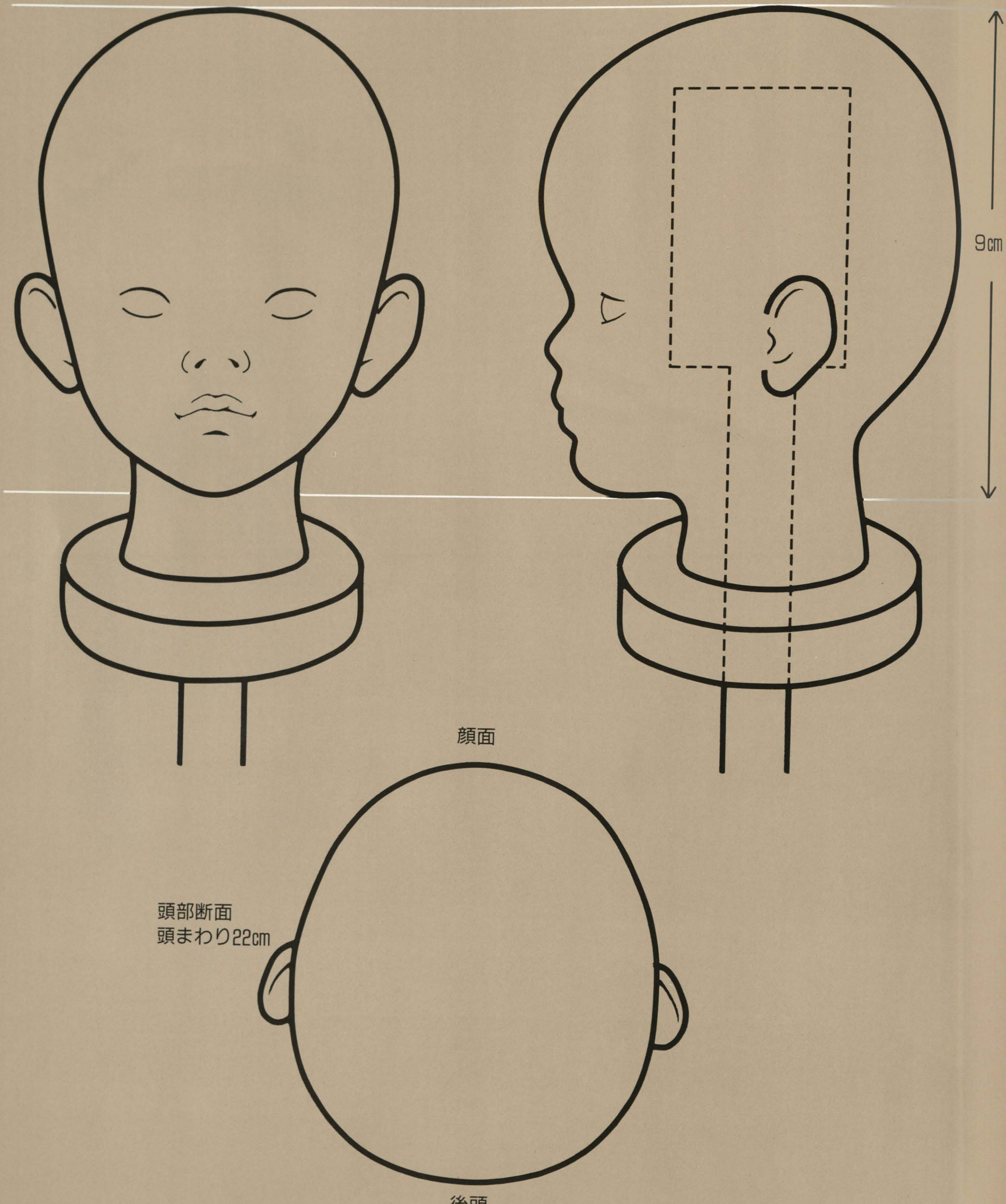
1−❸ ボンドがしっかり接着するまで、2時間ほどおく。

◉しん棒に油土をつける

1−❹ 硬めの油土をしん棒との間にすき間ができないようにつけていく。

1−❺ 頭部原寸大図と照らしあわせ、しん棒が頭の中心になるように注意しながらあらづけする。

頭部原寸大図



2
頭と足の原型

放送日 7月9日(火)
再放送日 7月10日(水)

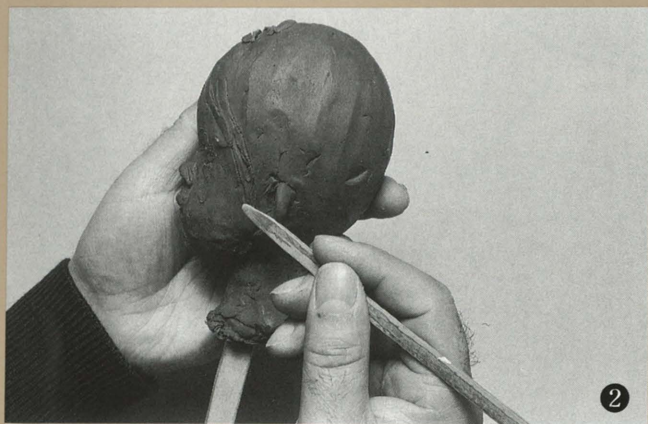




◉頭部原型仕上げ

2−❶ 5〜6歳の男の子を想定し、細部にこだわらないで大ざっぱに全体の感じをつかんでいく。頭の大きさ、目、鼻、口の位置など原寸大図と同じくらいになるようにする。

2−❷ 横顔のラインから決めていくと、顔の感じをつかみやすい。









2−❸ 全体の感じがつかめたら、指先や竹べらを利用して、目、鼻、口、耳など細かい部分を形づくる。

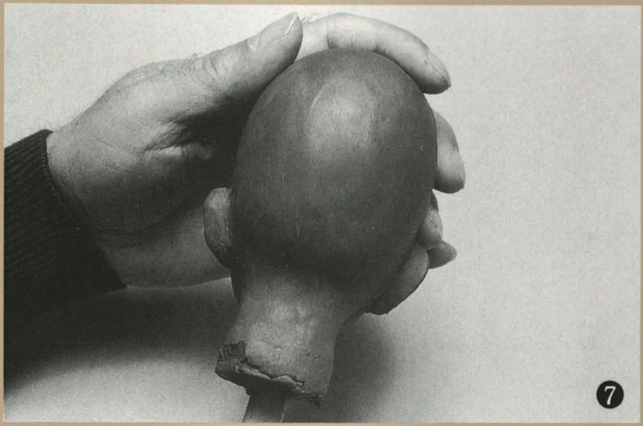
2−❹ 指先で表面をなめらかにする。

2−❺ 頭部の原型完成(前)。

2−❻ 頭部の原型完成(横)。
2−❼ 頭部の原型完成(後)。



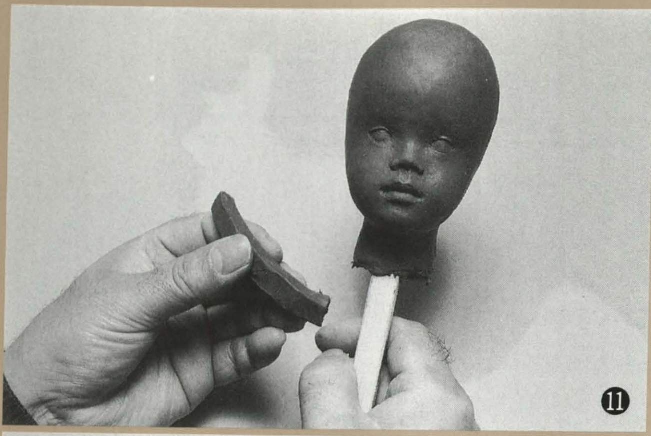






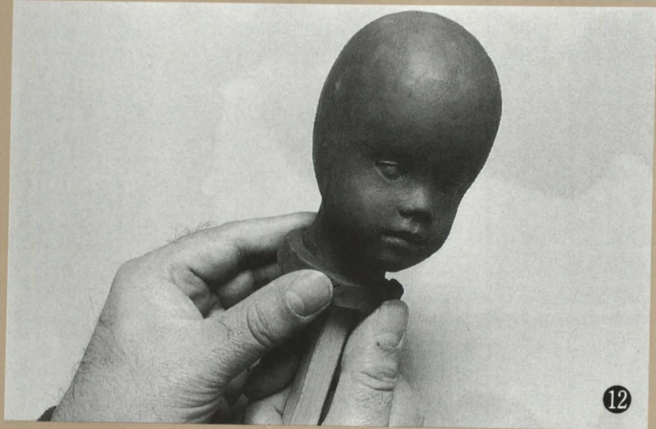


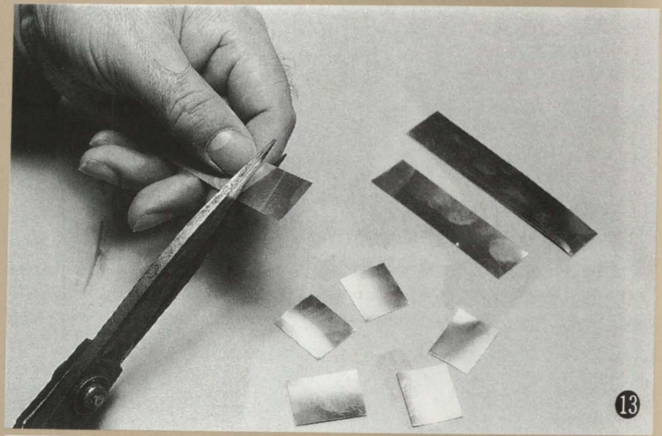
2−❽、❾ 耳は石膏で型をとる時に邪魔になるので、竹べらで削りとる。
2−❿ 削りとった後を指先でなめらかにする。

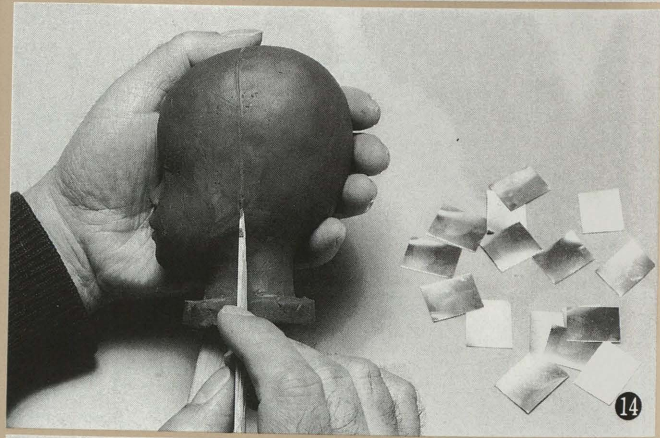


2-⓫ 首の下部に石膏が流れてこないように油土で帯状のものをつくり、石膏止めにする。

2-⓬ 首の下部に石膏止めをしっかりつける。この時、人形の首が長すぎたり短すぎたりしないように気をつける。









◉頭部原型に切り金をつける

2-⓭ 厚めの切り金を断ちばさみで約1.8cm×2.5cmの大きさに15～20枚切る。

2-⓮ 顔面と後頭部境目に、軽くへらで線をひく。

2-⓯ 線にそってすき間がないように、切り金を5mmぐらいの深さにしっかりとさしこむ。

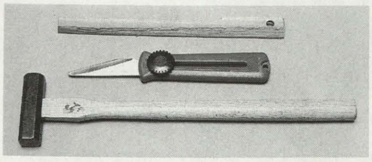




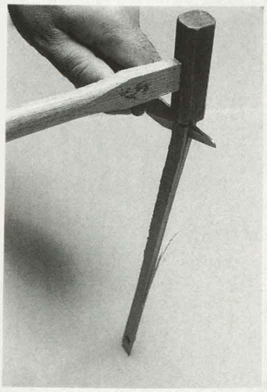
2－⑯ 石膏止めに切り金を少しくいこませる。

2－⑰ 横から見た状態。

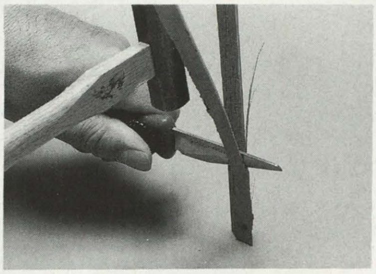
◉竹べらをつくる



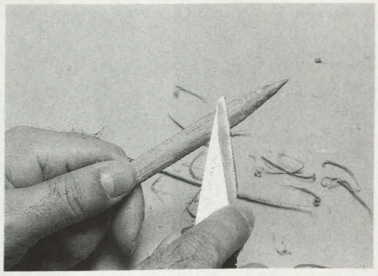
❶竹ぶみの竹などを割ったもの、ナイフ、かなづちを用意する。



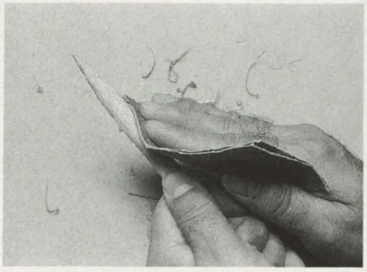
❷竹にナイフをあてる。



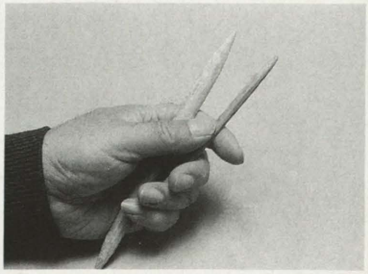
❸その背をかなづちでたたいて竹を縦に割り、ちょうどよい厚さにする。



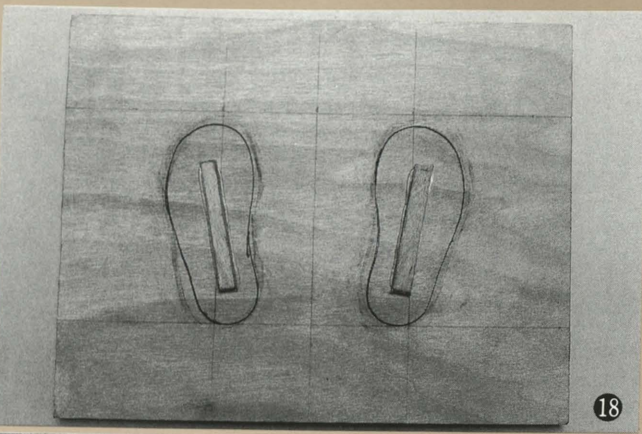
❹先をナイフで削り、細くする。

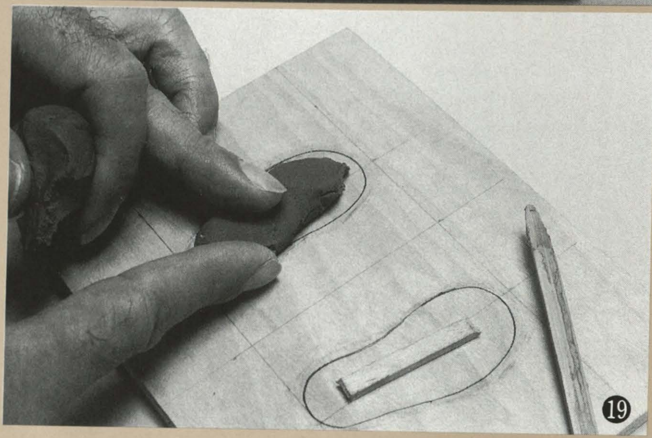


❺サンドペーパーで表面をきれいにする。



❻太さの違うものを作って、使い分けるとよい。



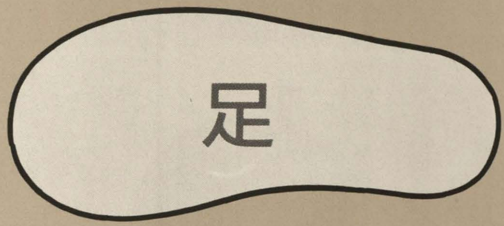


「足づくり」

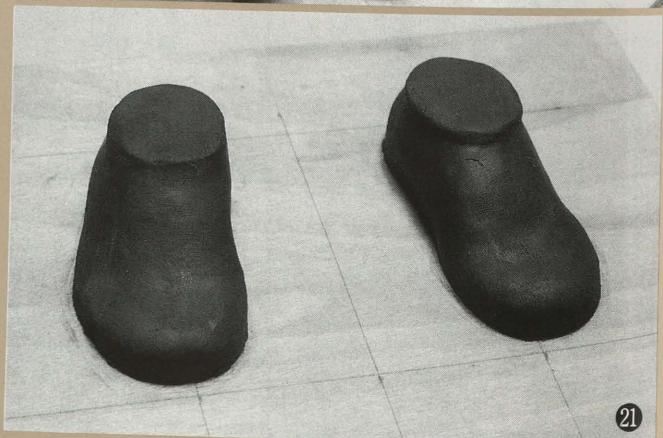
◉油土で足をつくり、石膏どりする

2−⓲ 板に足の型を描き、中心にわりばしをボンドで張る。

2−⓳ 型に合わせて油土をのせる。







2−⓴ 足の形を作る。

2−㉑ 足型のできあがり。

3

石膏どり

放送日 7月16日（火）
再放送日 7月17日（水）



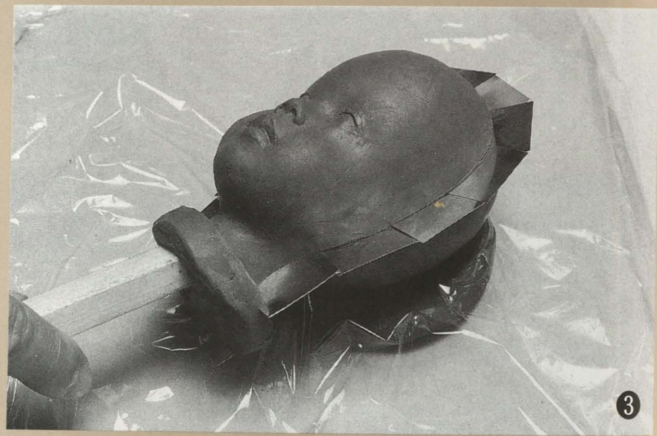
3−❶ 油土を輪にしてドーナツ型をつくり、頭部に石膏をかける時のまくらにする。まくらは頭部を寝かせた時に頭が下につかないぐらいの高さにつくる。

3−❷ 油土のまくらの上にラップを敷く。

3−❸ その上に頭部を寝かせ、水平になるように調節する。











◉石膏(せっこう)をとく

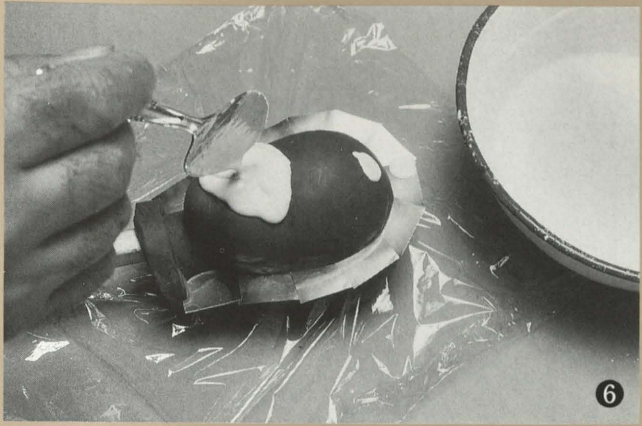
3−❹ ボールに約100c.c.の水を用意し、石膏を手で振るいながら水面スレスレになるまで入れていく。

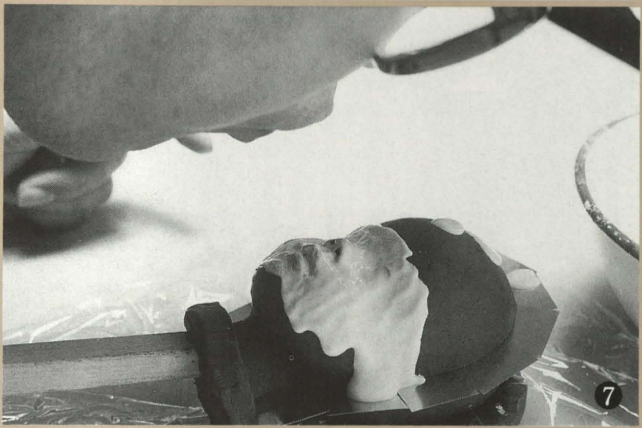
3−❺ 石膏がよく水に浸ったら、石膏べらで手早く、泡がなくなるようによくかきまぜる。この時、石膏がゆるすぎても濃すぎても絶対に石膏を足さないこと。

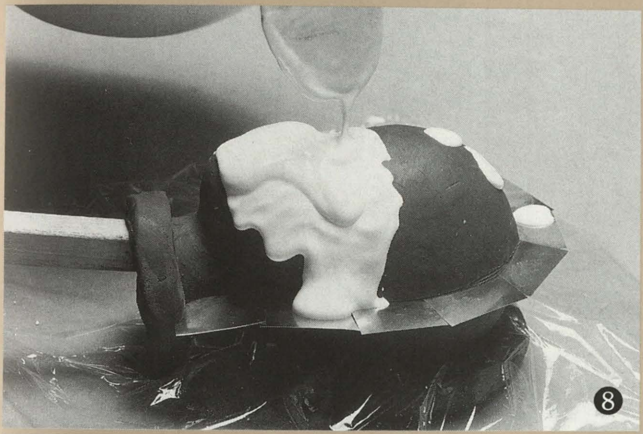
◉石膏をかける

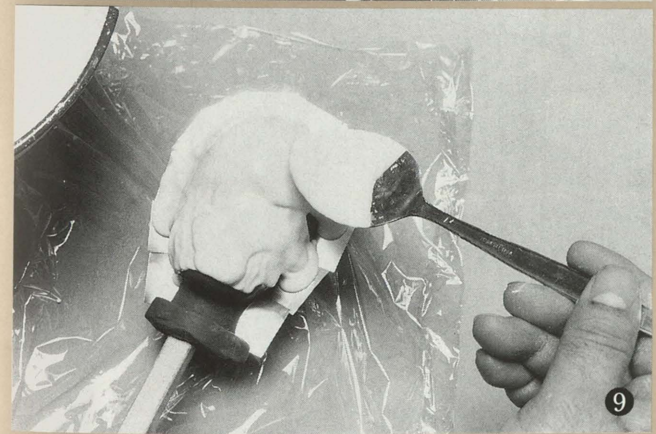
3-❻ 水でといた石膏をへらですくって、顔の目鼻など、凹凸のある部分にかける。

3-❼ 強く息を吹きかけて細部にできる気泡をなくしてから、さらに全体に石膏をかける。











3-❽ 顔面全体にもまんべんなくかける。

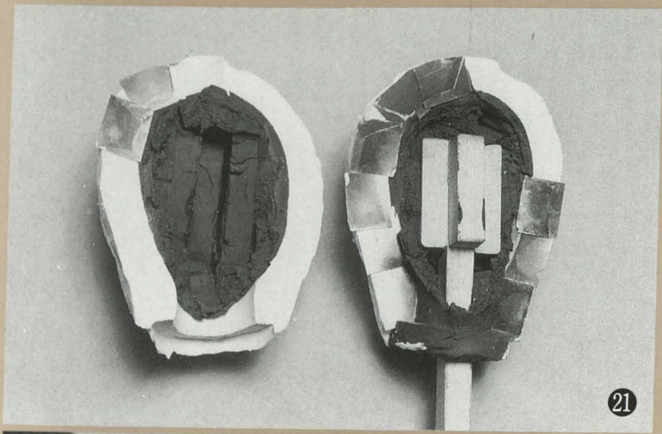
3-❾ 切り金から石膏がこぼれないように、また頭部をへらで傷つけないように注意する。

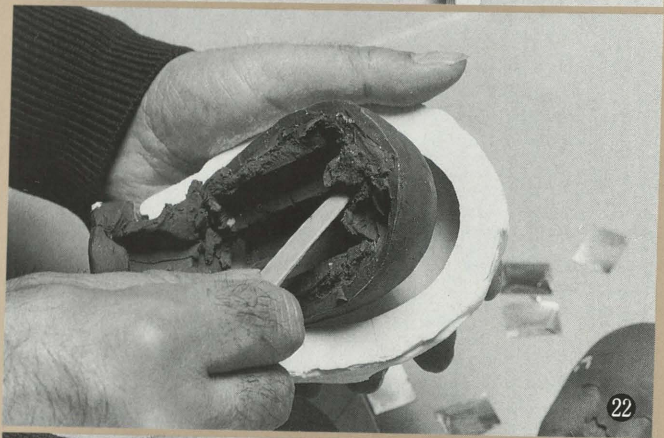
3-❿ 石膏が固まり始めるまで10〜20分待つ。

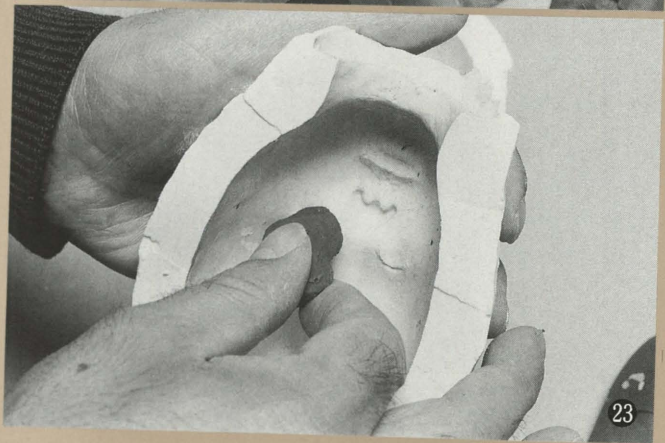
3−㉑ 顔面部分と後頭部に分かれた状態。

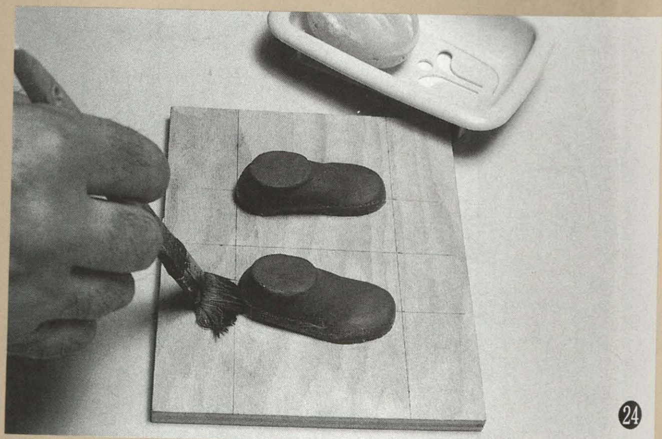
3−㉒ 竹べらで石膏の内側を傷つけないように、油土をかきだす。

3−㉓ 目鼻など細かい部分は、小さな油土の塊で押さえつけるようにするときれいに取れる。







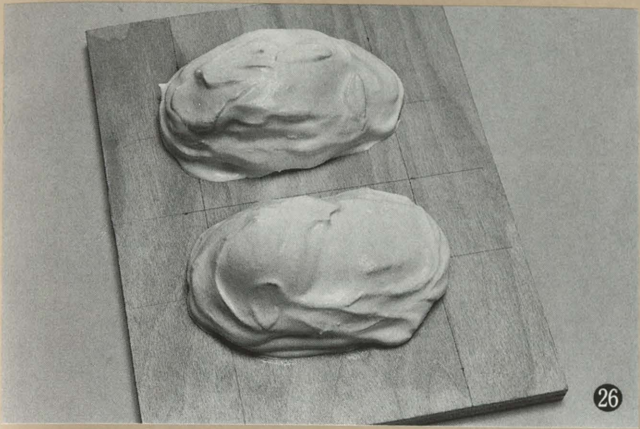


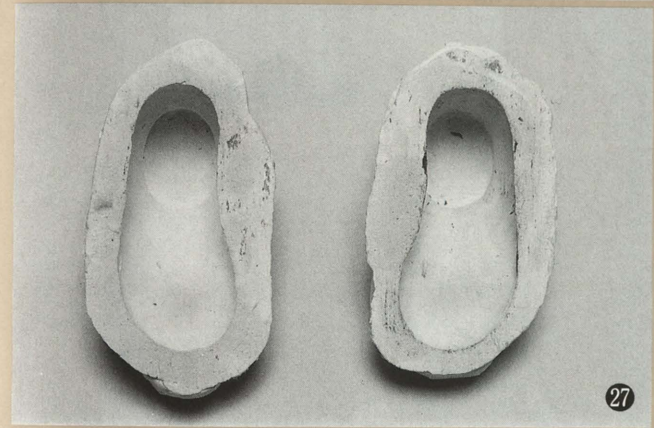


◉足の石膏どり

3−㉔ 足の周りの板にせっけん水を塗る。こうしておくと、後で石膏をはがす時にはがれやすい。

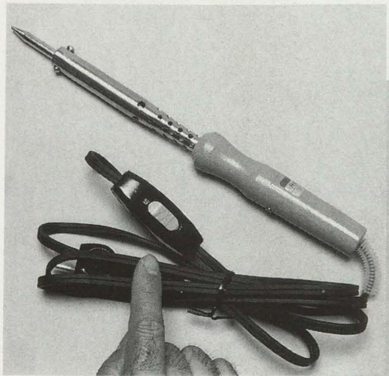
3−㉕ 頭部の時と同じ要領で石膏をかける。



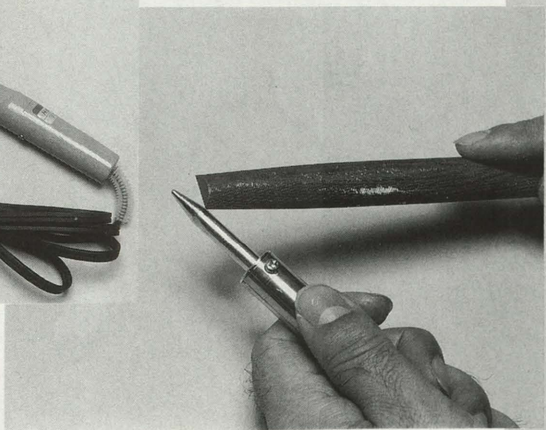


3−㉖ 石膏がよく固まるのを待つ。
3−㉗ 油土をぬく。

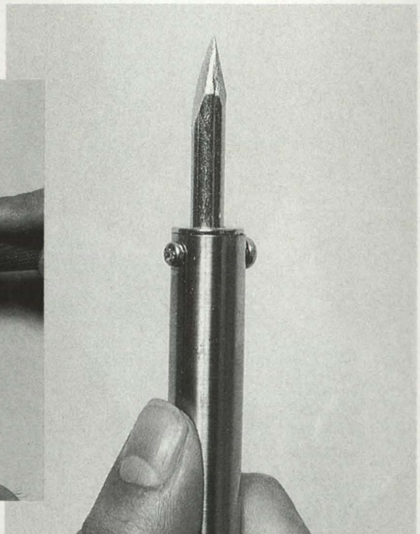
◉こてをつくる



❶熱の調節がしやすいように、切り換えスイッチのついていないものは、コードの手元に近いところに市販の切り換えスイッチをつける。



❷人形にこてをあてる時にあてやすいように先をやすりで削り、平らにする。



❸完成。



4
張り子

放送日 7月23日（火）
再放送日 7月24日（水）

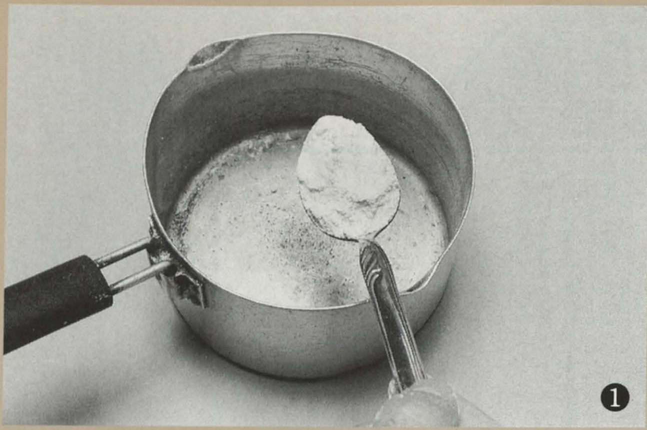


「張り子」

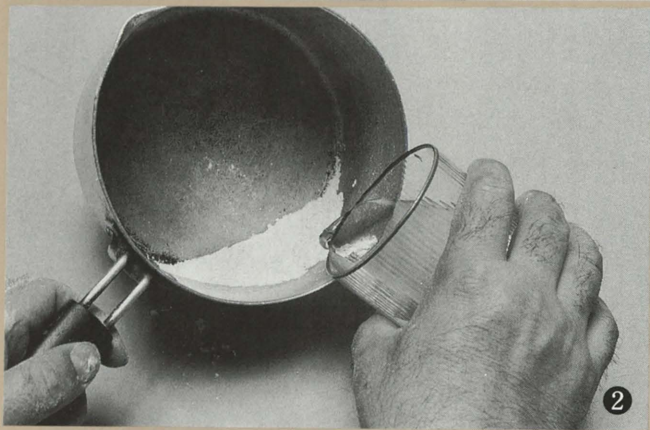
◉のりをつくる

4−❶ なべに小麦粉大さじ1杯を用意する。

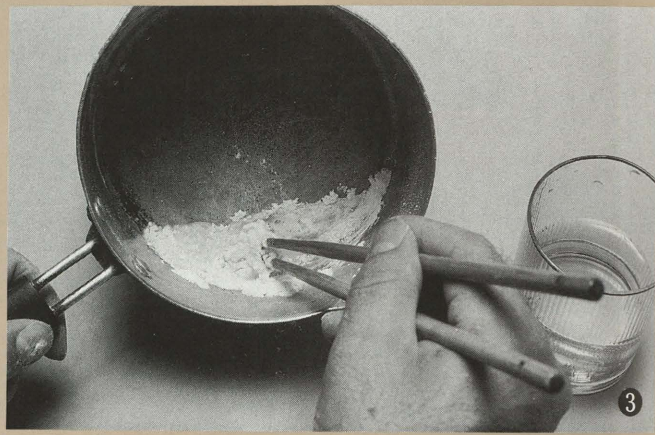
4−❷ それに100c.c.の水を少しずつまんべんなく入れる。



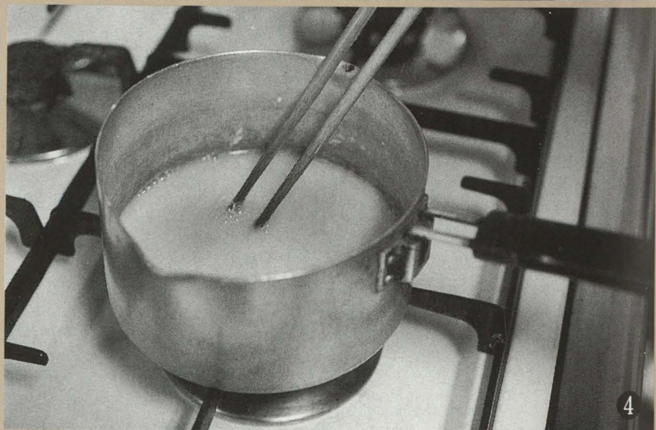
❶



❷



❸



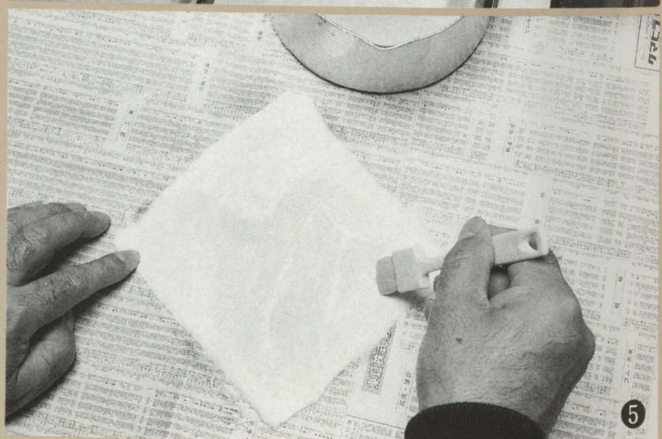
4

4−❸ 玉にならないようによくかきまぜながら、水を加えていく。

4−❹ 4〜5分弱火にかける。

◉張り子

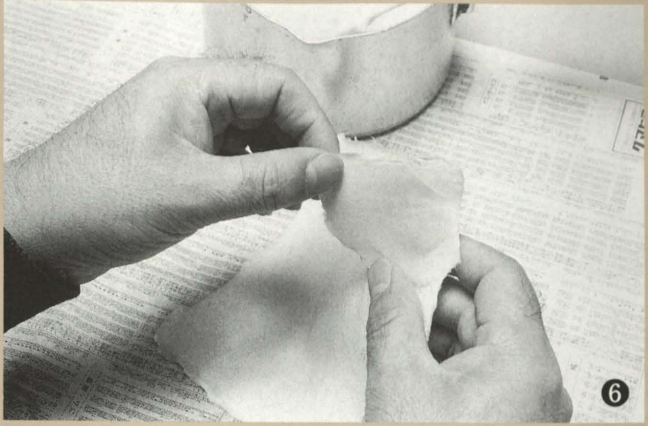
4−❺ 張り子紙の薄紙と厚紙を用意する。張り子紙の薄紙の片面にはけでのりを塗る。



❺

4-❻ 手で1辺が2～3cm角の正方形にちぎる。

4-❼ カーブ面にぴったりつくように、その周りに1cmほどの切り込みを入れる。



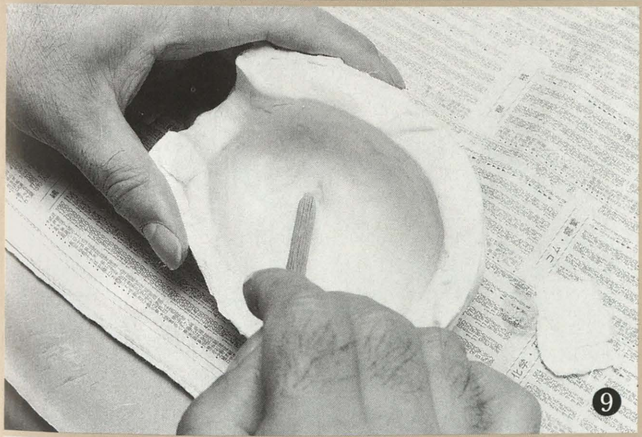
❻



❽



❼



❾



❿

4-❽ のりのついていない面を石膏の内側に合わせ、石膏の縁に紙がかかるようにはっていく。紙の角度を変え、紙があまり重ならないようにはり、紙の厚さを均等にする。

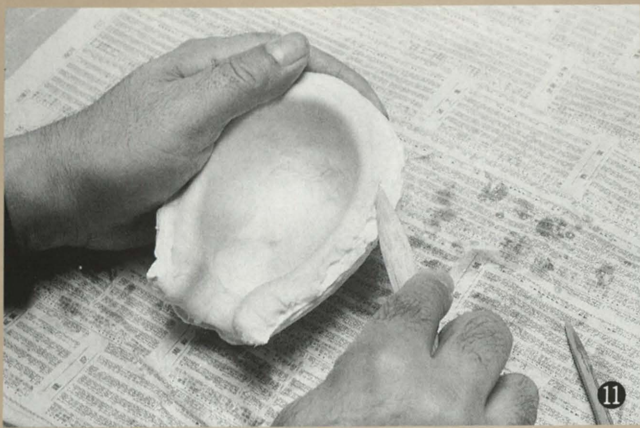
4-❾ 内側全体に薄紙をつけ、目鼻口など細かいくぼみは、指先や竹べらを使ってしっかり押さえる。

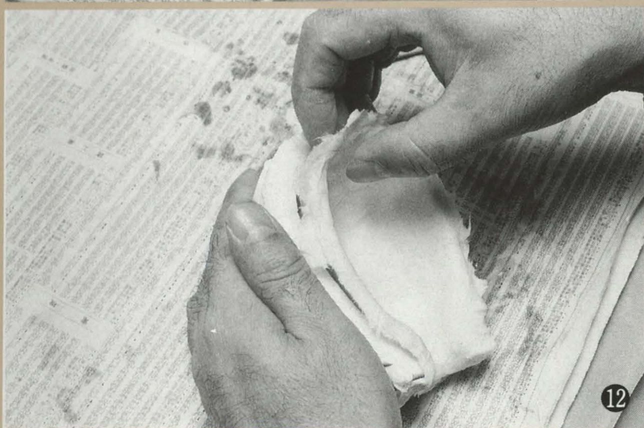
4-❿ 薄紙を2～3回、厚紙を4～5回繰り返し、張り子の厚さが3mmぐらいになるまで指でしっかり押さえながらはっていく。ふちの角などもしっかり押さえておく。はり終わったら、表面をしっかり指で押さえる。後頭部も同じようにしてはり、顔面部分と同じ厚さにする。

◉石膏型から張り子をぬく

4−⓫ 竹べらで張り子の縁を持ち上げる。

4−⓬ 上の方からあごに引っ掛からないように、型をぬいていく。











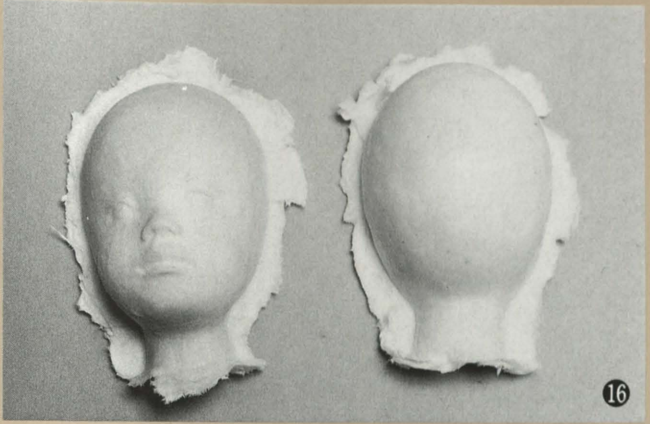
4−⓭ ぬいた状態。

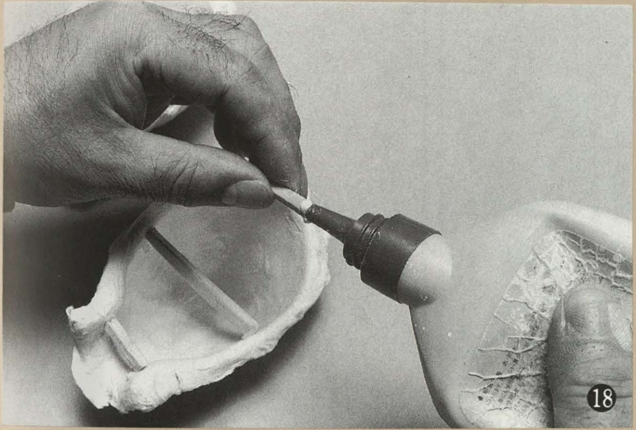
4−⓮ 表面のけばだちを糊をつけたはけで直す。

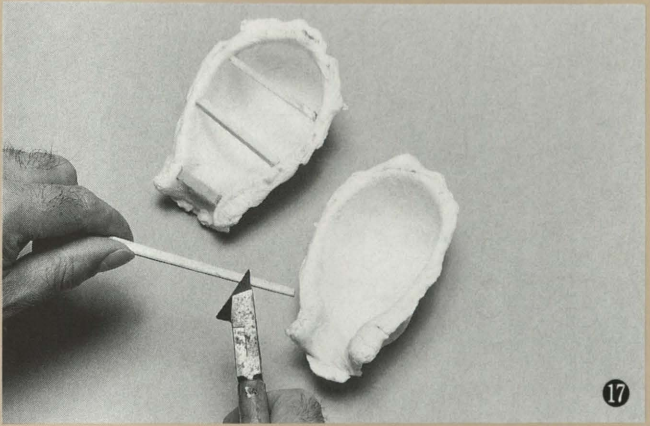
4−⓯ 目鼻口は、竹べらで丁寧に押さえておく。

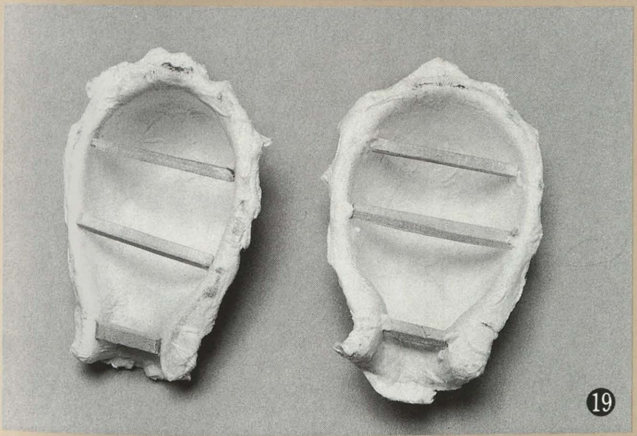
4−⑯ 後頭部も同様にしてぬく。

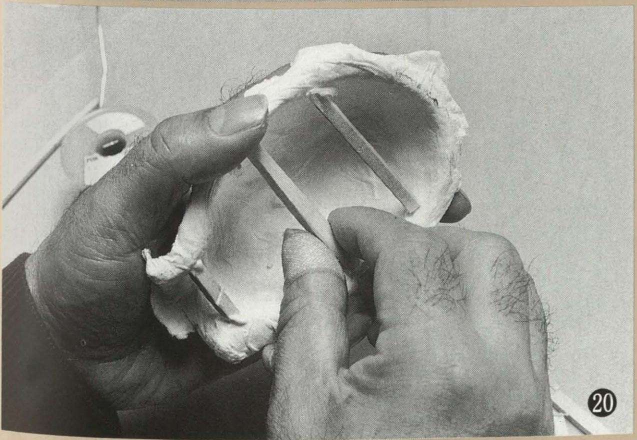
4−⑰ わりばしを張り子の内側に合わせて、顔面部分、後頭部それぞれ3本ずつ切っておく。


⑯


⑱


⑰


⑲


⑳

4−⑱ 張り子が乾ききらないうちに、それをボンドではる。こうしておくと乾く時に型くずれしない。

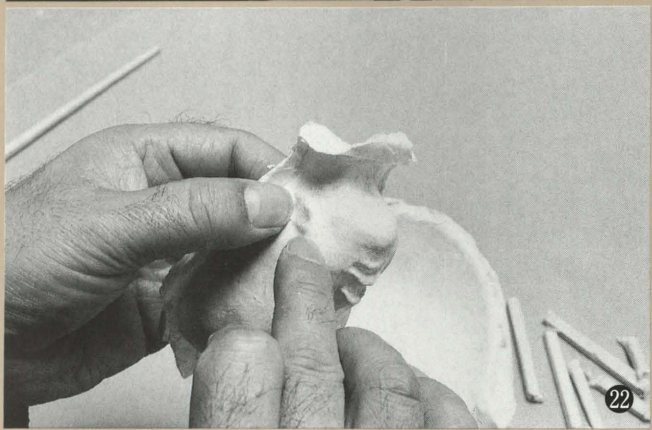
4−⑲ 後頭部も同様にしてボンドではる。

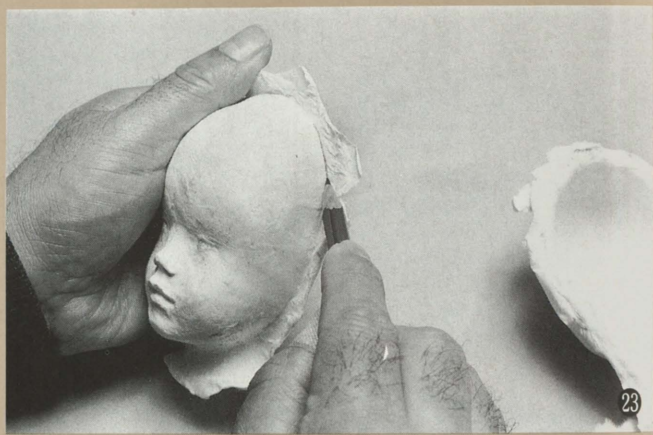
4−⑳ 完全に乾いたら、わりばしをはずす。

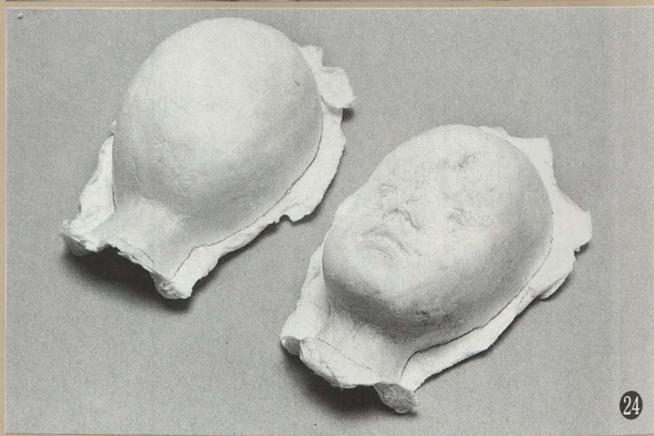
4-㉑ 表面はこてをあててなめらかにする。

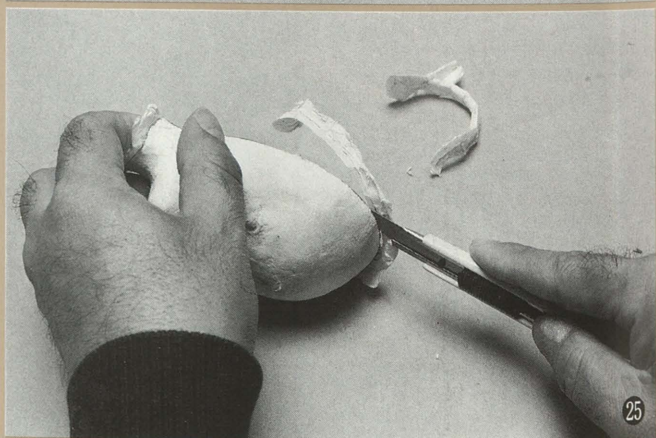
4-㉒ 部分的な修正はボンドをつけた紙を足し、こてで押さえて補修する。こては少しこげるぐらいの熱さにしておく。











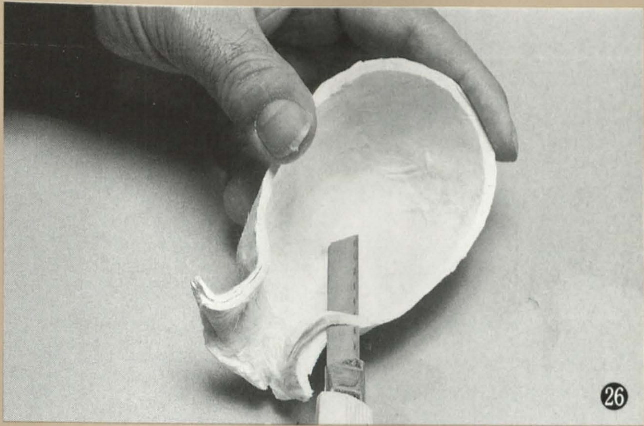
4-㉓ 顔面部分と張り子の縁のはみでている部分の境目に線を引く。

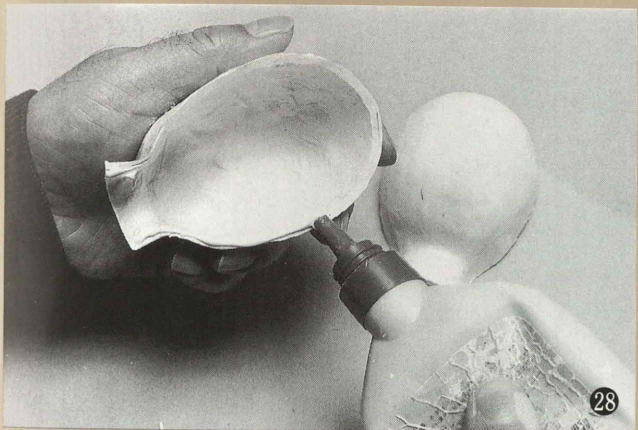
4-㉔ 同じように、後頭部の境目にも線を引く。

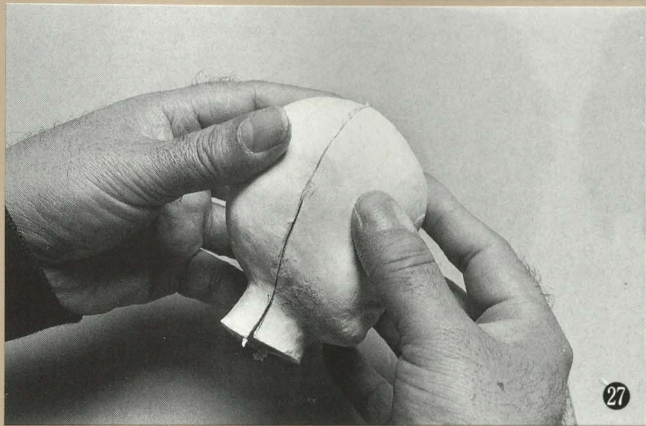
4-㉕ 線にそってカッターで縁を切りとる。

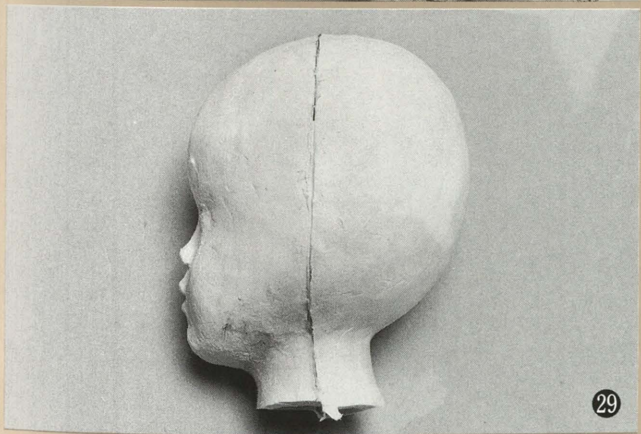
4−㉖ 切り口は接着しやすいように顔面部分、後頭部に対して、それぞれ直角になるようにする。

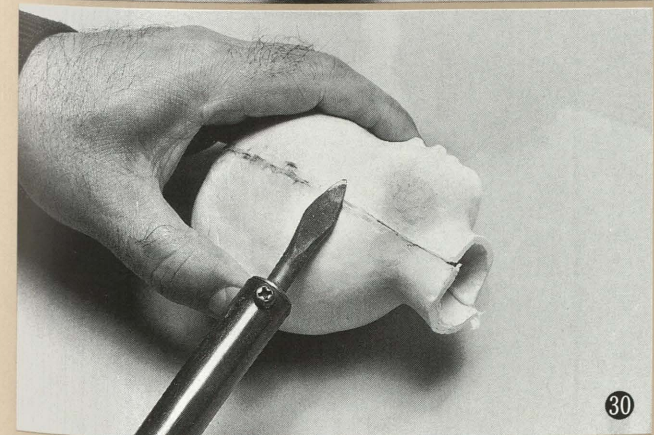
4−㉗ 顔面と後頭部を合わせ、ぴったりになるように、切り口をカッターで調節する。


㉖


㉘


㉗


㉙


㉚

4−㉘ 切り口にボンドをつける。

4−㉙ 顔面と後頭部をはり合わせる。

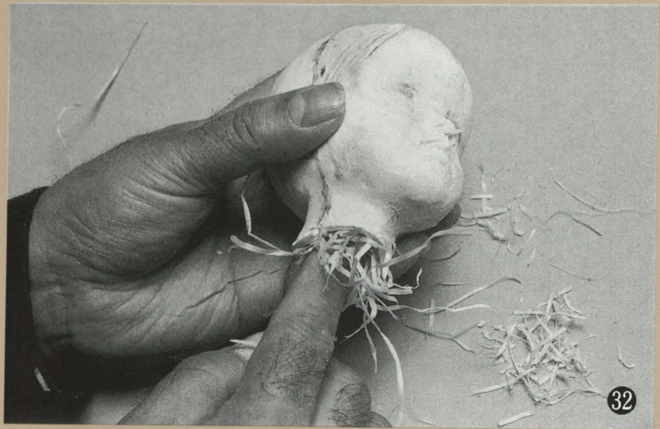
4−㉚ 顔面と後頭部に段差がある場合は、カッターで削ったり、張り子紙をはり、こてで押さえるなどして修正する。

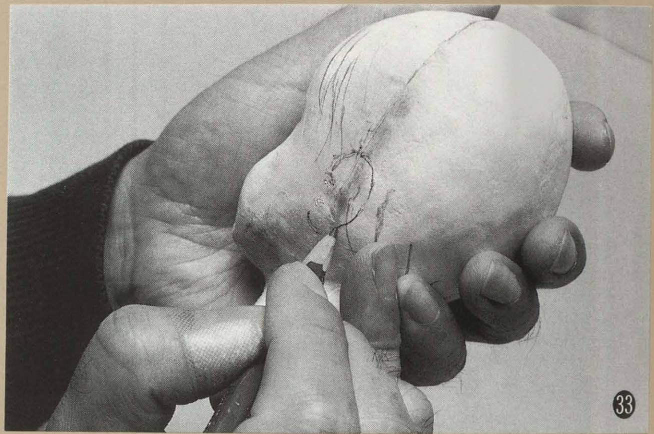
◉頭部に耳をつける

4−㉛ 顔の感じをつかむために、目、髪を鉛筆で描く。

4−㉜ 木毛を詰める。


㉛


㉜

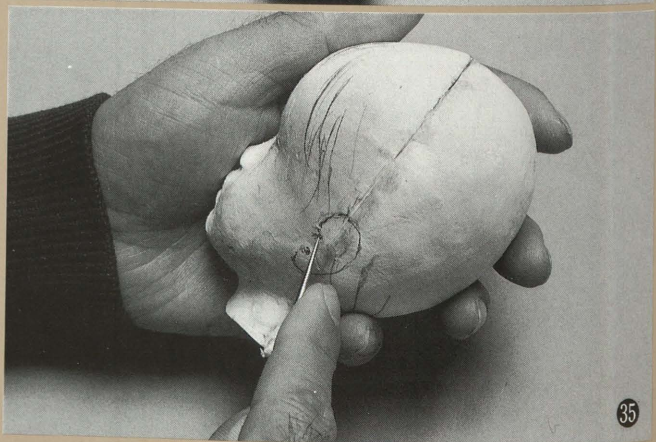

㉝


㉞

4−㉝ 左右均等に耳の位置を描く。

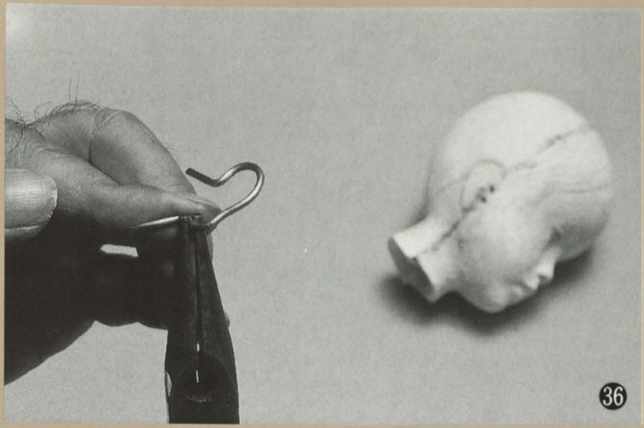
4−㉞ 子供なので耳を顔の下のほうにつけるのがポイント。

4−㉟ 耳のつけ根にあたる部分の上下2か所に、目打ちで穴をあける。

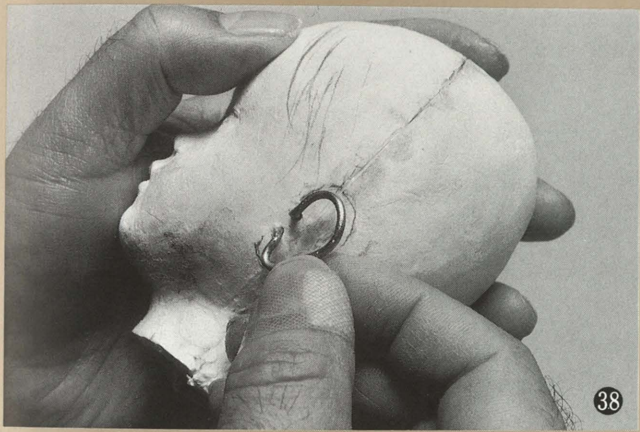

㉟

4-㊱ 約7cmのヒューズ2本を耳の形に曲げる。頭部に差し込む部分はヒューズの両端を1cmぐらいのところで直角に折り曲げ、先を斜めに切ってとがらせる。

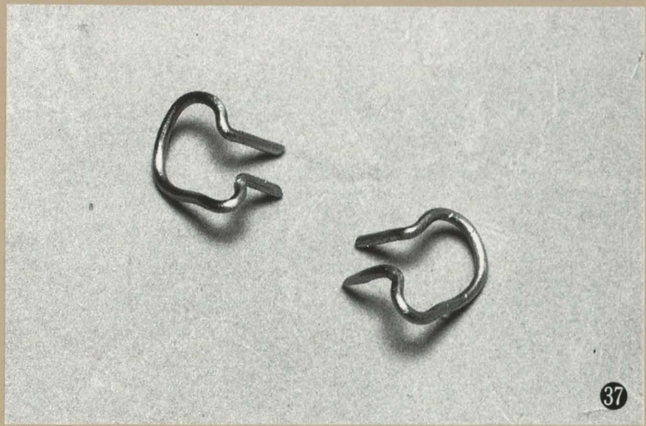
4-㊲ 2本とも同じ形になるように調節する。



㊱



㊳

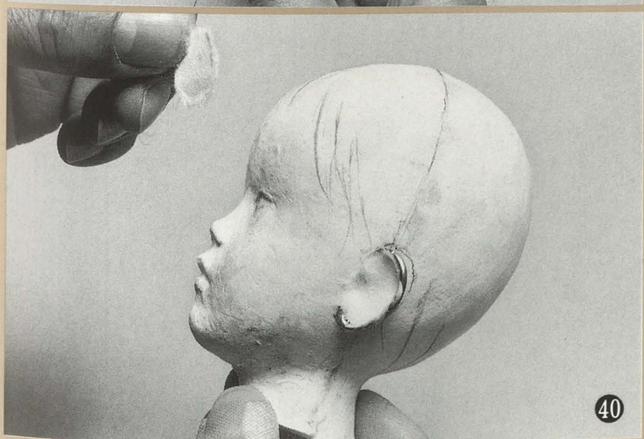


㊲



㊴





㊵

4-㊳ 頭部に差し込み、根元を少し後頭部のほうにそらせる。

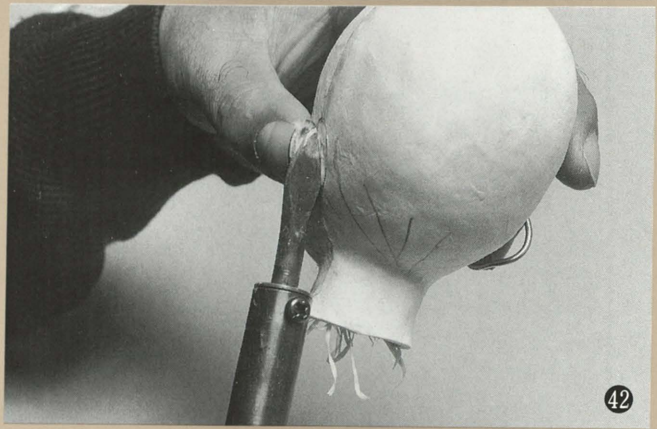
4-㊴ 左右のバランスをよく見て調整する。

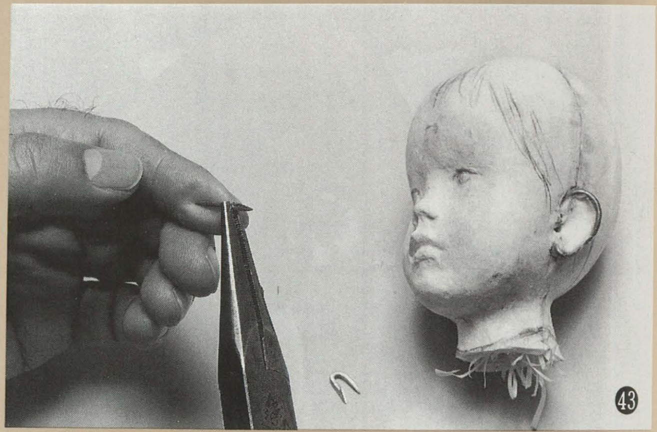
4-㊵ ボンドで薄紙をヒューズの内側にはりこむ。



4−❹❶ ヒューズの部分が耳のふくらみになるので、紙があまりかぶさらないようにし、耳の厚みをつけていく。

4−❹❷ 耳の裏の付け根の部分にもしっかり固定するように紙をはり、こてで押さえておく。









4−❹❸ 耳の付け根の少し内側に目打ちで2つ穴を開け、約2cmのヒューズを真ん中で曲げる。先は斜めに切ってとがらせておく。

4−❹❹ 穴に差し込んで耳の前の部分のふくらみをつくる。

4−❹❺ 左右が同じ位置になるように気をつける。

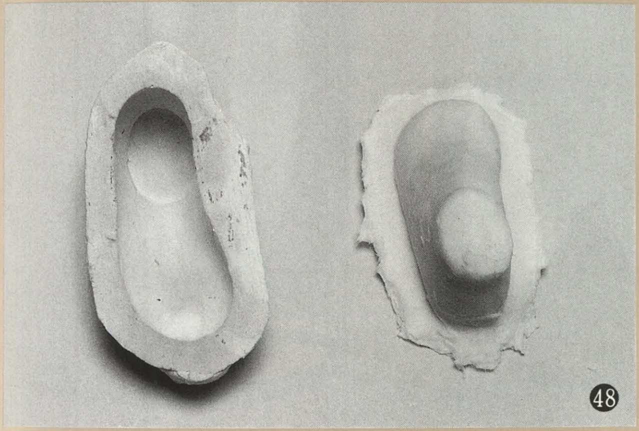
◉足の張り子と型ぬき

4−㊻ 頭部と同じ要領で張り子をする。

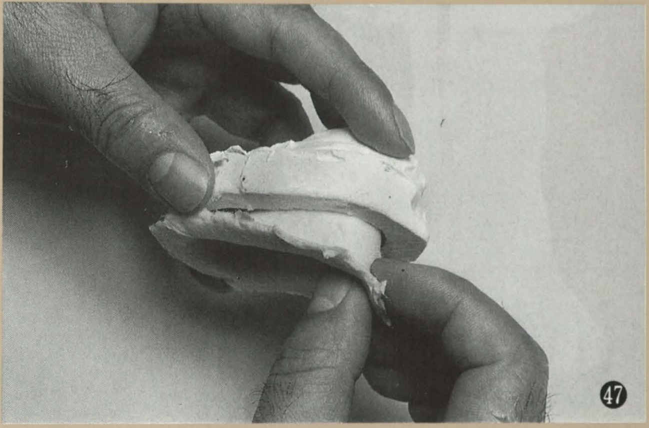
4−㊼ 型から張り子をぬく。



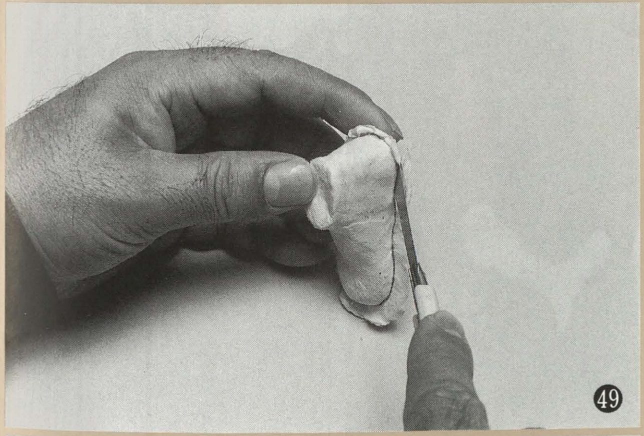
㊻



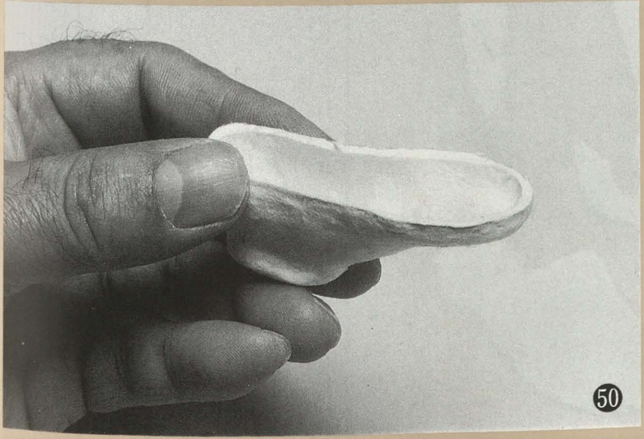
㊽



㊼



㊾

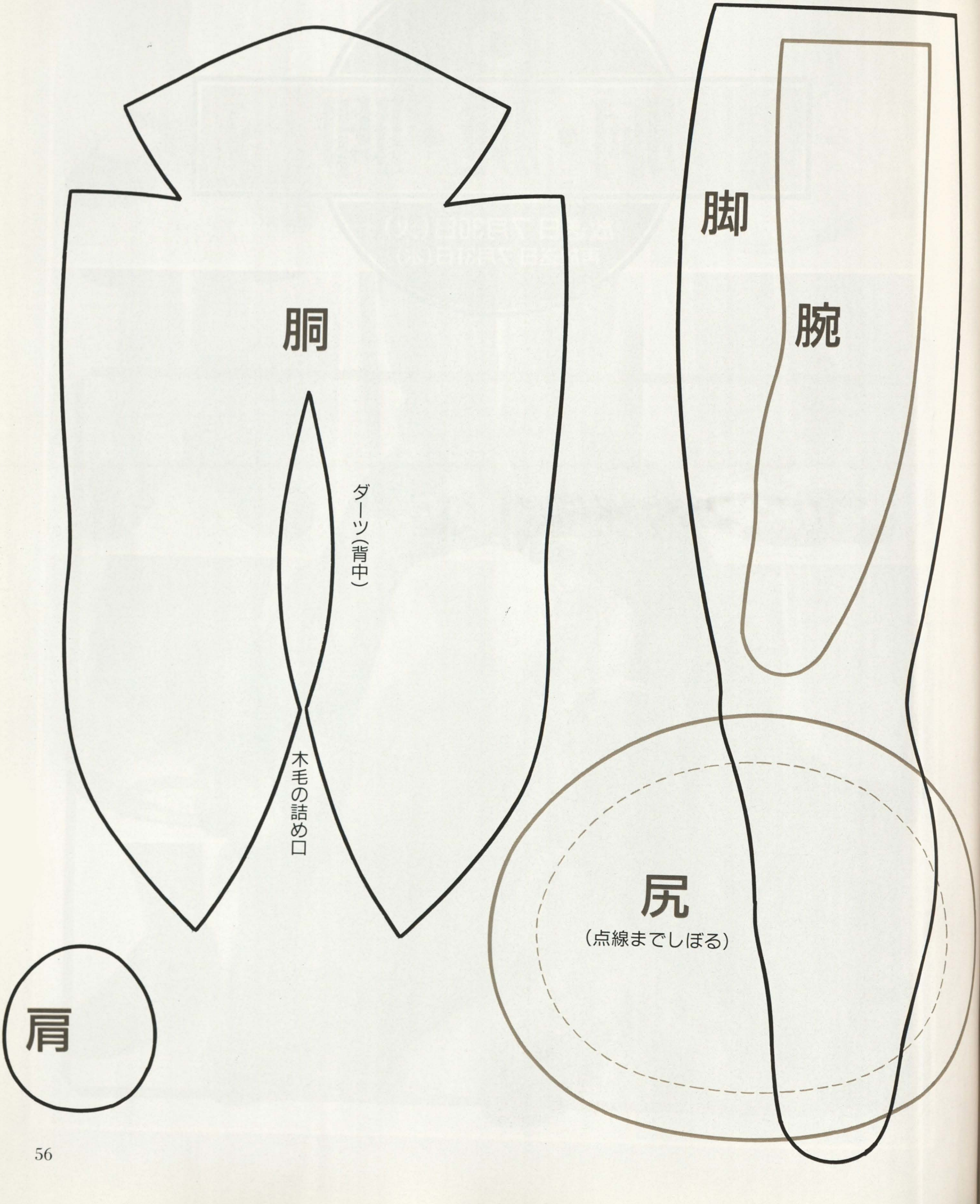


㊿

4−㊽ よく乾燥させる。

4−㊾ 縁と足の境目に線を引き、カッターで切る。

4−㊿ 切った状態。

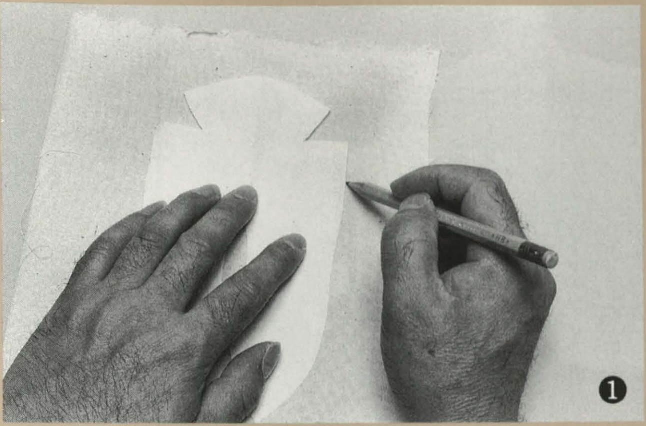

胴
ダーツ（背中）
木毛の詰め口
脚
腕
尻
（点線までしぼる）
肩

「ボディーをつくる」

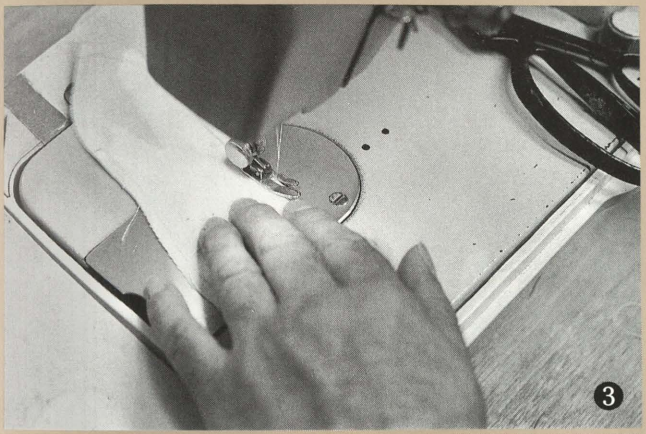
◉ボディーの型紙を布に写し、ミシンで縫う

5−❶ 25cm四方の天竺1枚に胴体の型紙をのせ、型をとる。腕、脚については、25cm四方の天竺2枚を重ねて型をとる。

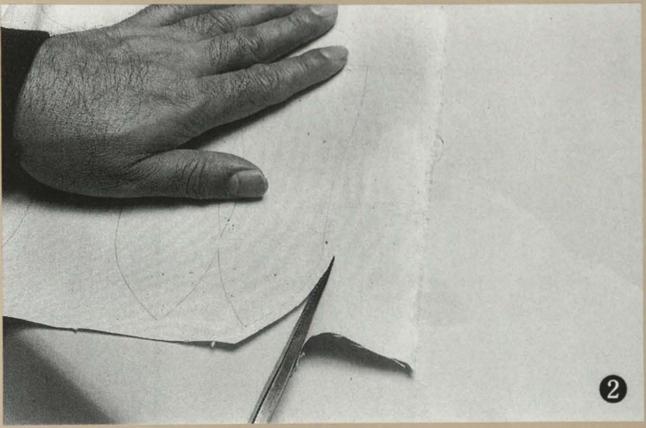
5−❷ 縫いしろを5mm残して、周りを断ちばさみで切る。



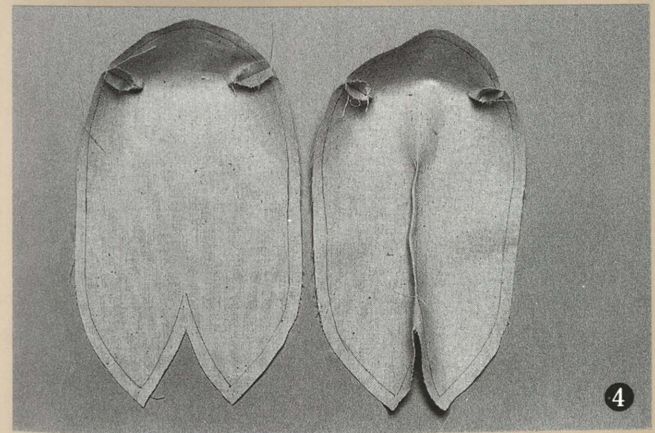
❶



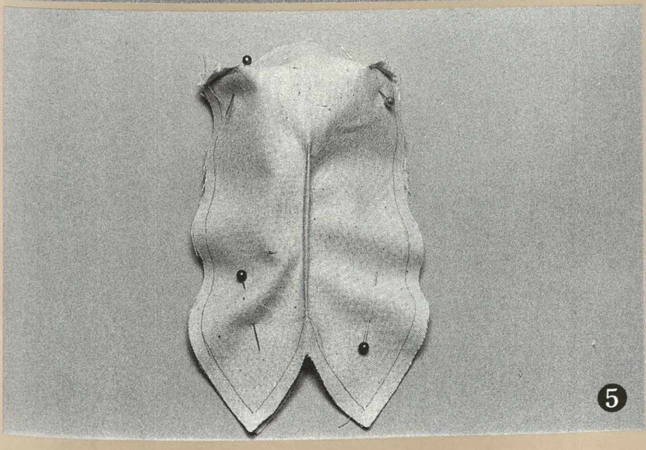
❸



❷



❹

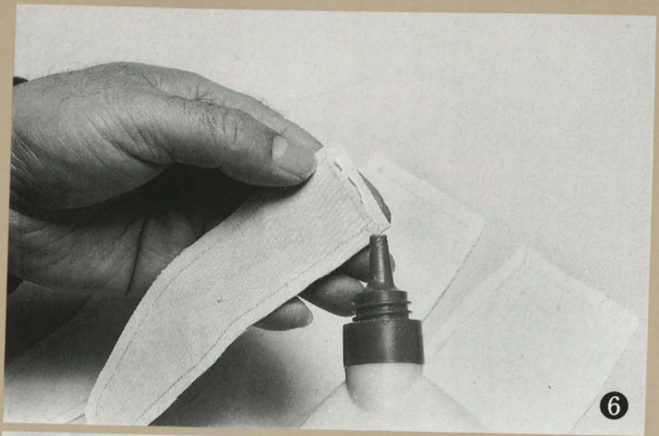


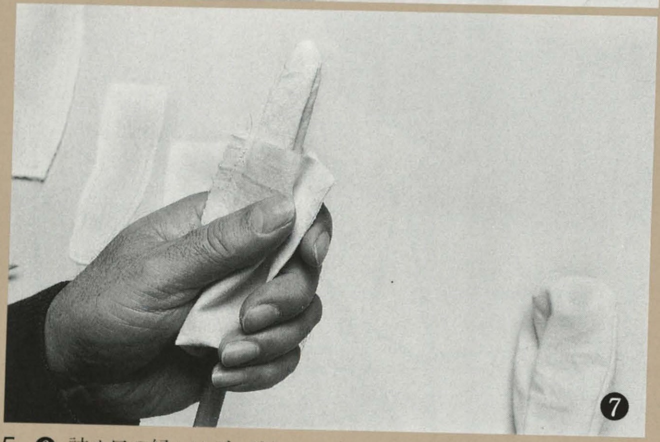
❺

5−❸ 腕、脚は木毛の詰め口を残して型のとおりにミシンで縫う。前身ごろ、後ろ身ごろはそれぞれ、ダーツ部分を縫い合わせる。

5−❹ ダーツが体の丸みをつくる。

5−❺ 前身ごろと後ろ身ごろを合わせ、まち針で止め、詰め口以外はミシンで縫い合わせる。

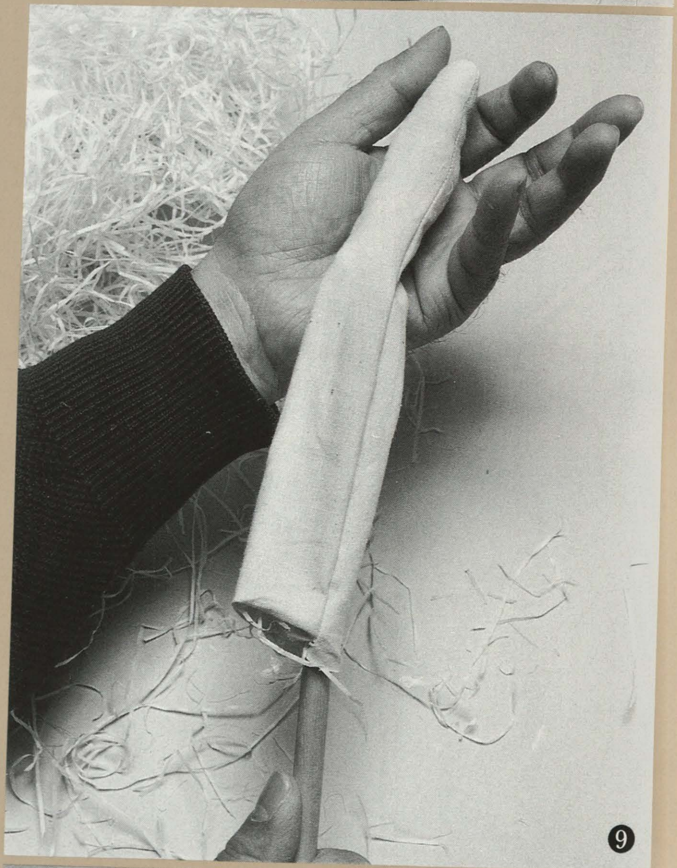


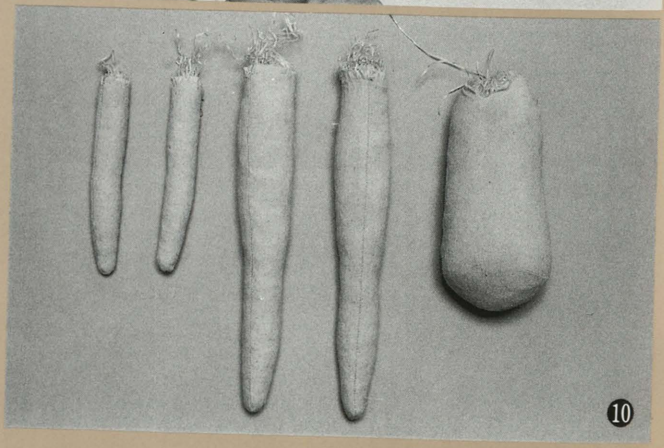


5−❻ 詰め口の縁にはボンドをつけ、布がほつれてこないようにする。ボンドは目打ちの先につけて、のばすようにする。

5−❼ 胴、腕、脚をそれぞれ袋の底まできちんと裏返す。細い部分には詰め棒や菜ばしを使うとよい。







◉木毛（もくげ）をつめる

5−❽ 胴の中に木毛を詰める。親指にグッと力を入れて、重さが約50gになるようにしっかり詰める。

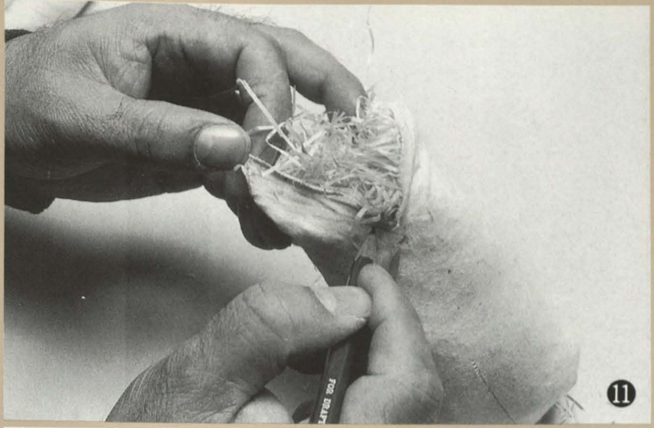
5−❾ 腕、脚は詰め棒を使い、奥のほうにまでよく木毛が詰まるようにしっかり入れる。

5−❿ 胴、脚、腕に木毛が詰まった状態。

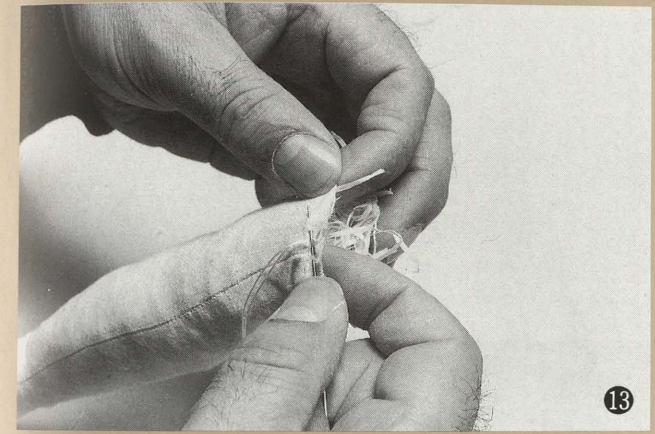
◉縫いしぼり

5-⓫ 胴は、詰め口の端から5㎜ぐらいのところに線を引く。

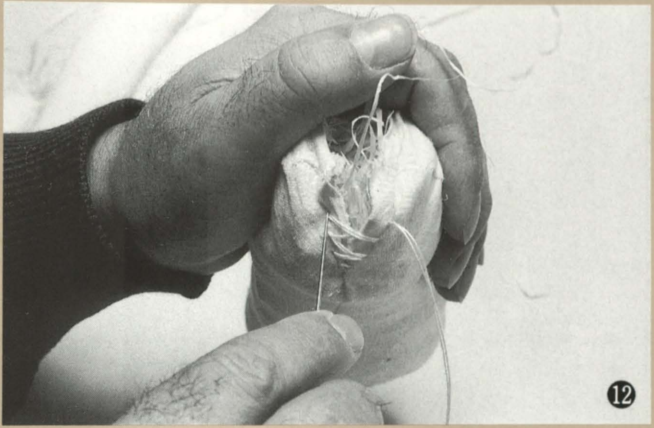
5-⓬ ふとん針にテント糸や穴糸など丈夫な糸を通して、線にそって詰め口を縫い合わせる。



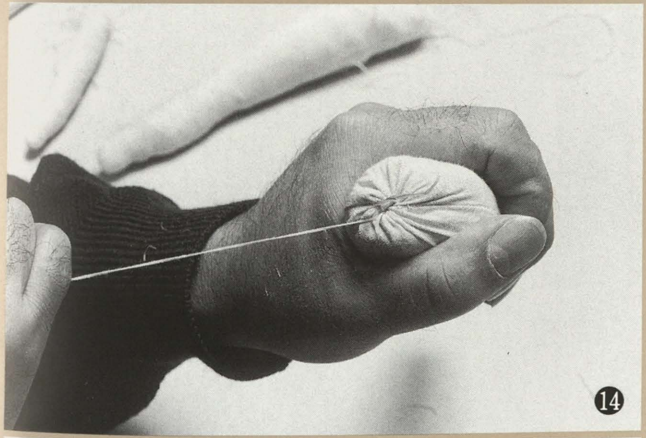
⓫



⓭



⓬



⓮



⓯

5-⓭ 腕、脚は詰め口の端から5㎜ぐらいのところをぐるっと周りを縫う。

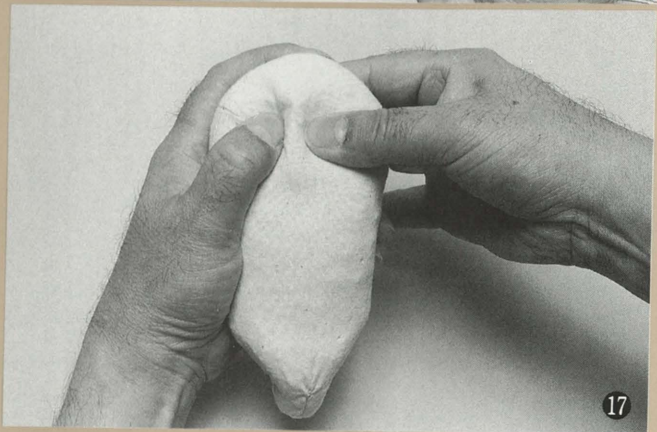
5-⓮ 糸を引き、硬く詰め口を閉める。

5-⓯ 目打ちで中の木毛を移動させ、形を整える。胴と脚の付け根の部分は互いがぴったり添うように、断面を斜めにする。

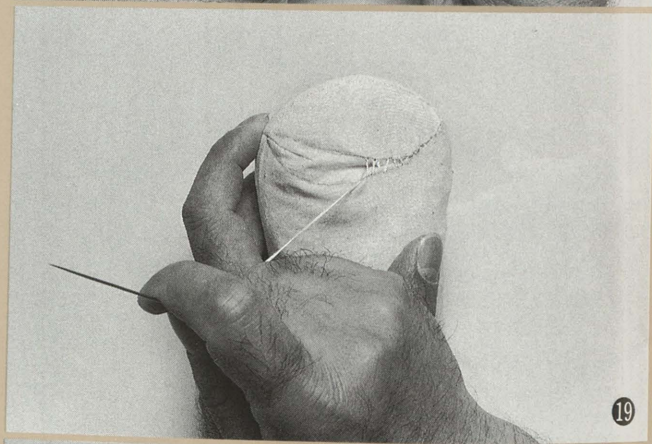


5−⑯ 胴の脚の付け根の中心を3～4回、糸を強く引っ張りながら縫う。

5−⑰ 胸に詰めた木毛をよくもんで柔らかくする。



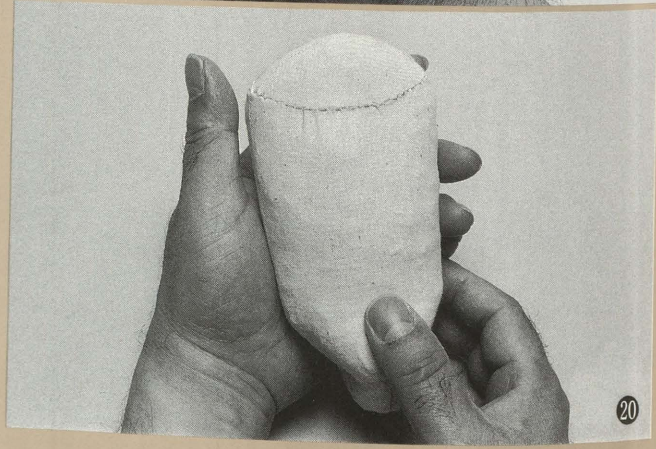




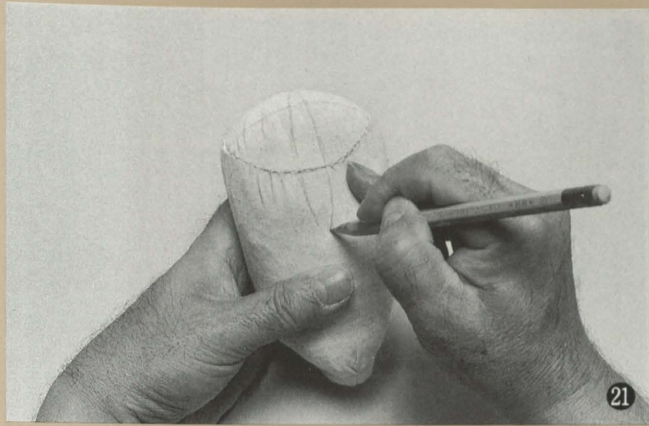
5−⑱ 柔らかくした胸に鉛筆で三日月形に線をひく。

5−⑲ 線にそって縫いしぼっていく。

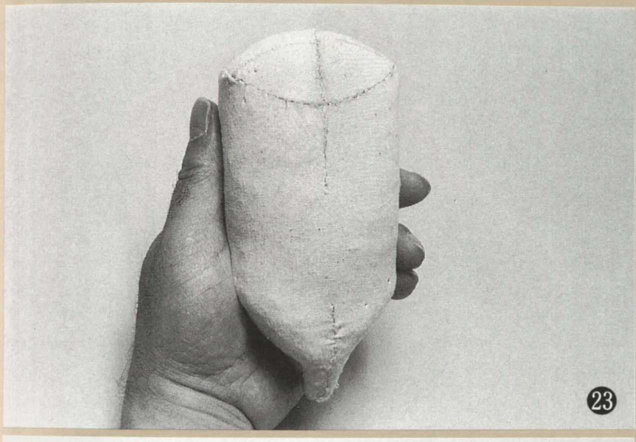
5−⑳ 胸の縫いしぼり終了。

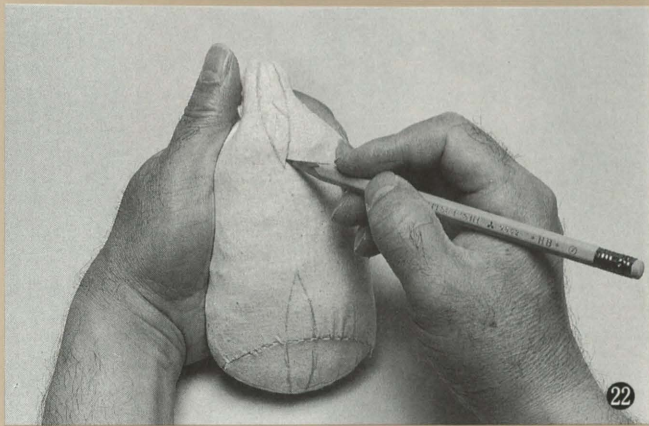


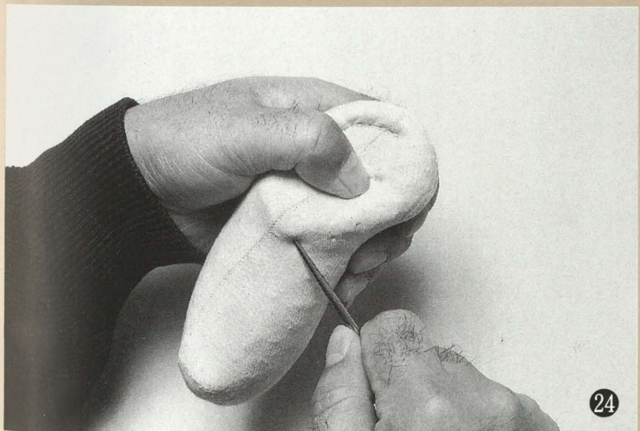
5-㉑ 首から胸にかけて鉛筆で線をひく。
5-㉒ 股にも同様に線をひく。

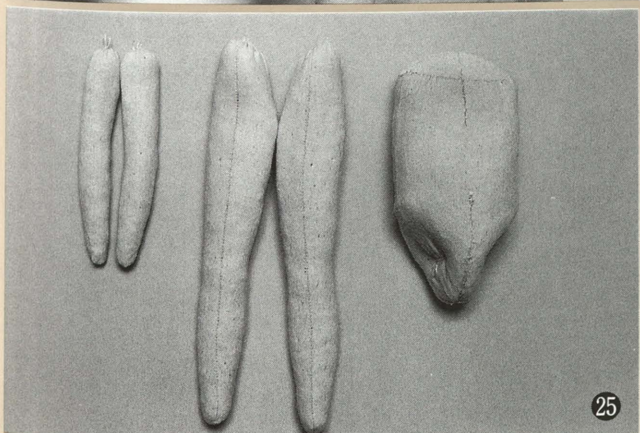


5-㉓ それぞれを胸の場合と同じように縫いしぼる。
5-㉔ 目打ちで腰の部分に木毛を引き上げて、脚のつけ根の形をつくる。
5-㉕ 縫いしぼり終了。





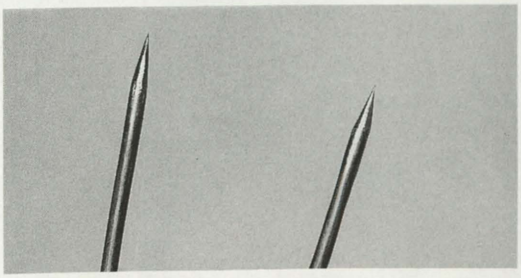




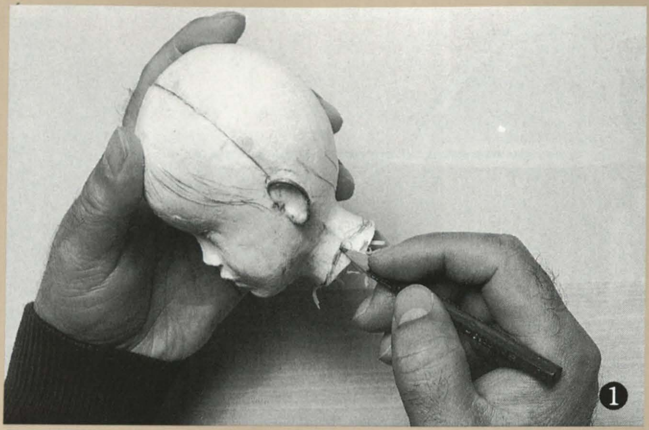
◉針金の先を尖らせる

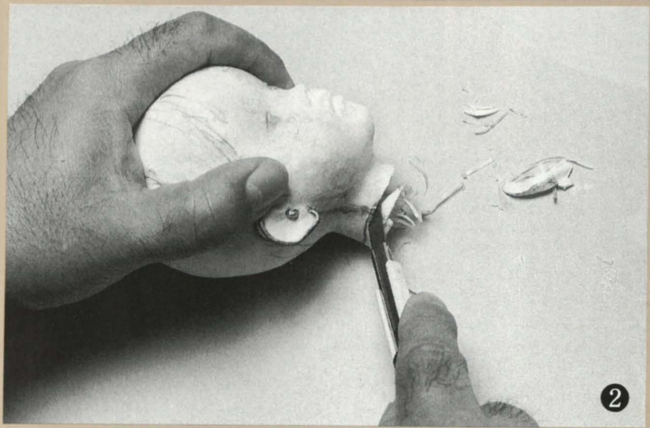


❶板のふちをやすりで削り、みぞを作る。
みぞに針金をあて、その先をやすりで削って尖らせる。



❷目打ちの先のように鋭くする。





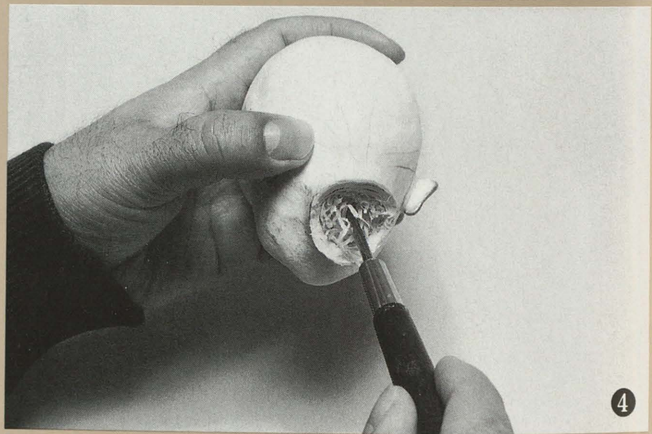


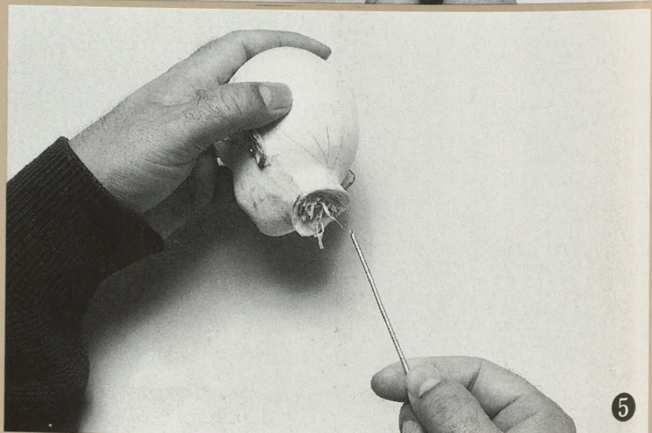
「頭部に布をはる」

◉胴に頭部をつけ、型をつける

6−❶ 頭部の首の縁が、胴にぴったり添うように線を引く。

6−❷ 線にそってカッターで切る。

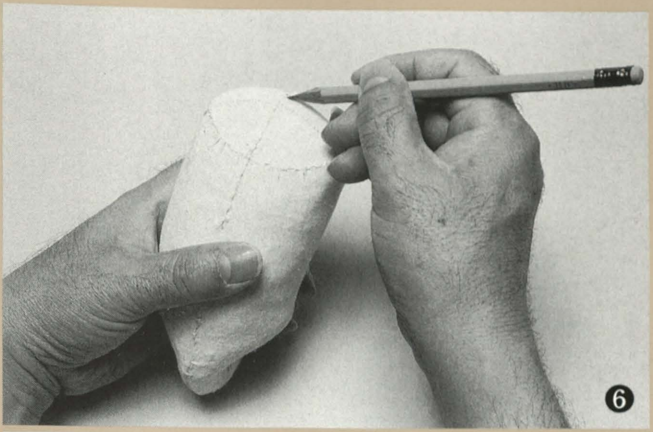


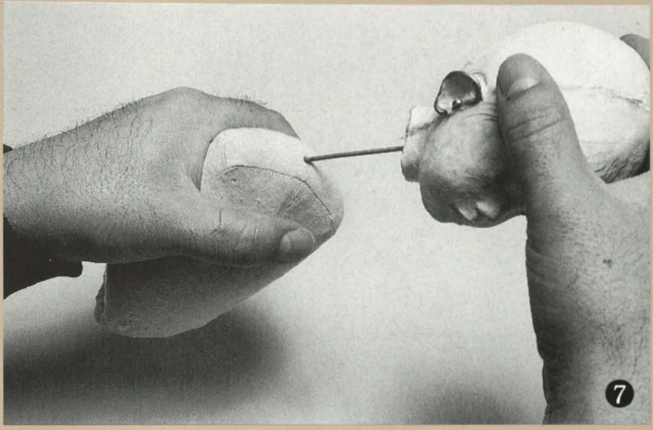


6−❸ 胴に合わせながら、切り口を調節する。

6−❹ 首の中心に千枚どおしで穴を開ける。

6−❺ そこに14＃の針金10cmのものを奥まで差し込む。

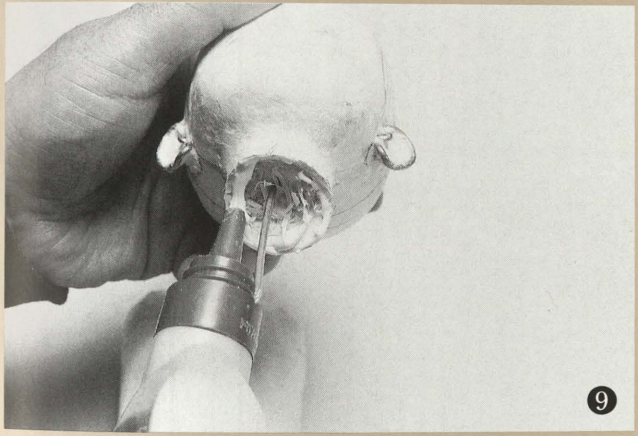


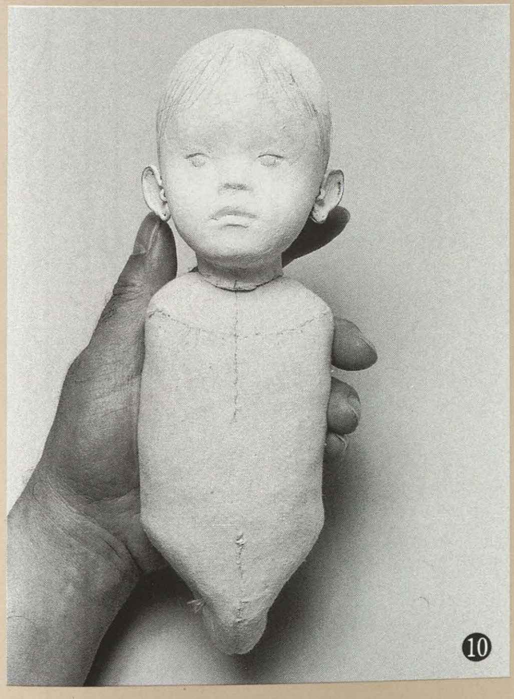


6−❻ 首の位置に印をつけ、穴を開ける。

6−❼ 首の穴に頭部に差した針金を差し込む。







6−❽ 位置がずれないように、首と胴の接着部分に印をつける。

6−❾ 首の切り口にボンドをつける。

6−❿ 胴と頭部を接着する。





6-⓫ 段差のある部分は張り子紙をはる。
6-⓬ こてで押さえて表面をなめらかにする。







6-⓭ 胴と頭部の接着終了。
6-⓮ ボール紙を接着剤で肩の部分につける。
6-⓯ まち針で仮に止めておく。

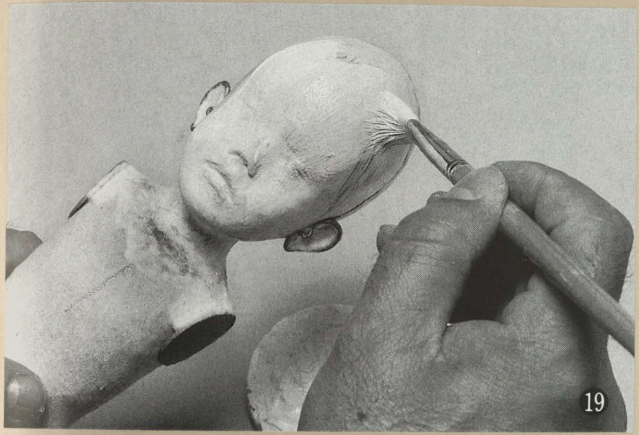
6－⑯ 肩とボール紙のすき間に張り子紙をはる。

6－⑰ 肩の整形(前)。

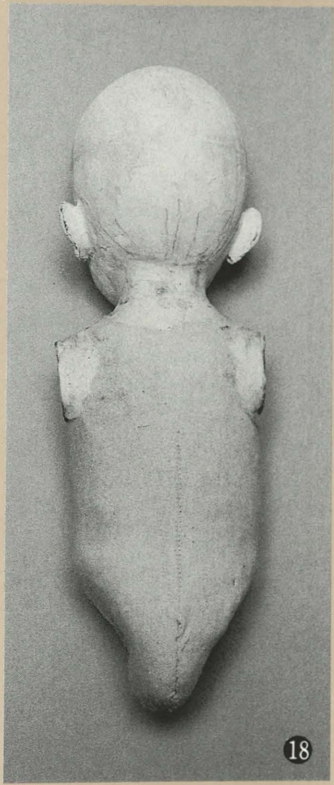
6－⑱ 肩の整形(後)。



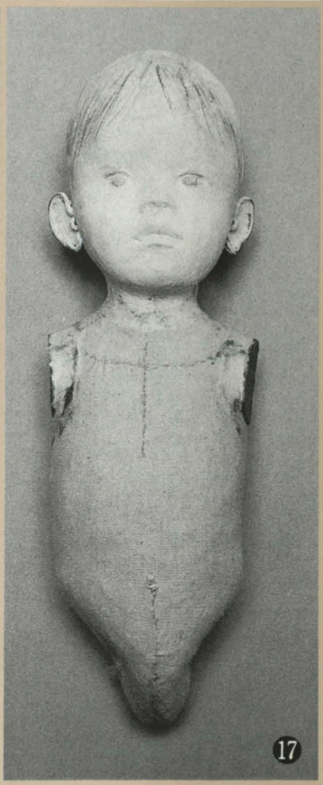
⑯



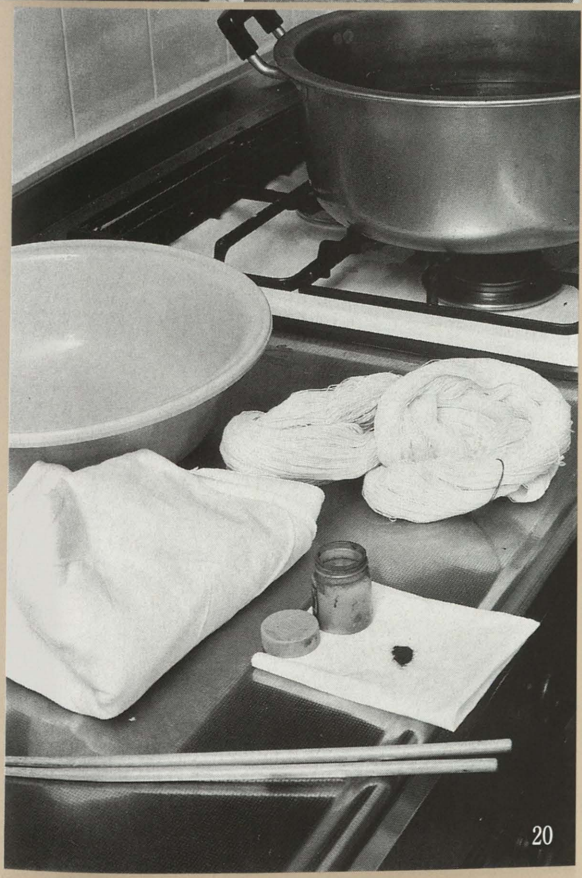
19



⑱



⑰



20

◉頭部にジェッソを塗る

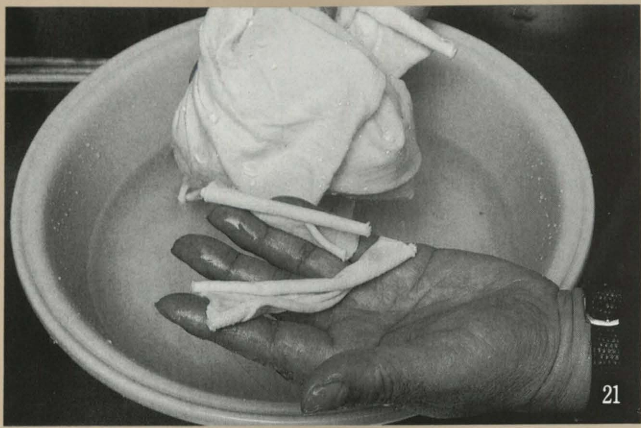
6－⑲ 頭部全体から胸のあたりにかけて、ジェッソを塗り、こげた部分や鉛筆の線を消す。

◉肌色に染めた布を頭部に張る

6－⑳ メリヤス(30cm×100cm)、白毛(18g)、染め粉(ブロンとダークブラウン)、わりばし、大きめのなべ、洗面器を用意する。白毛は数か所糸で止め、絡まないようにしておく。

6-㉑ メリヤスは試し用のはぎれを2、3枚用意し、よく水に浸しておく。

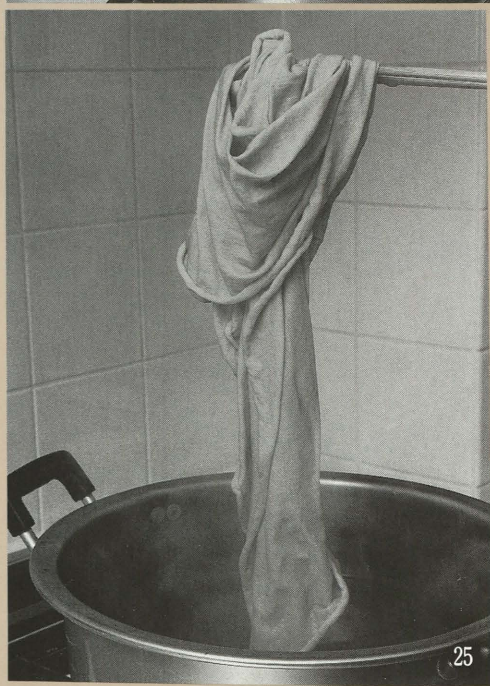
6-㉒ なべに水を入れ、沸騰してきたらわりばしの先にブロンの染め粉をすくい、なべに入れる。


21


22


23


24


25

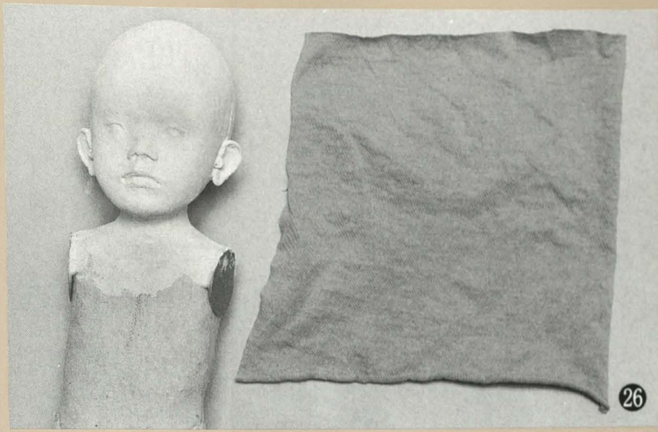
6-㉓ その中にメリヤスを入れる。

6-㉔ はしでかき混ぜながら、ころあいを見てはぎれを取り出し、アイロンをかけて色具合を見る。

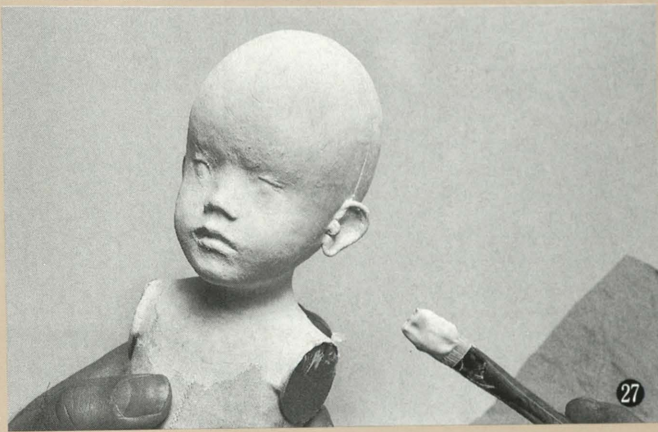
6-㉕ ちょうどいい色に染まったら、なべから引き上げ、よくすすぎ、しぼって乾かす。同じように白毛はダークブラウンの染め粉で染める。

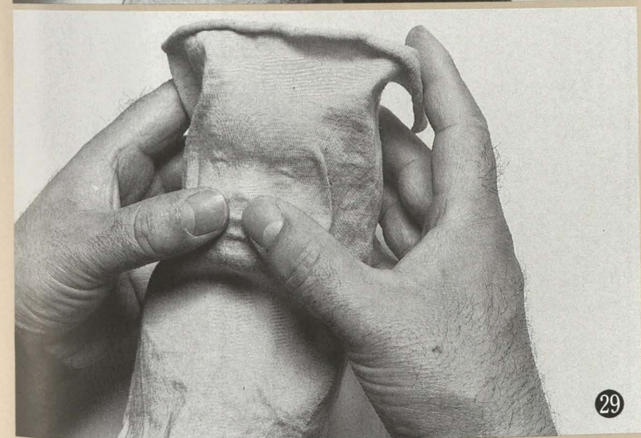
6-㉖ 染めたメリヤスを横18cm、縦15cmぐらいの大きさに、布の目にそって切る。

6-㉗ ボンドを少量筆にとり、顔面から首にかけてむらのないように塗る。むらができると、顔の表面が凹凸になってしまうので、気をつける。









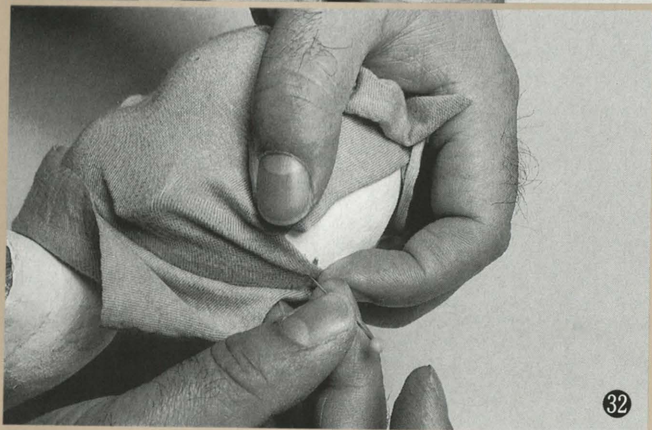


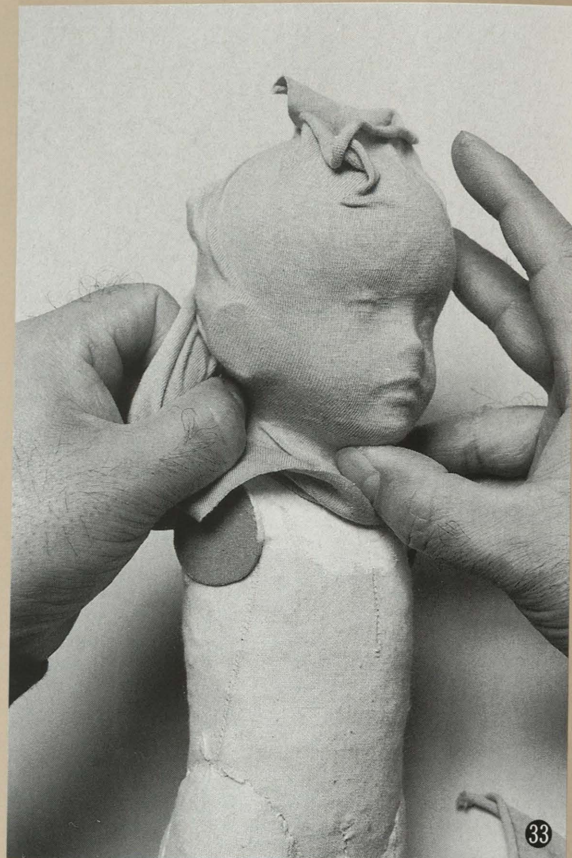
6-㉘ メリヤスの縦目に合わせて、顔の中心にはる。

6-㉙ 鼻筋から口にかけて、細かい部分をよく押さえる。

6-㉚ 布の目が荒くならないように注意して、顔面から後頭部に布を引っ張る。







6−㉛ 次にあごの下に布を引っ掛け、ほほから耳の後ろにかけて引っ張る。

6−㉜ 後頭部にまち針で布を止める。





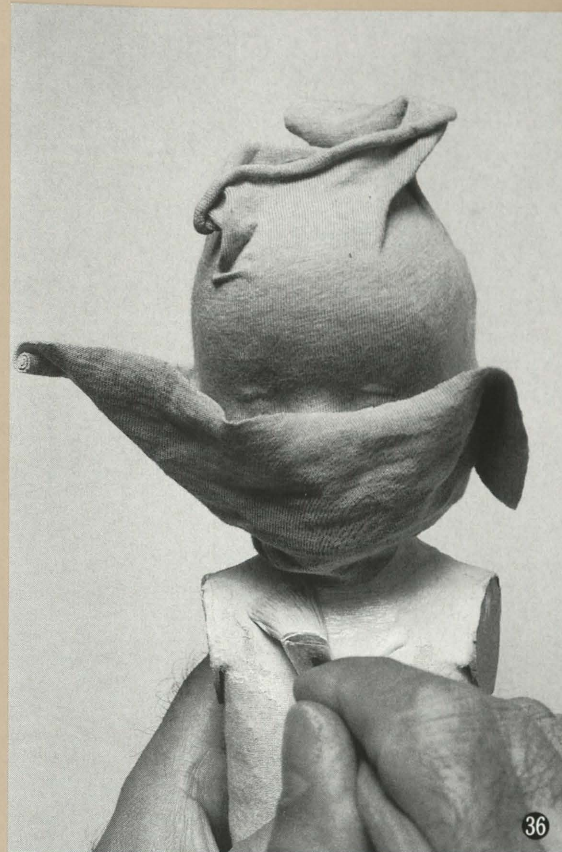
6−㉝ あごの下によく布を密着させ、耳の後ろに布を引き上げてまち針で止める。

6−㉞ 耳の部分をよく指で押さえ、形を出す。

6−㉟ 目口鼻など細かい部分はへらで押さえる。表面はメリヤスでこすってよく密着させる。

6-㊱ 胸の部分にも同じようにボンドを塗り、半分のあたりで布を切る。

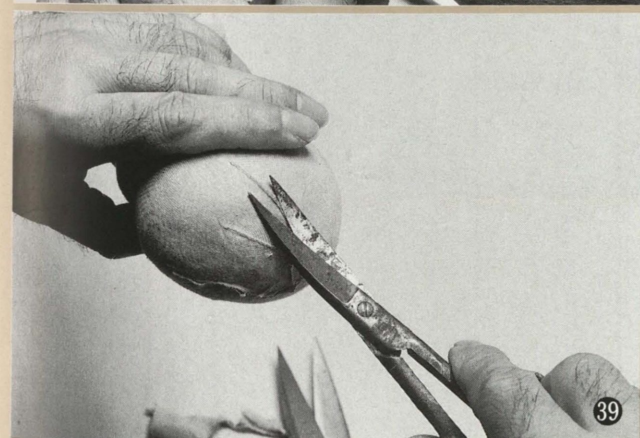
6-㊲ しわがよらないように、端に切り込みを入れ、ぴったりとはる。



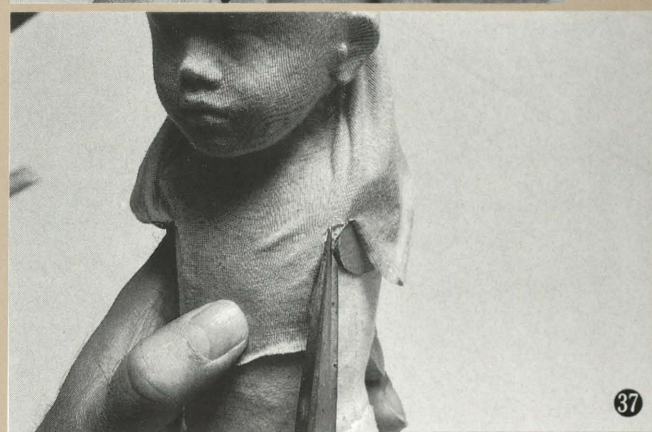
㊱



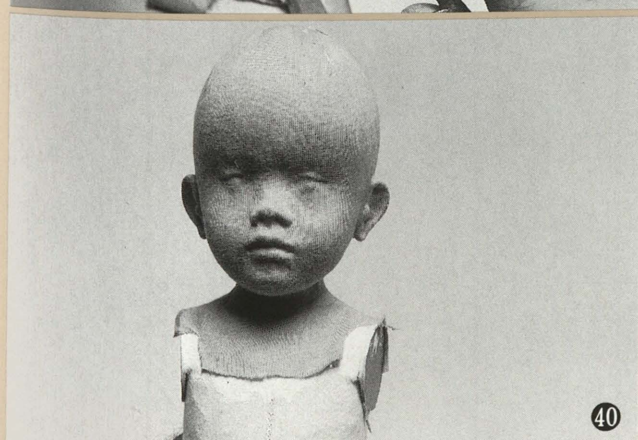
38



㊴



㊲

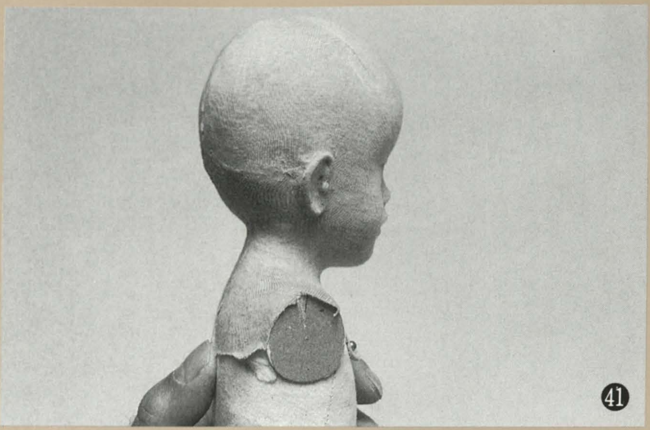


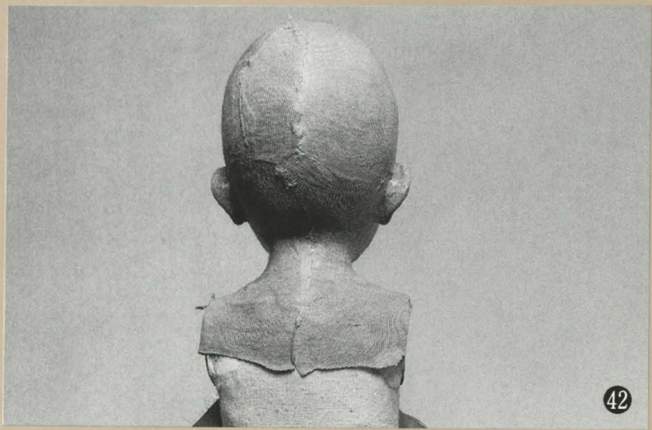
㊵

6-㊳ 顔面ができたら、後頭部にも同じようにボンドを塗り、布をはる。耳の裏は頭部からと首から布をよせ、ぴったりはっておく。

6-㊴ 余分な布は湾曲したはさみなどで切る。布の継ぎ目はこげないように気をつけてこてで押さえておく。耳の裏もこてで押さえる。

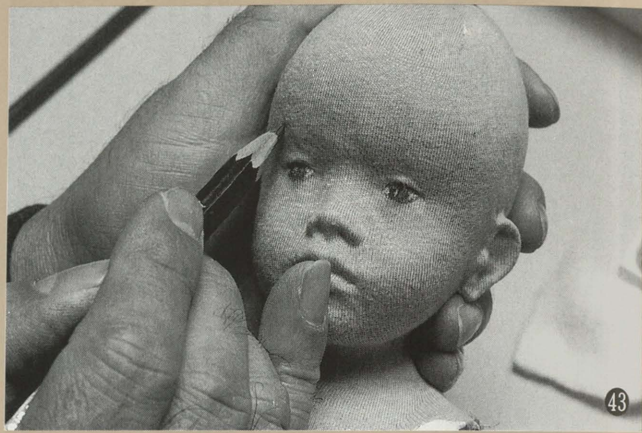
6-㊵ 頭部(前)。

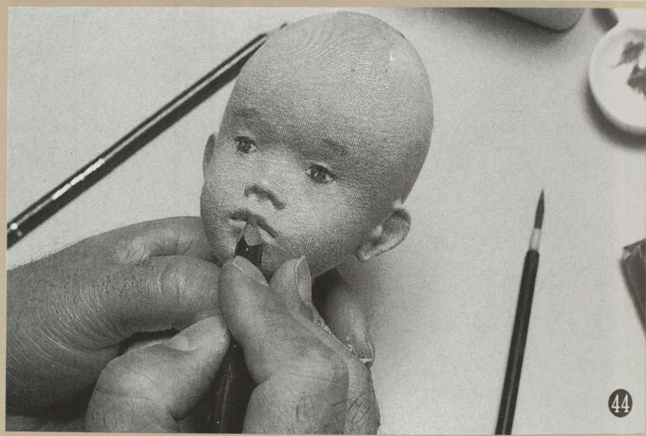




6−㊶ 頭部(横)。

6−㊷ 頭部(後)。







◉彩色をする

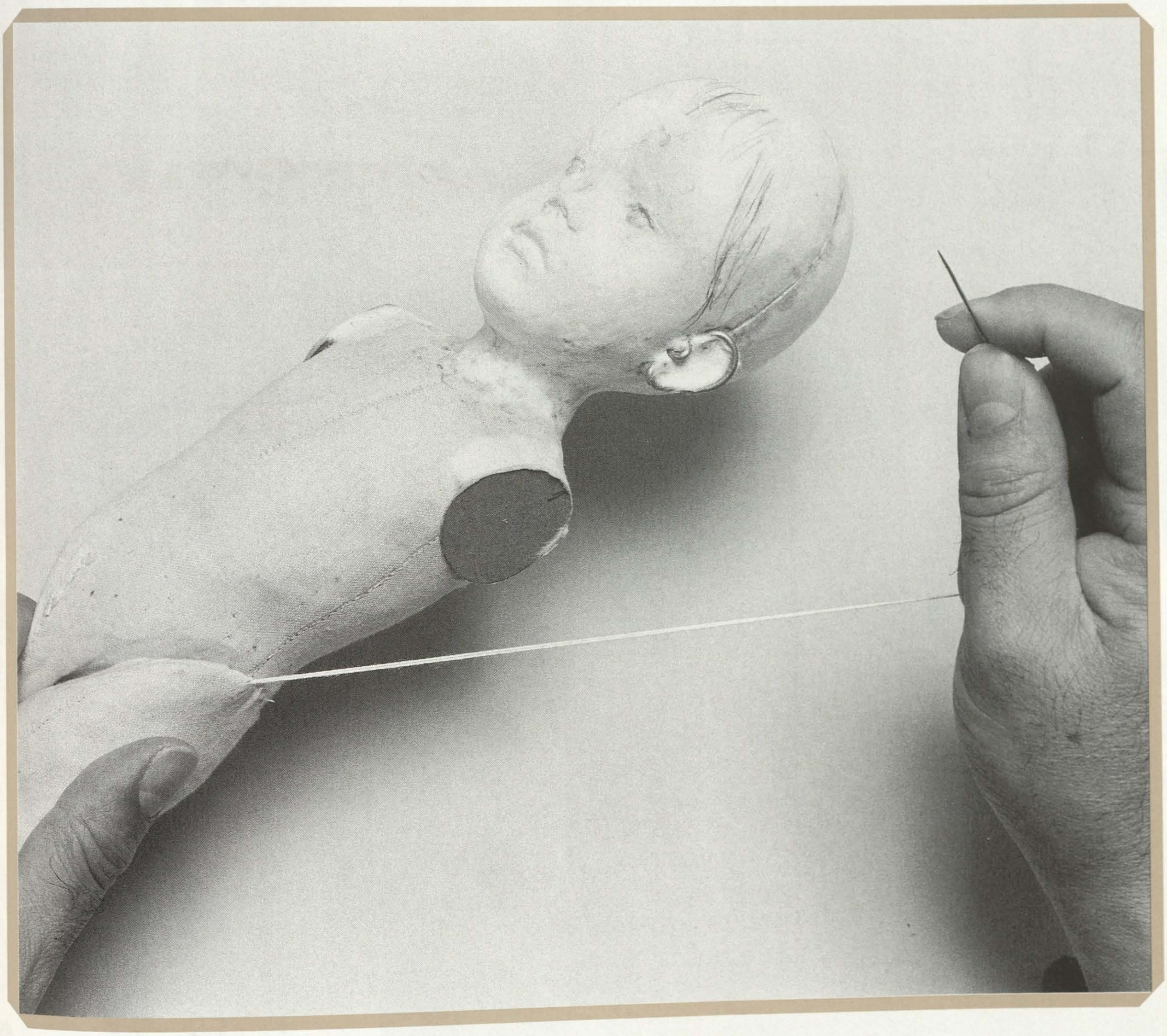
6−㊸ だいたいの感じをつかむため、筆や色鉛筆を使って、目とまゆを描く。目から先に描き、色は淡い色から重ねていく。

6−㊹ 脱脂綿にほほ紅をつけ、胴の隠れる部分につけて色を見る。ほほ紅を唇につけ、色鉛筆で線を整える。髪のはえ際も描いておく。

7

組み立て

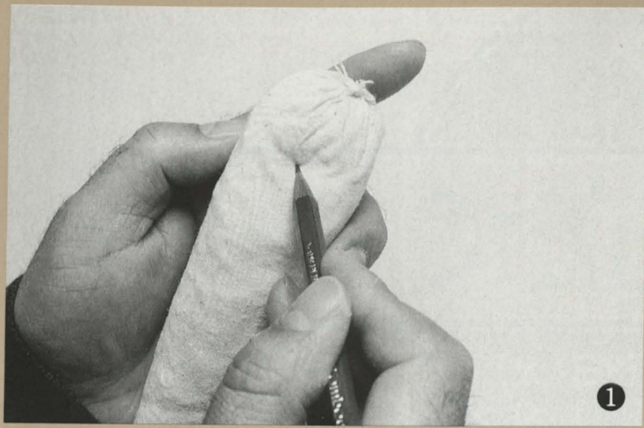
放送日 8月13日(火)
再放送日 8月14日(水)



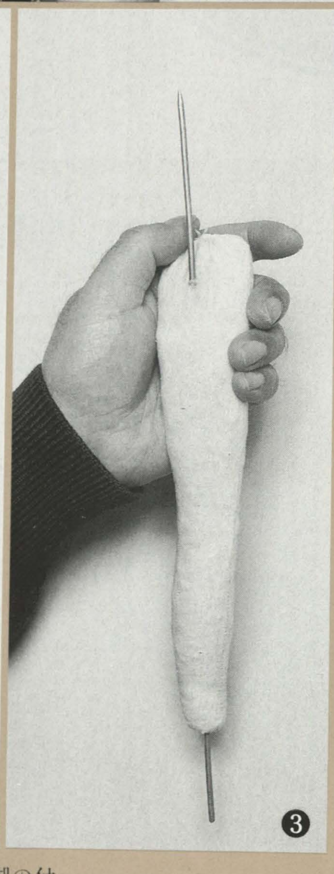
「胴に脚をつける」

◉針金を脚に通す

7−❶ 脚の付け根の中心に印をつける。

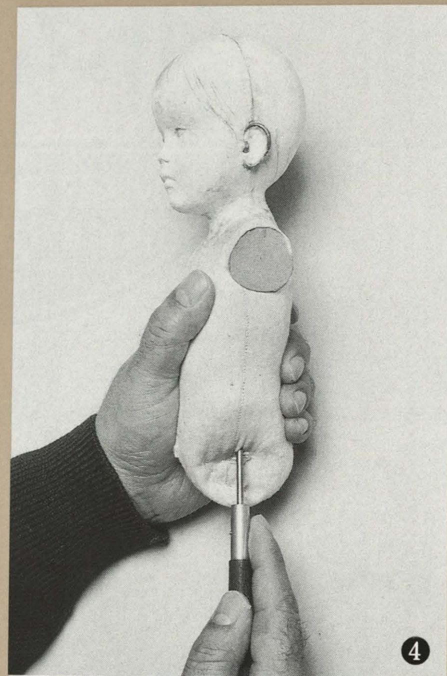


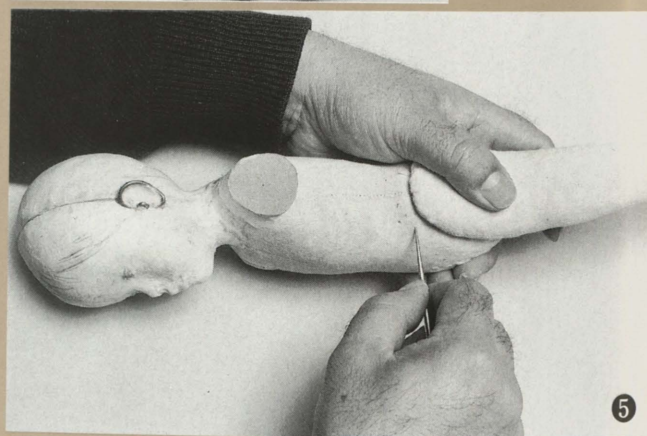


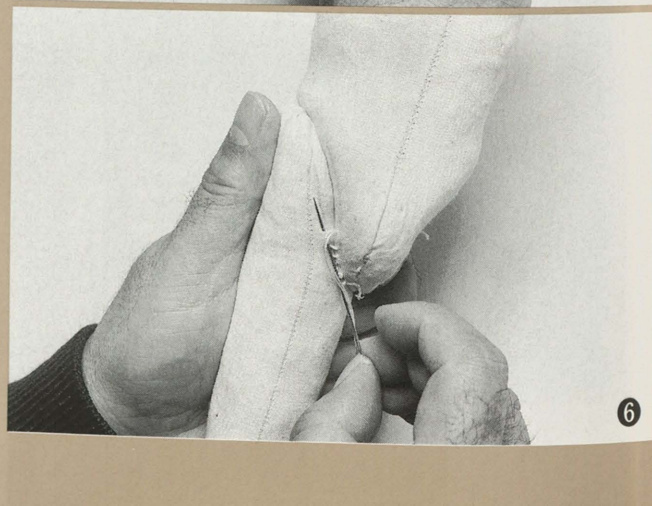


7−❷ 足首の縫い口の中心から脚の付け根の印まで千枚通しで穴を通し、ついで先をとがらせた針金を差し込み、ペンチでねじ込むようにとおす。

7−❸ 印のところに針金の先を突き通す。その先が9㎜ぐらいになるまでとおす。







7−❹ 胴の脚の付け根にも中心に印をつける。そこを千枚どおしで穴をあける。

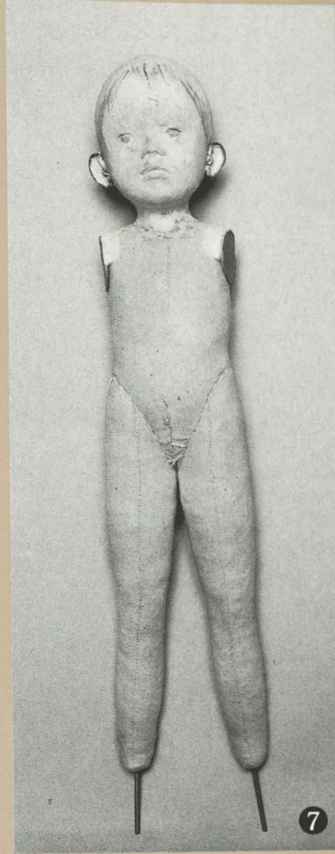
7−❺ 穴に脚の針金を差し込み、奥まで入れる。胴と脚のつなぎ目に線を引く。

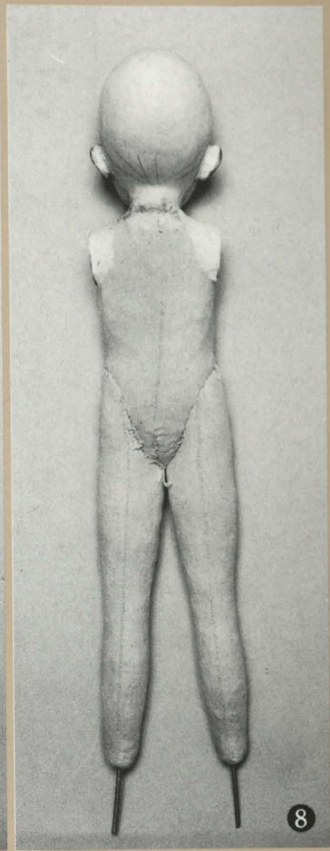
7−❻ 線にそってジグザグに縫い合わせる。

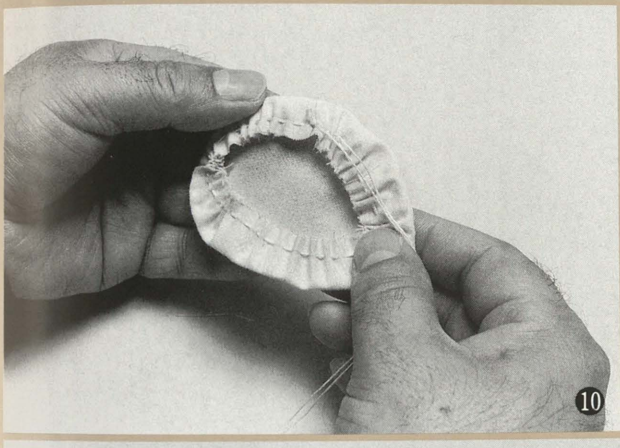
7−❼ ❽ 両脚を同じように付け根が左右対称になるように縫う。

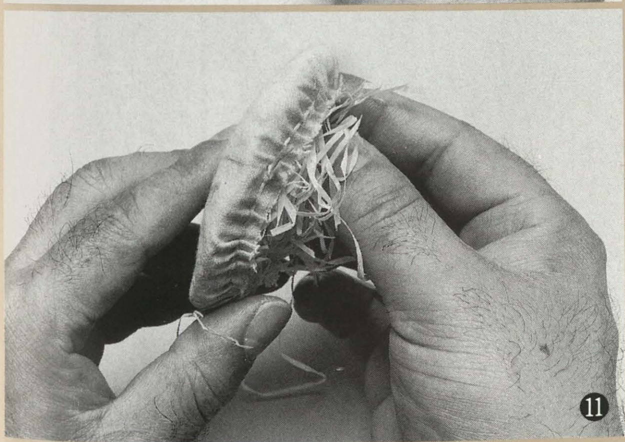
◉おしりをつける

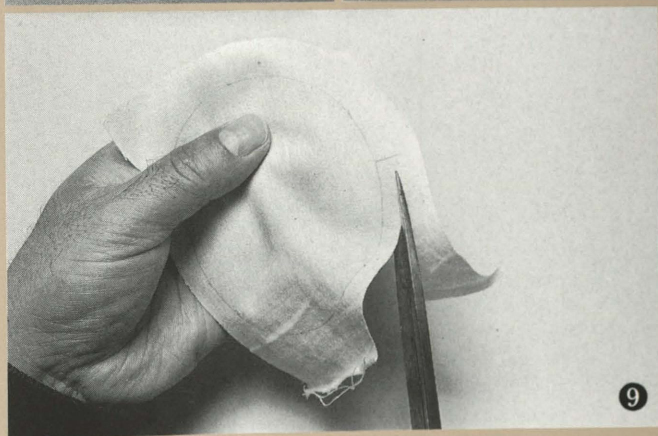
7−❾ メリヤスにおしりの型をとり、上が分かるように印をつける。縫いしろを5mmぐらい残して切る。











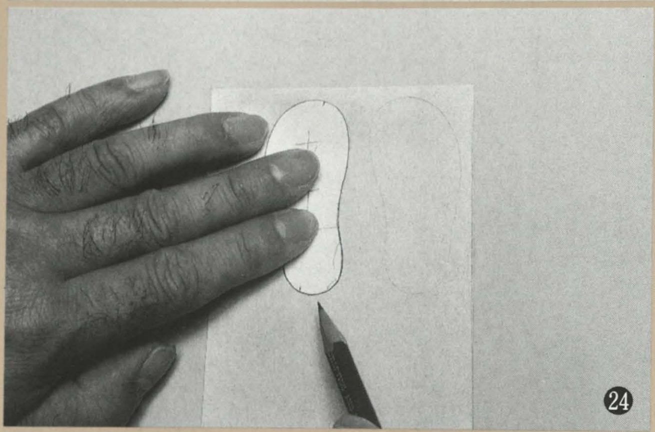


7−⑩ 周りを縫って、6cm×7.5cmぐらいになるようにしぼる。

7−⑪ 木毛をひとつかみはみださないように詰め、おしりのふくらみの感じを作る。

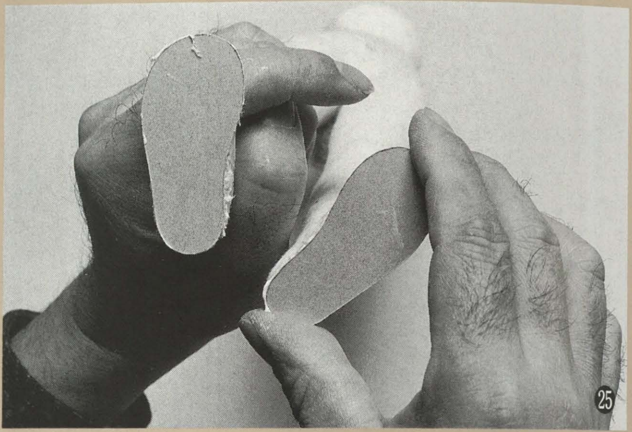
7−⑫ 首の付け根から10cmぐらいのところに印をつける。おしりの部分の上をそれに合わせ、四方をまち針で止める。左右は5mmぐらいに線をひく。そうするとぴったり縫える。



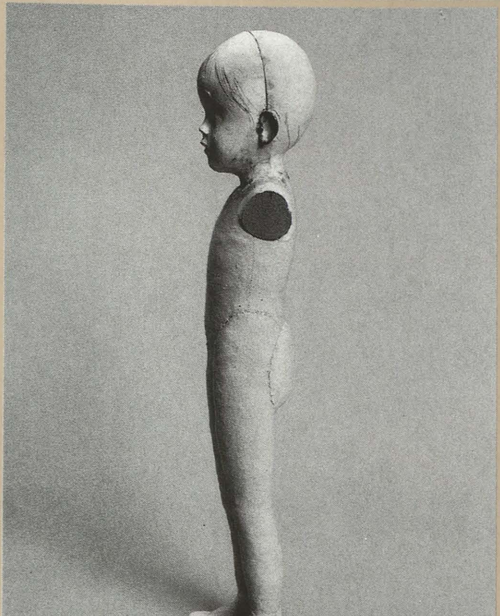


7-㉓ 靴のかかとにあたる部分をカッターで削り2mmほど浮くようにする。

7-㉔ ボール紙に足型をとって切る。周りは紙やすりできれいにする。







7-㉕ ボンドで足の裏にはる。

7-㉖ 足と足の裏の段差に紙をはり、こてで押さえる。

7-㉗ 体完成。





8

手

放送日 8月20日（火）
再放送日 8月21日（水）

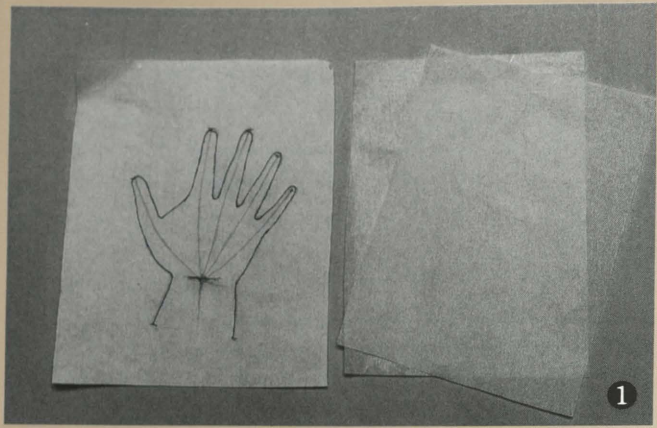


「手をつくる」

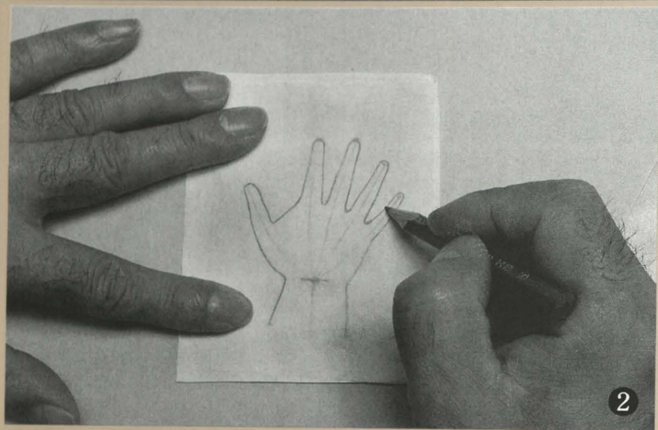
◉手の型紙を薄紙に写して、ミシンで縫う

8-❶ 薄紙を2枚用意する。

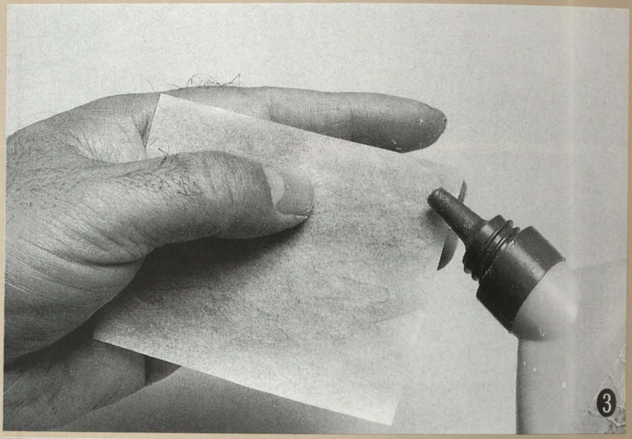
8-❷ 型紙の上に薄紙をのせ、型を写す。



❶



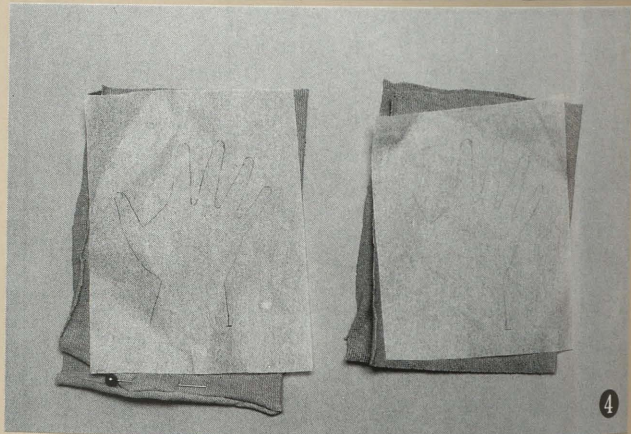
❷



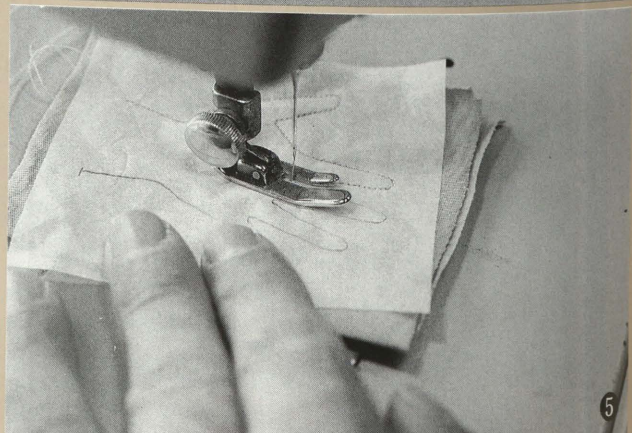
❸



手



❹



❺

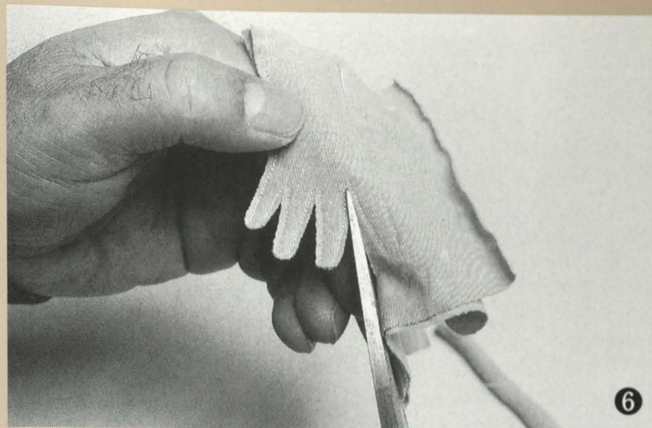
8-❸ 薄紙に数か所ボンドをつけ、肌色に染めたメリヤスを2枚重ねた上にはりつける。

8-❹ 同じものを2枚つくる。

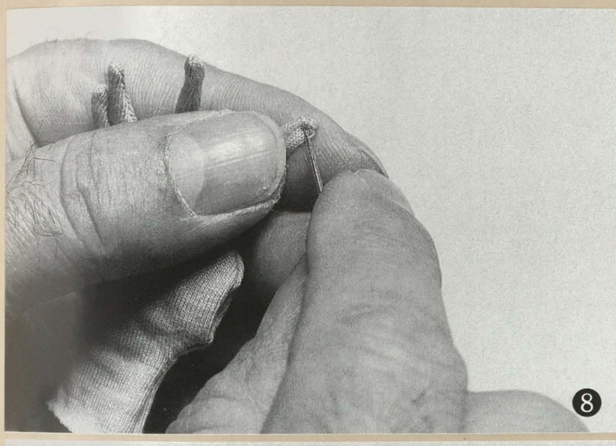
8-❺ 薄紙の上からから型のとおりにミシンで縫う。ミシンの目は1.5㎜に設定する。目を細かくしておくと形がきれいにでる。

8-❻ 縫い終わったら薄紙をはがし、縫い目の1～1.5mm外側を切る。

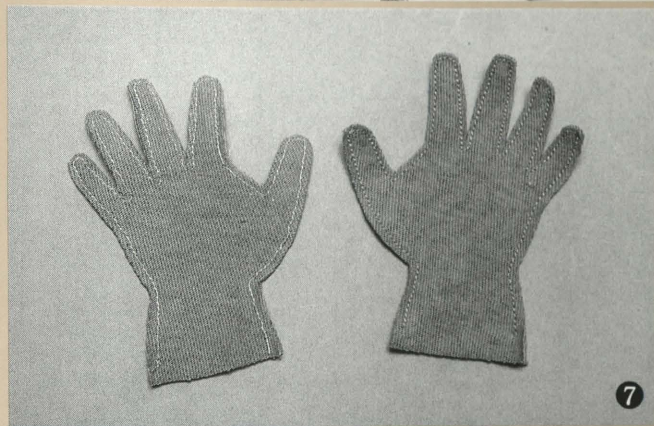
8-❼ 2枚とも同じようにつくる。



❻



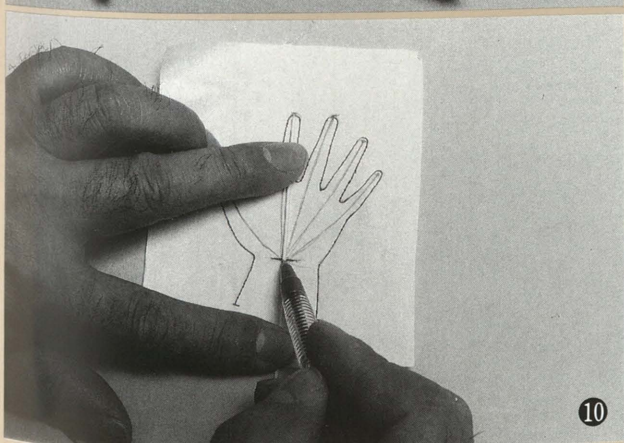
❽



❼



❾



❿

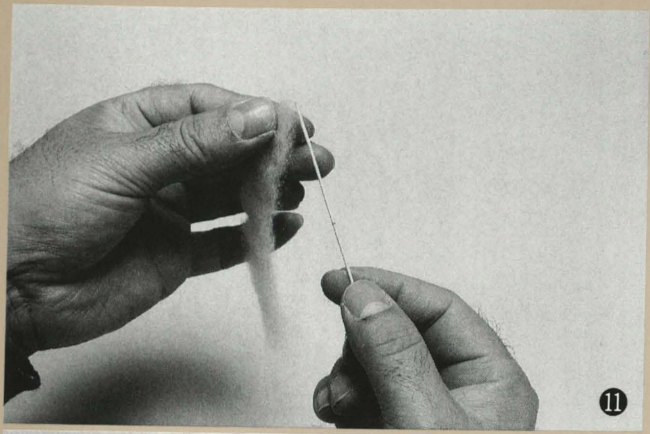
◉指先を返す

8-❽ 針や細い針金などを使って、縫い目の隅まできれいに裏返す。指先の部分をよくほぐすようにして裏返すとうまくいく。

8-❾ 2枚とも裏返した状態。

◉綿を巻いた針金を入れる

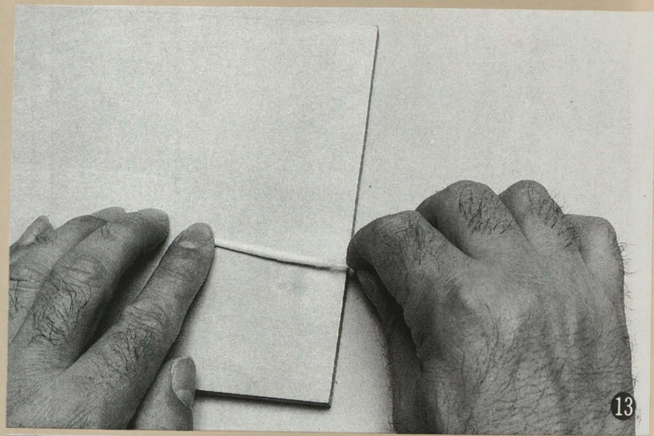
8-❿ 7cmの長さに切った20＃の造花用針金を10本用意する。針金を型紙にあて、手首の付け根に印をつける。

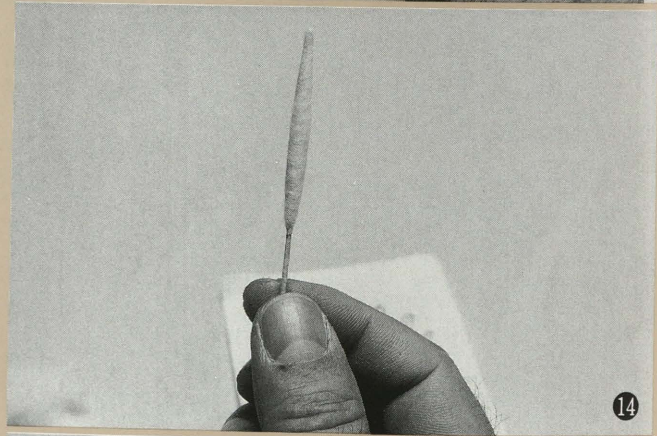


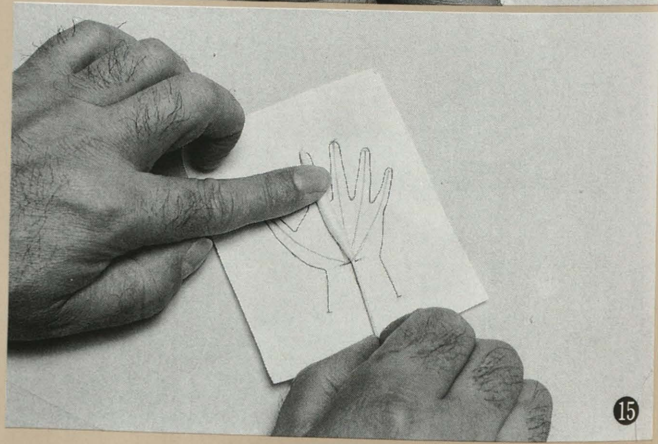
8−⓫ 綿を縦に薄く裂いて、10㎝ぐらいの長さにする。その先を左手の親指と人差し指でつまむ。

8−⓬ 綿の先端の下に針金を斜めにあて、右手の親指を上方に、人さし指を下方によじるように転がし、印のところまで綿を巻きつけていく。真ん中にふくらみを持たせるように、先細りに固く巻くこと。









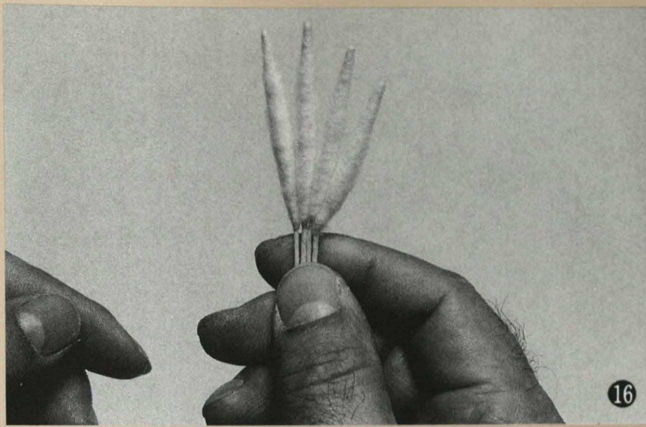
8−⓭ 巻きつけたら板の上で上に向かって転がし、さらに堅くする。

8−⓮ 巻きあがった状態。

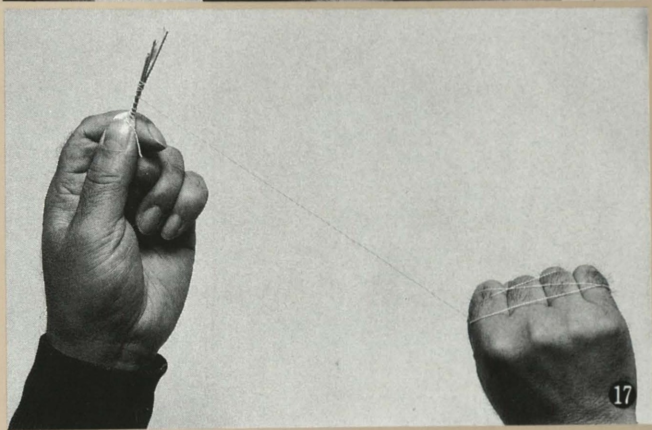
8−⓯ 手首の付け根を軸にして角度をつける。

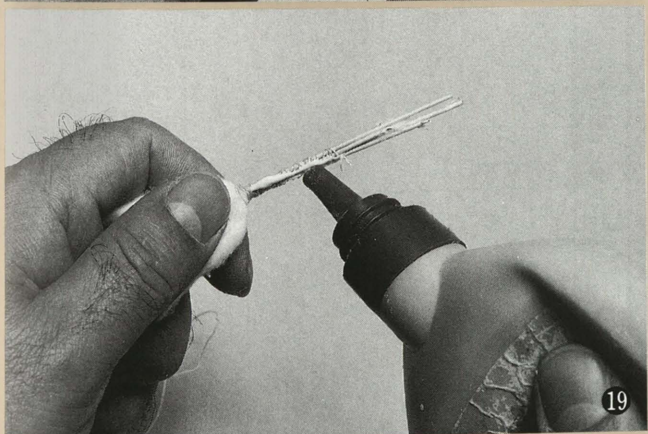
8-⑯ 5本の指がそれぞれ巻き終わったら、親指をぬかした4本の指を根本で束ねる。

8-⑰ 左手で4本の指をしっかり持ち、右手で70cmぐらいのカタン糸を右手にからめ、力を入れて斜めにあらく巻きつけていく。これを3、4回往復させる。


⑯


⑱


⑰

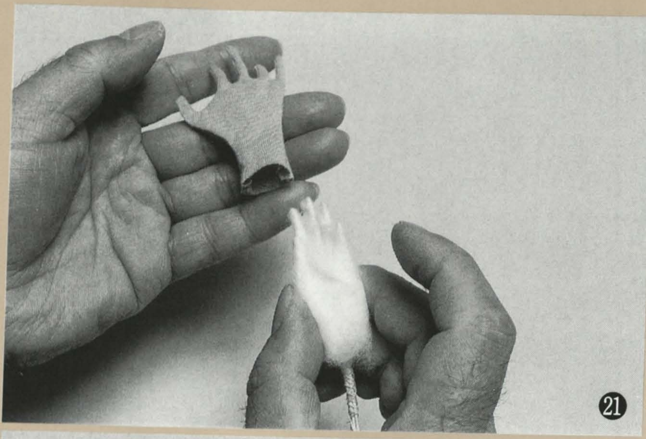

⑲


⑳

8-⑱ 4本まとめたものの中心に親指を添えて、同じように糸を巻きつけていく。巻き終わった糸の先は針金の間に挟み込んでおく。

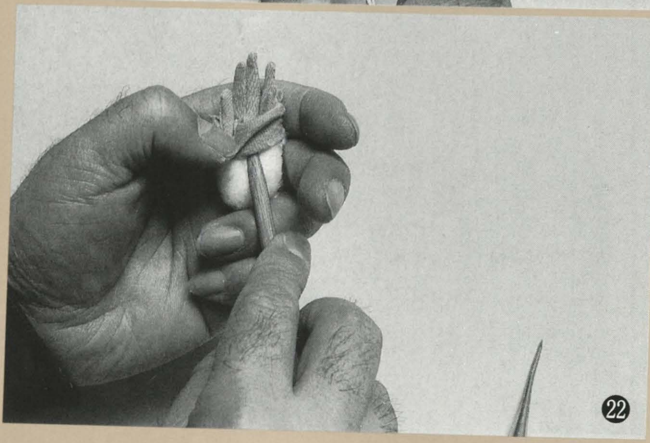
8-⑲ 糸を巻きつけた上にボンドをつけて固める。

8-⑳ 手の平に小さくちぎった綿を重ね、その上から20cmぐらいの長さに薄く裂いた綿を親指と人差し指の間、親指の下に交互に巻きつけていく。

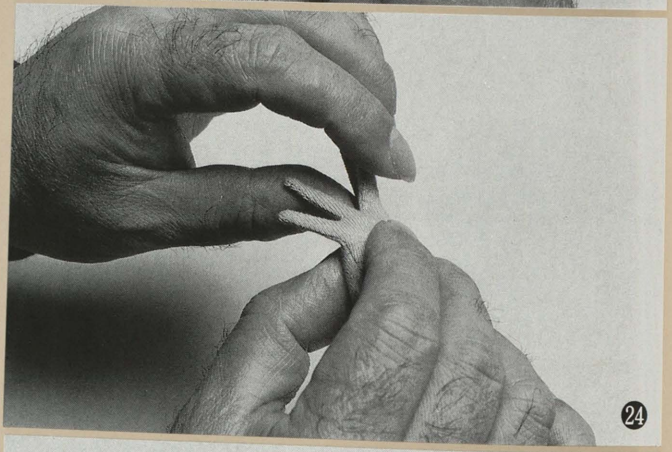


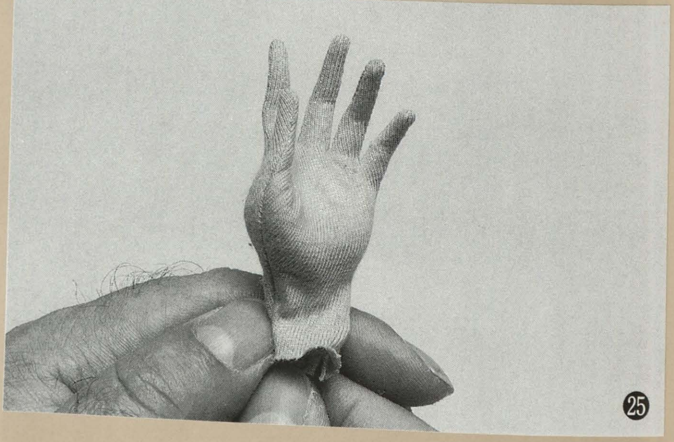
8－㉑ きっちりと巻き終わったら、メリヤスでつくった手の中に入れる。

8－㉒ 目打ちや竹べらを使い、綿をしっかり中に押し込み、指先までよく押し込む。









8－㉓ 手のひらを親指でしごき、綿を下のほうへよせて肉づけをする。ピンセットで綿を少量つまみ、親指の付け根の部分に入れて、ふくらみをつくる。

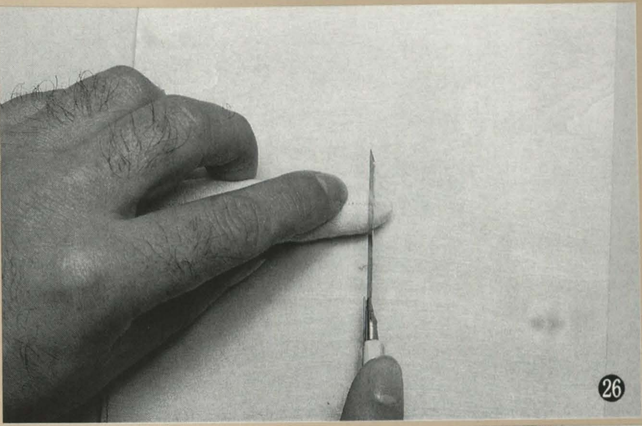
8－㉔ 親指を除く4本の指を、第1関節、第2関節で曲げ、手の感じを出す。

8－㉕ 指先を少しそらすようにするとよりいっそう感じが出る。

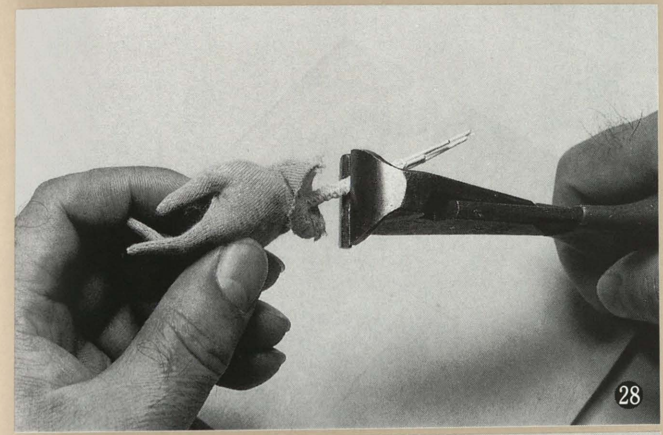
◉木毛を詰めた腕に手をつける

8−㉖ 木毛を詰めた腕の、手首の付け根をカッターで5㎜ほど切り落とす。

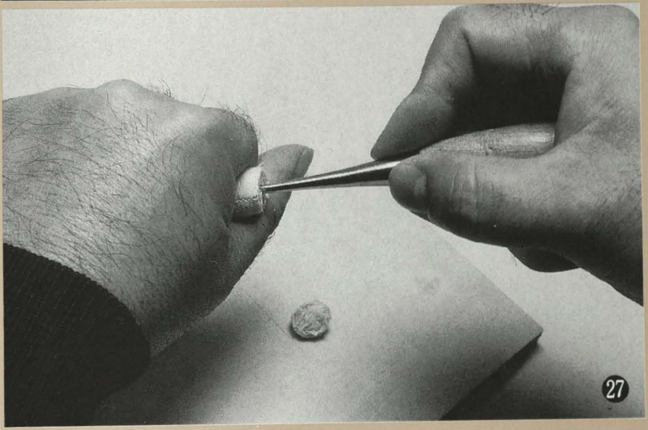
8−㉗ 切り口の中心に千枚どおしで穴を開ける。千枚どおしの付け根までよく差し込むこと。



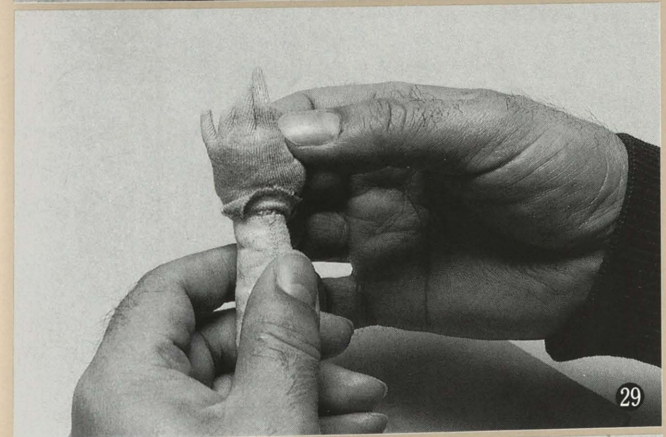
26



28



27



29



30

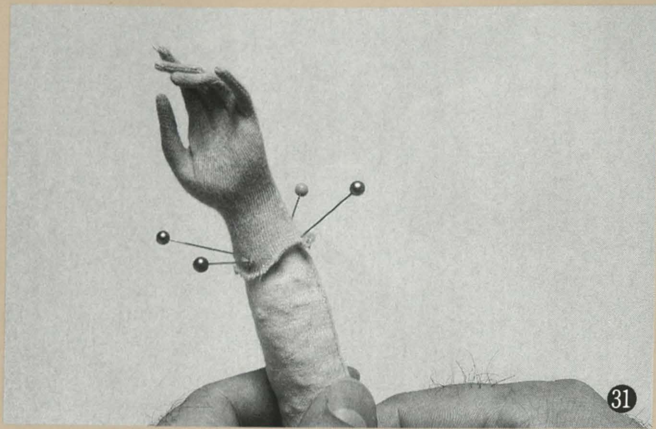
8−㉘ 手の針金を付け根から2㎝ぐらいのところで切る。

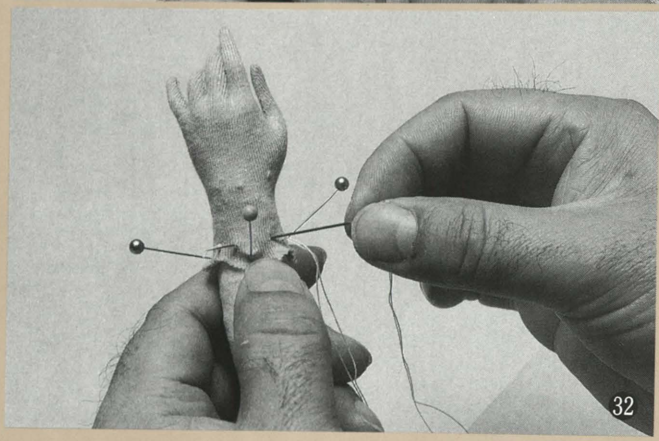
8−㉙ 腕の穴に手の針金を差し込む。

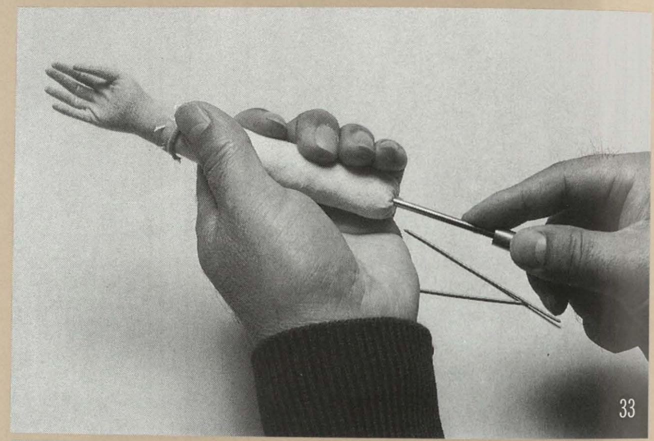
8−㉚ 手を腕のほうによく押し、しっかりと差し込んでおく。

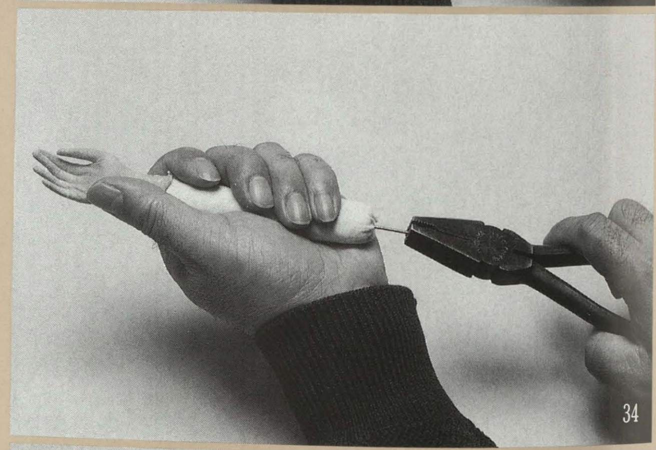
8-㉛ 手のメリヤスのすそを、少し引っ張りながらまち針で止めておく。

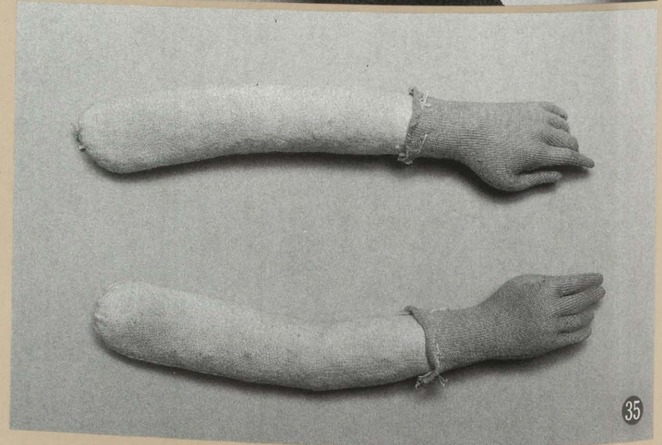
8-㉜ まち針で止めた部分を縫う。


31


32


33


34


35

◉腕に針金をとおす

8-㉝ 腕の付け根の中心から、千枚どおしをとおす。

8-㉞ 10cmに切った14＃の針金を2本用意する。その先をやすりでとがらせて、ペンチで入れる。

8-㉟ もう片方も同じようにする。針金を中にとおしておくと、腕のラインを調節することができる。

9

靴

放送日 8月27日(火)
再放送日 8月28日(水)

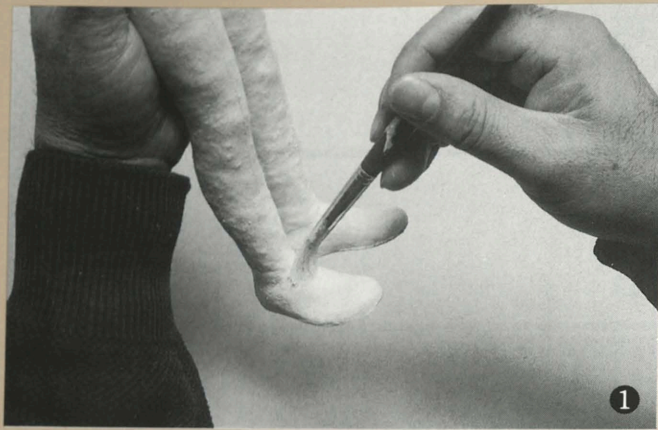


「靴づくり」

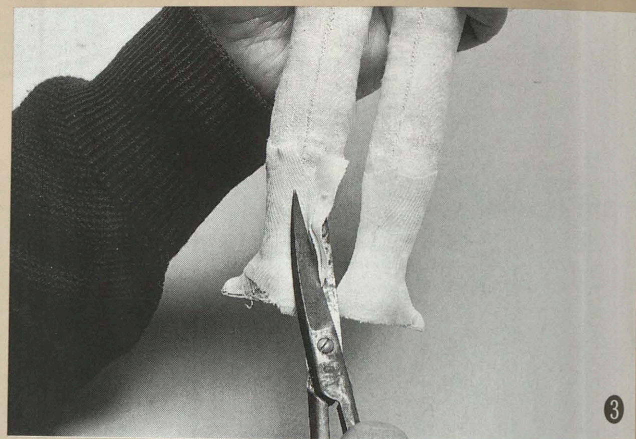
◉足型に皮を張る

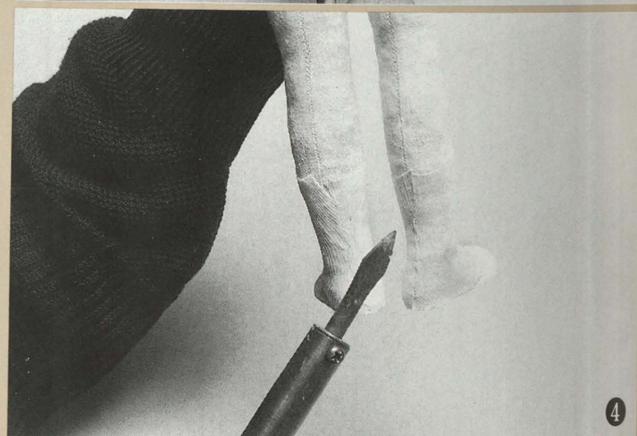
9−❶ 5cm角のメリヤスを2枚用意する。すねから足の甲の半分が隠れるぐらいに筆でボンドを塗る。ムラができると、表面が凸凹になるので気をつける。

9−❷ メリヤスの目を縦にして、前から後ろに引っ張り、はり合わせる。しわがよらないように注意すること。











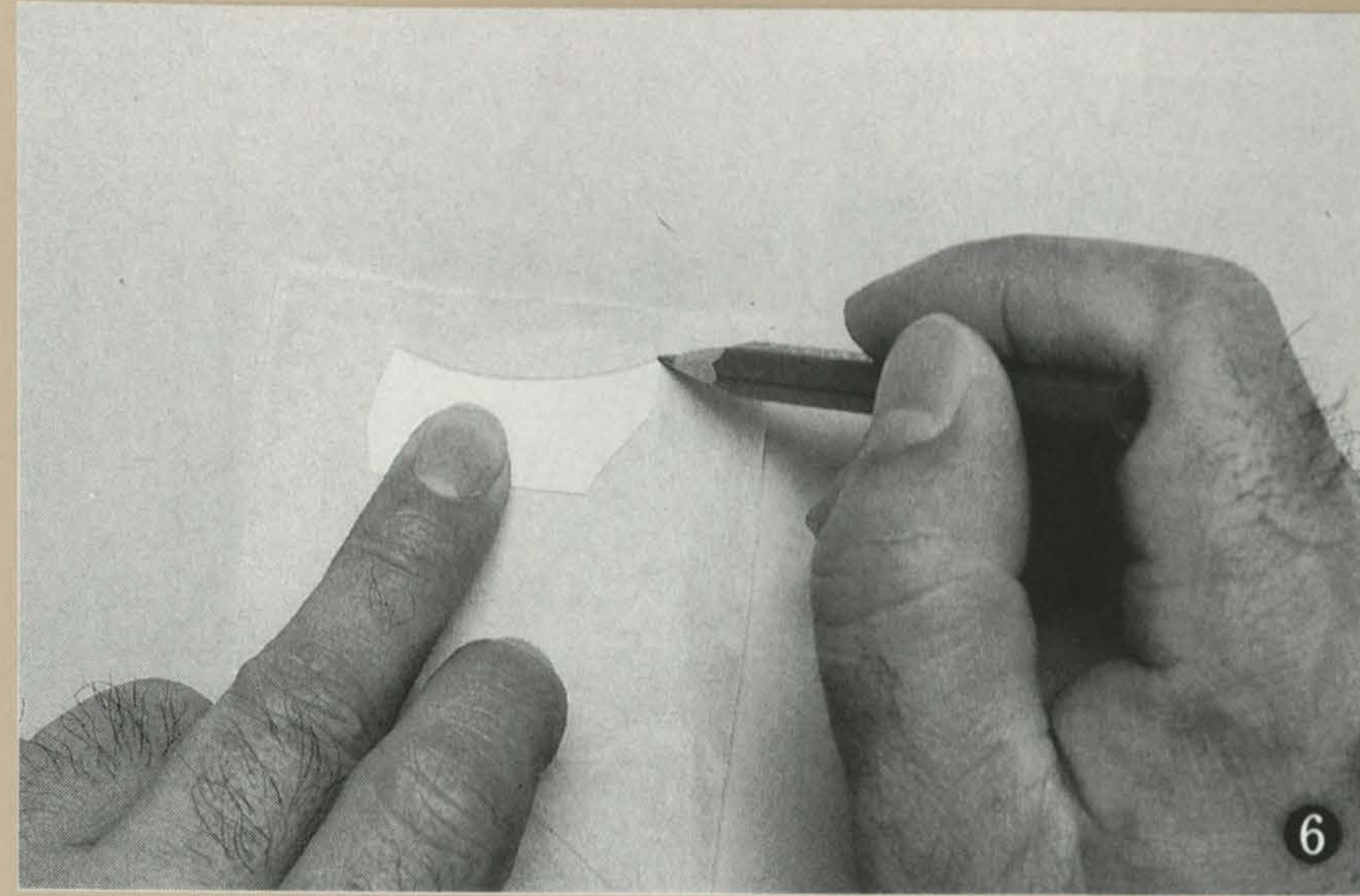
9−❸ 余分なメリヤスは湾曲したはさみなどで切る。

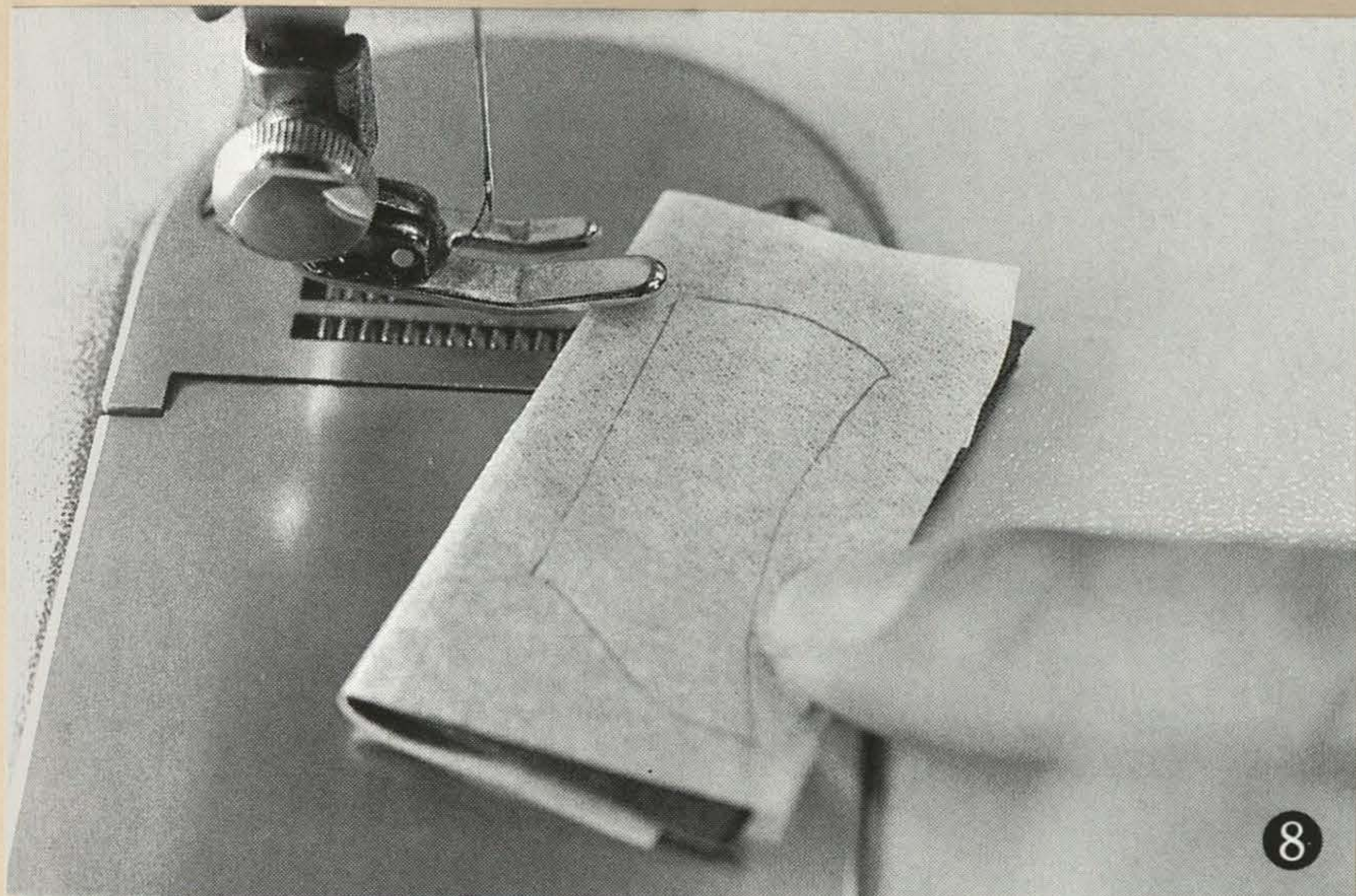
9−❹ メリヤスの継ぎ目はこてで押さえてよく接着させる。

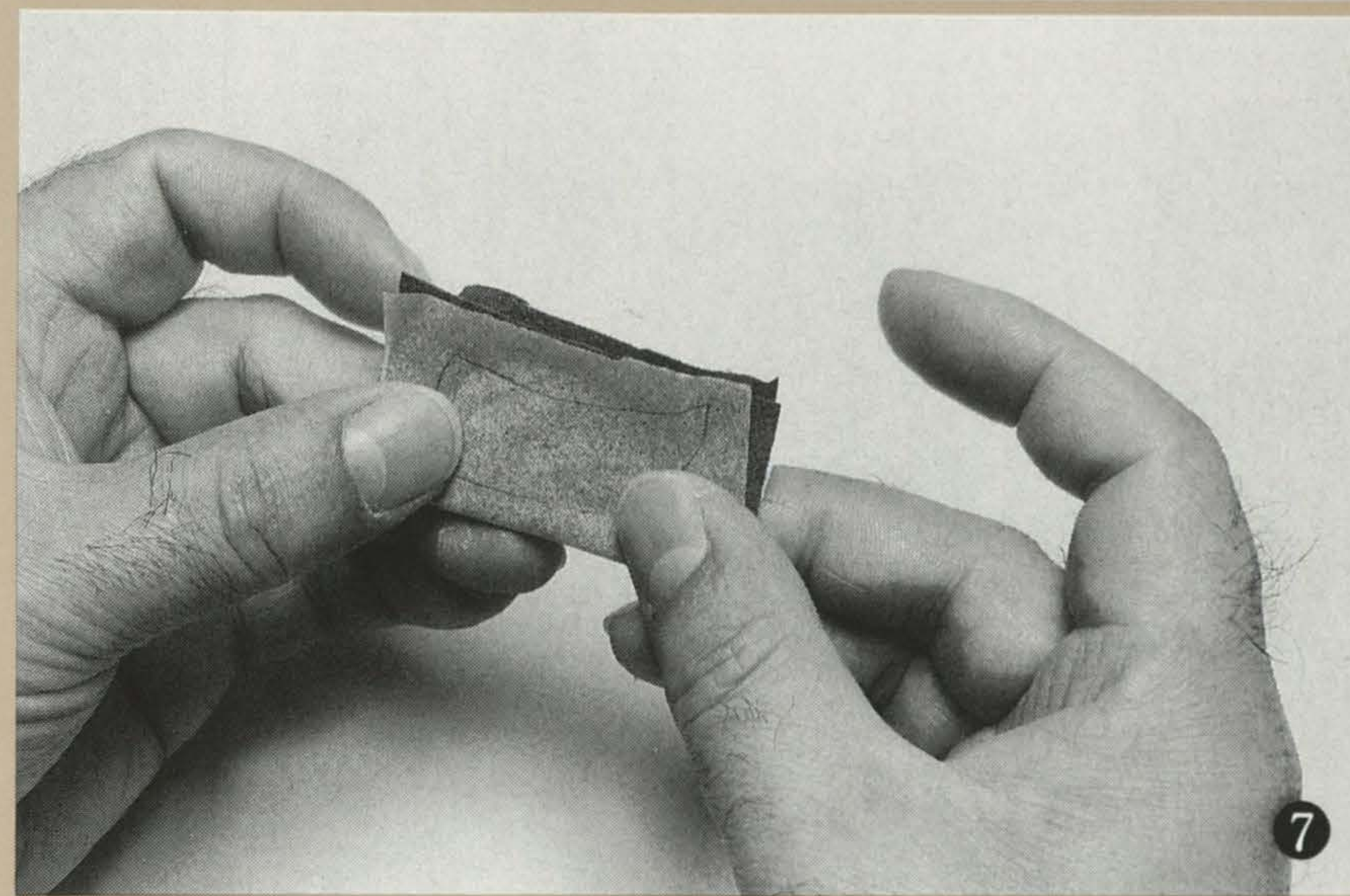
9−❺ 両足ができあがった状態。

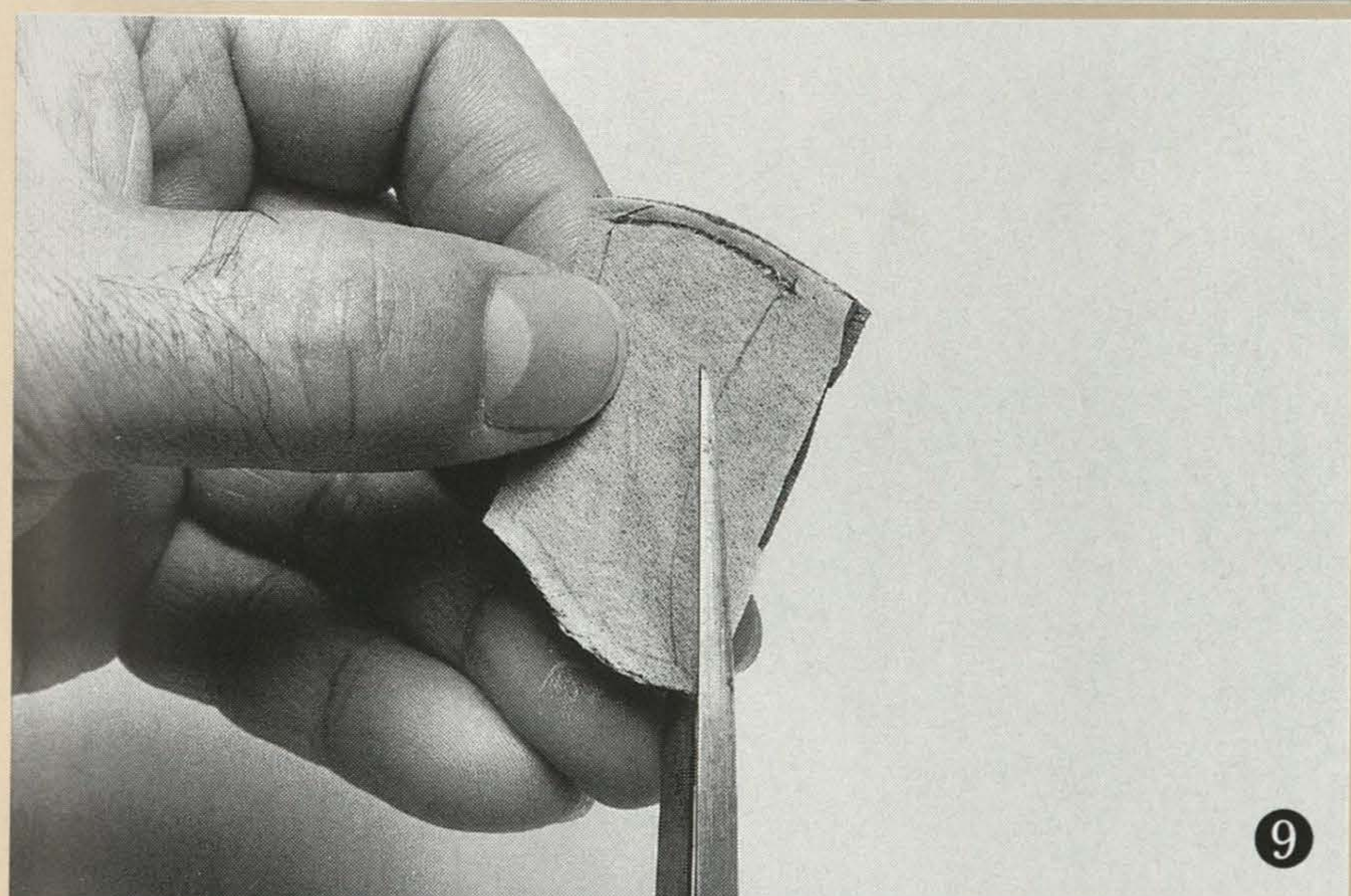
9−❻ 靴の型を薄紙に写す。

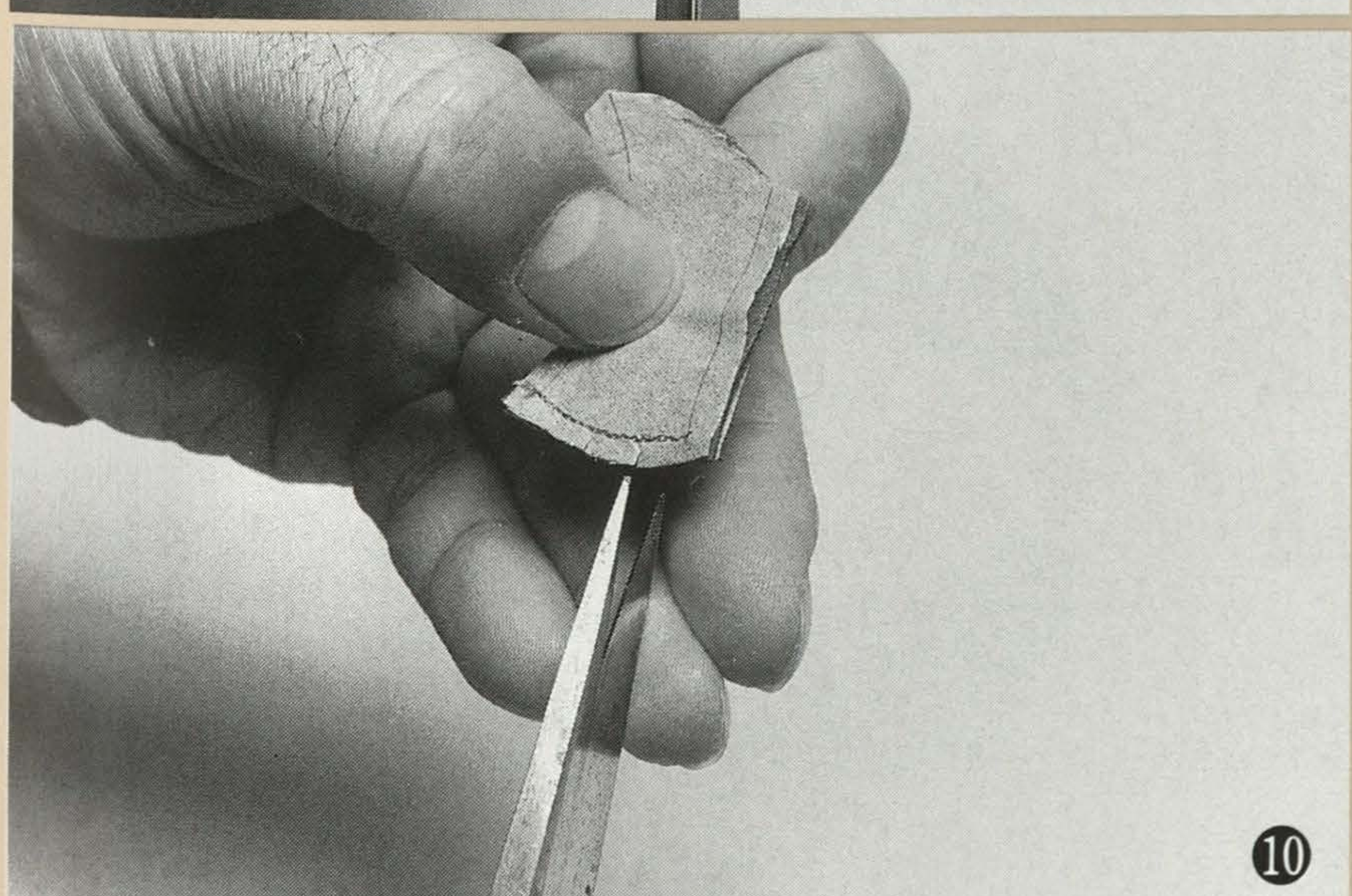
9−❼ 皮を中表にして薄紙に挟む。靴の皮は丈夫で薄いものがよい。

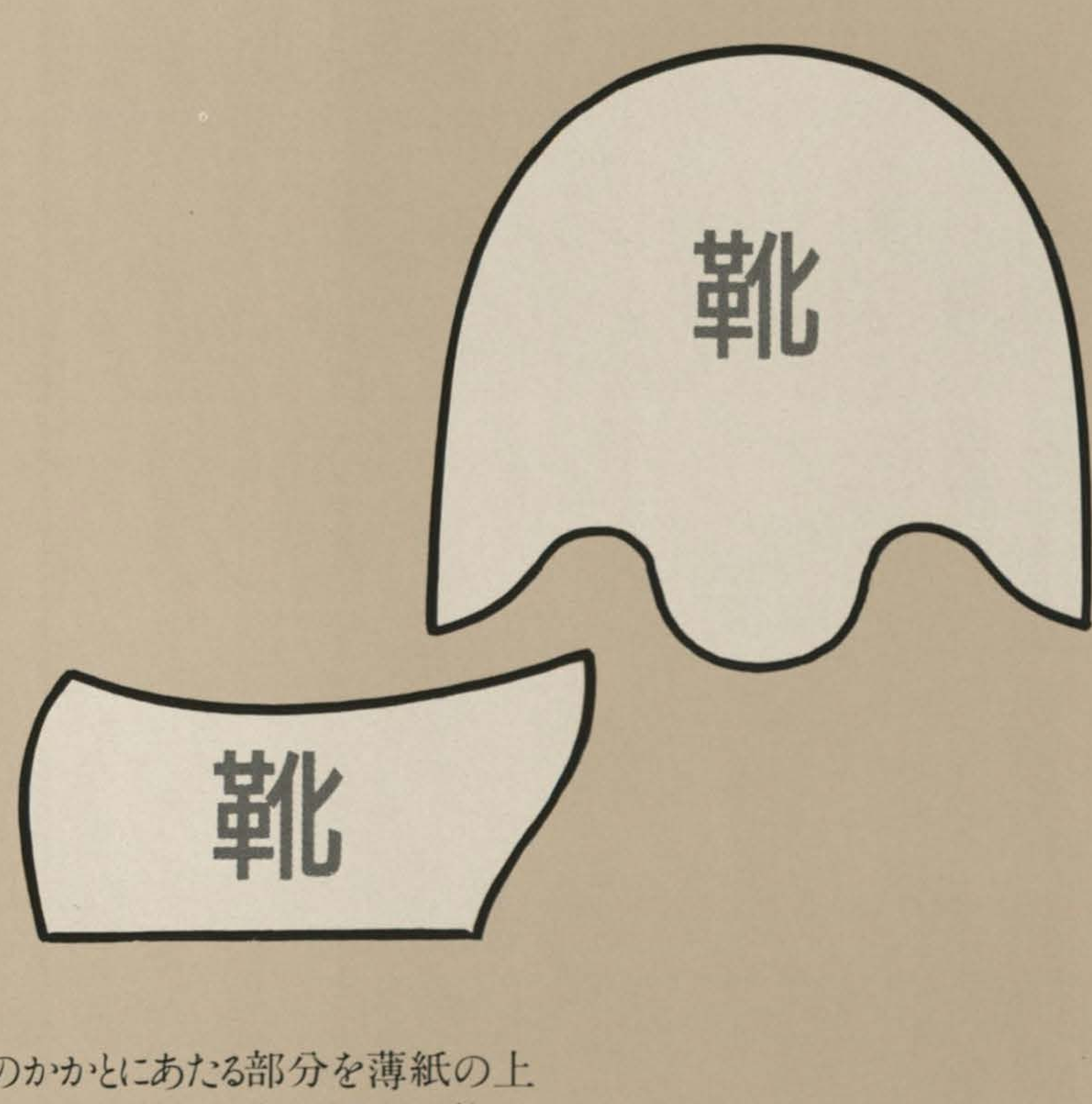








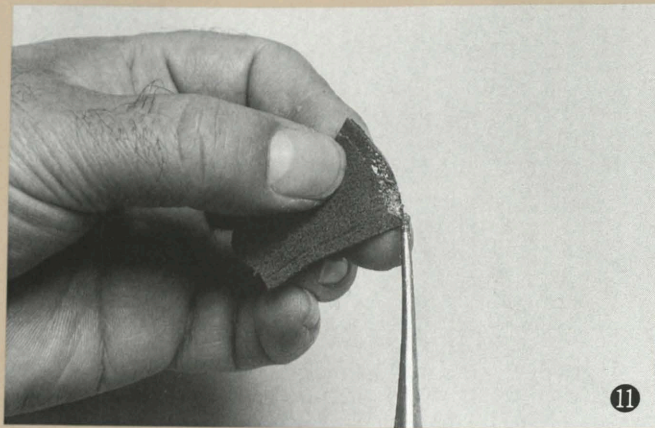




9−❽ 靴のかかとにあたる部分を薄紙の上からミシンで縫う。糸は絹糸を使い、目は2mmに設定する。

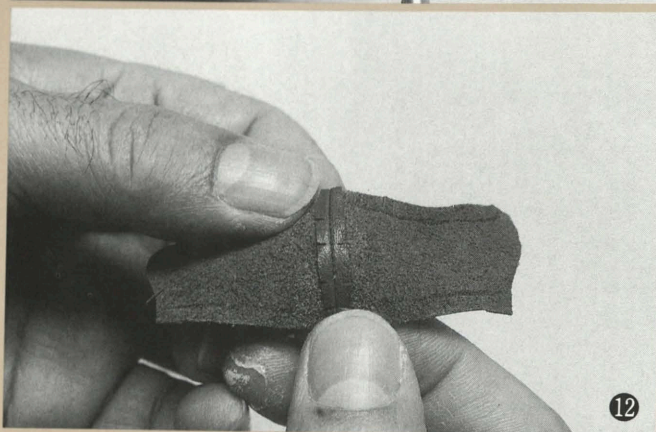
9−❾ 縫いしろ、のりしろ3mmを残して切る。目を細かく縫ってあるので、縫いしろが少なくてもきれいに仕上がる。

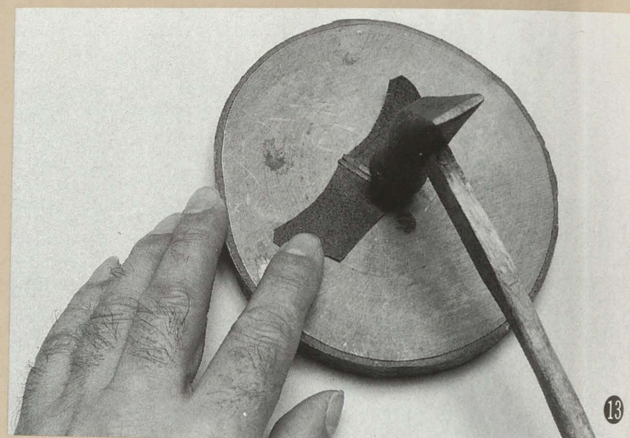
9−❿ カーブの所は縫いしろに細かく切り込みを入れて、薄紙をはがす。

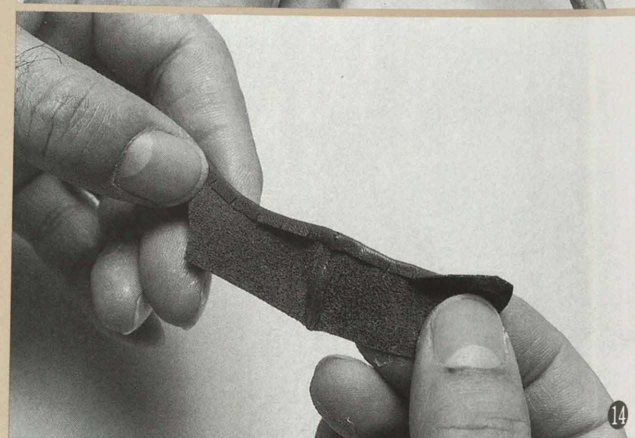


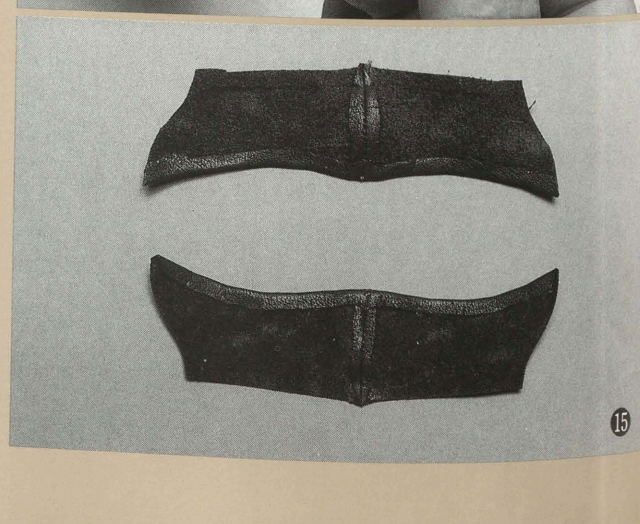
9−⓫ かかとの部分の縫いしろに目打ちで接着剤をつける。

9−⓬ 縫いしろを開いてよく接着させる。









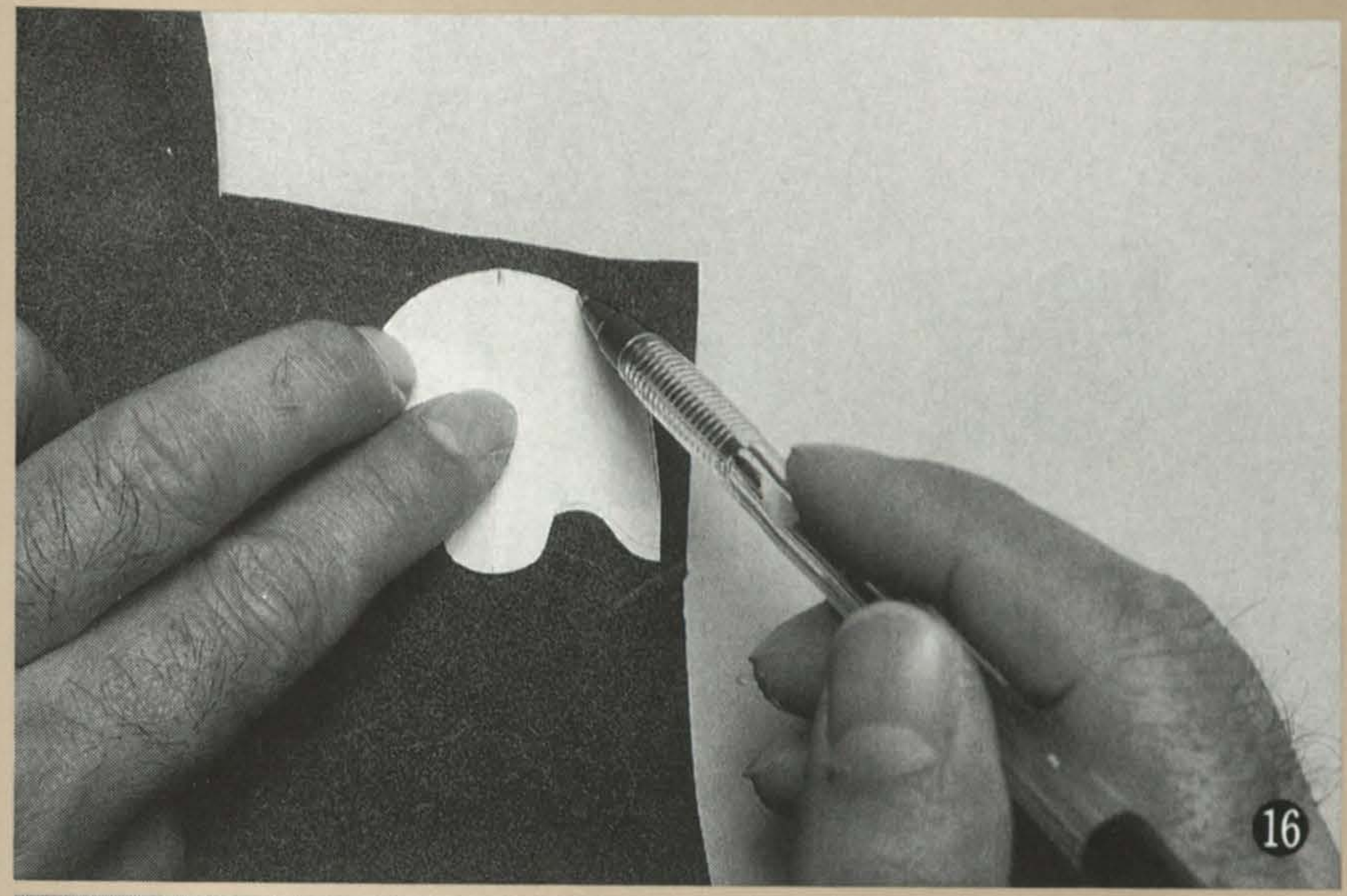
9−⓭ かかとの開いた部分を金づちで軽くたたいて、たいらにする。

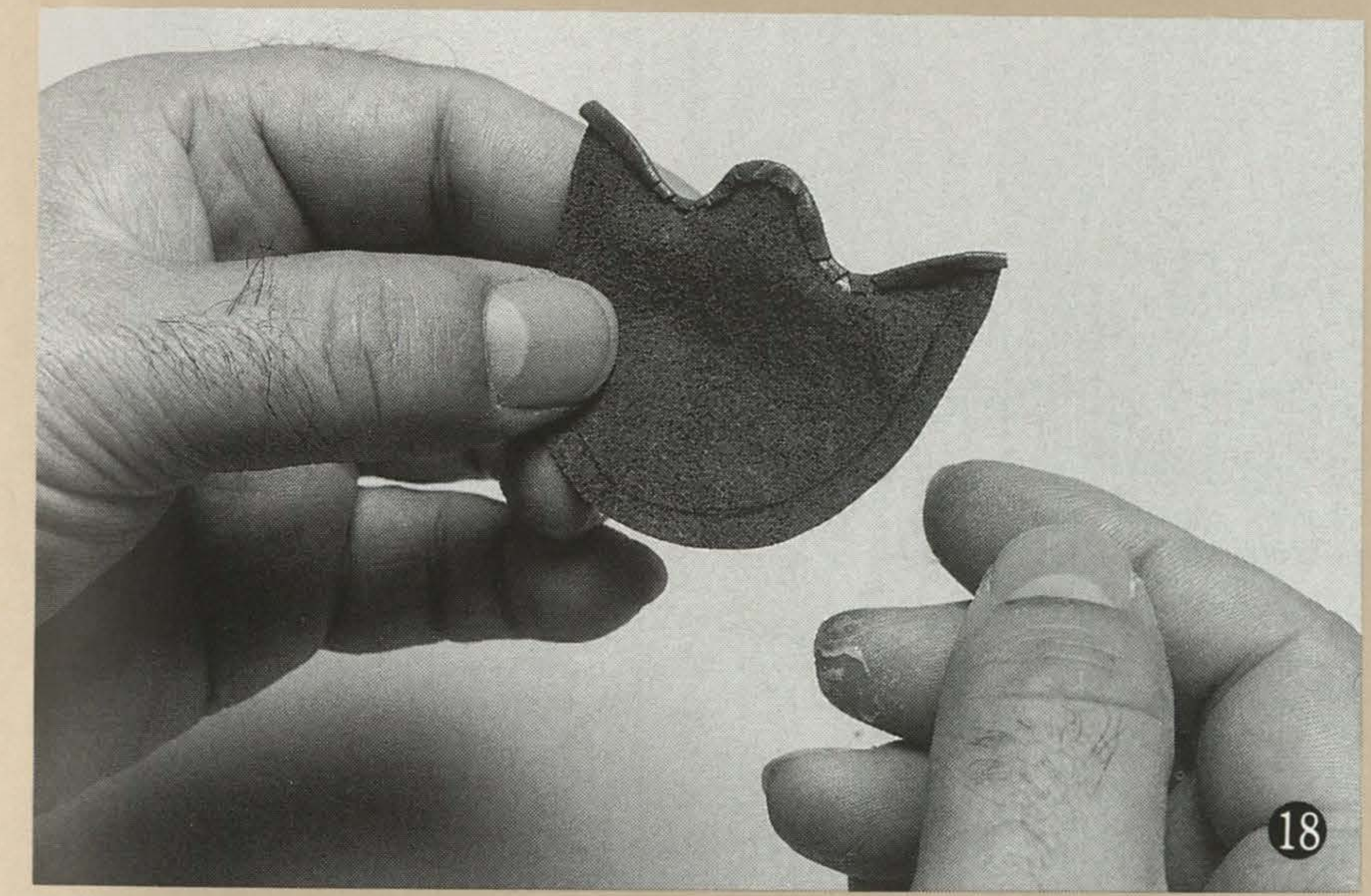
9−⓮ 靴の縁になる部分ものりしろに接着剤をつけ、内側に折り返して接着する。かかとと同じように金づちで軽くたたく。

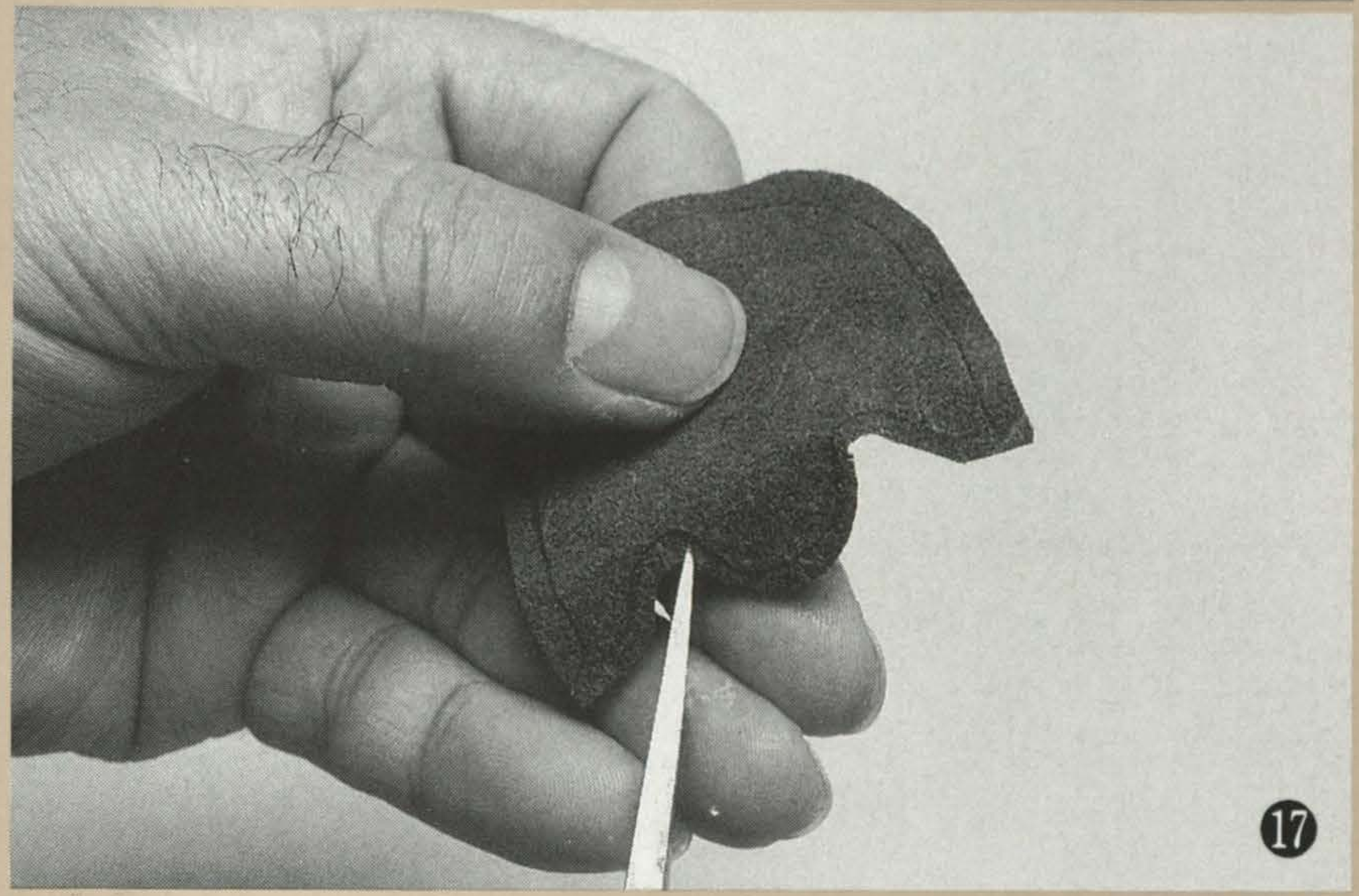
9−⓯ もう1枚も同じようにつくる。

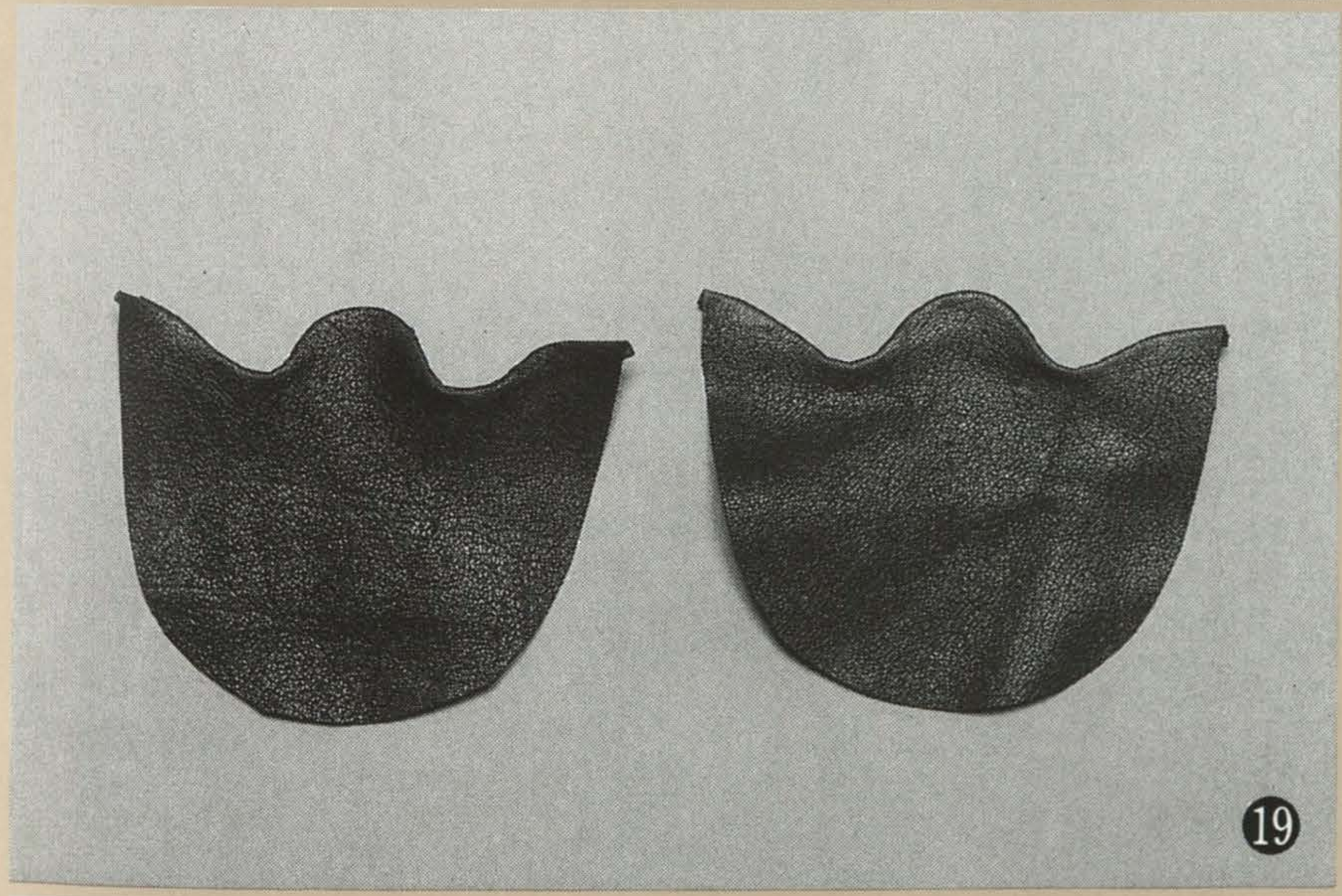
9-⑯ 皮に靴の甲の部分の型を2枚とる。

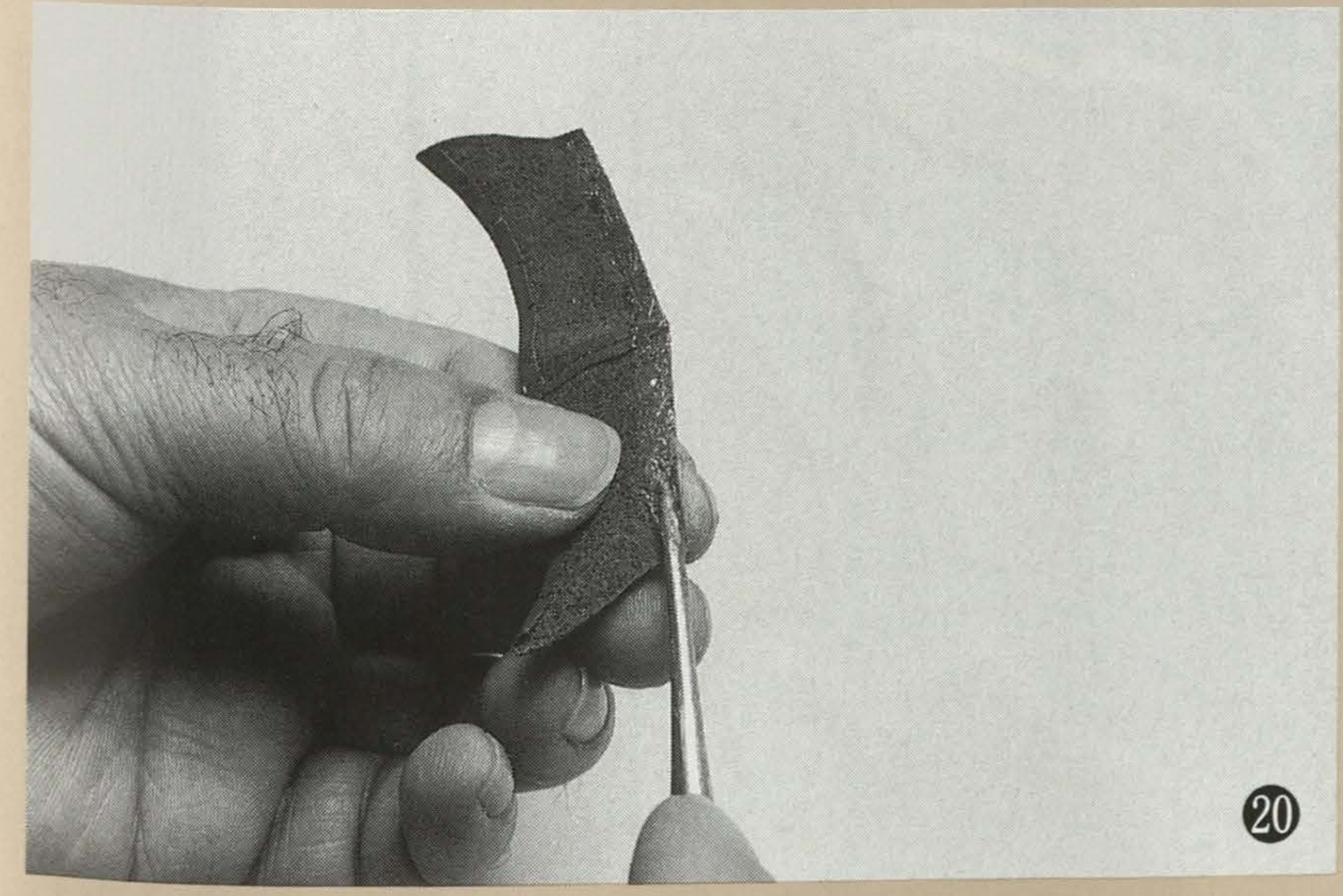
9-⑰ のりしろ3㎜を残して周りを切り、縁になるところはカーブに切り込みを入れる。







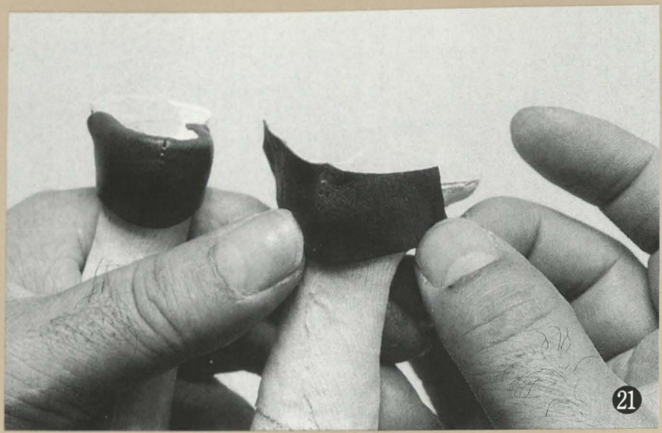




9-⑱ のりしろに目打ちで接着剤をつけ、内側に折り返して接着する。この時も金づちで軽くたたいておく。

9-⑲ もう1枚も同じようにつくる。

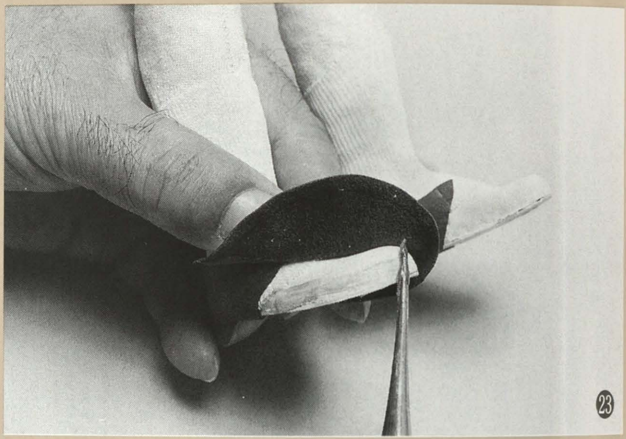
9-⑳ 靴の底へ折り返す部分に接着剤をつける。



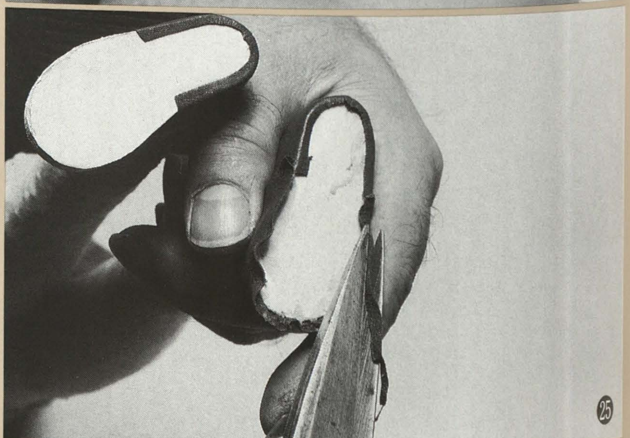
9−㉑ かかとの縫い目を中心にして、足底に接着する。

9−㉒ 靴の側面だけがついた状態。









9−㉓ 足の甲に接着剤をつけ、靴の甲の皮をはりつける。

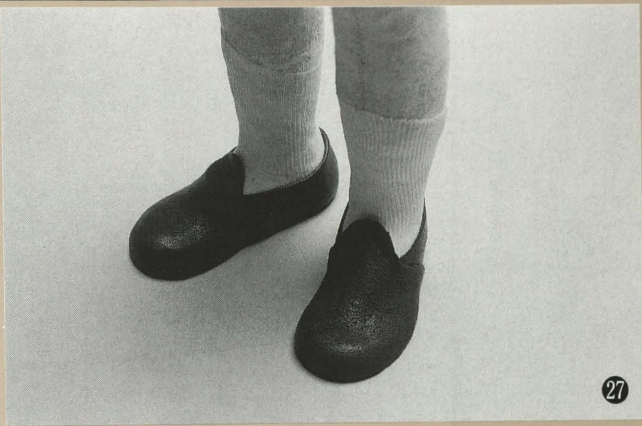
9−㉔ つま先の部分に接着剤をつけて、ふちにしわがよらないように皮をかぶせる。

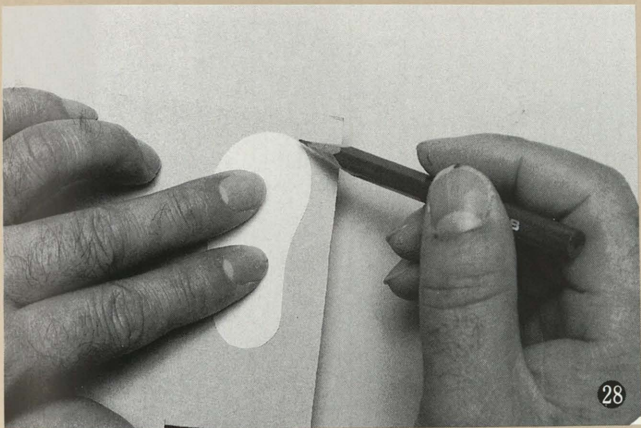
9−㉕ 足の裏にはみでた皮はのりしろ3mmを残して切る。

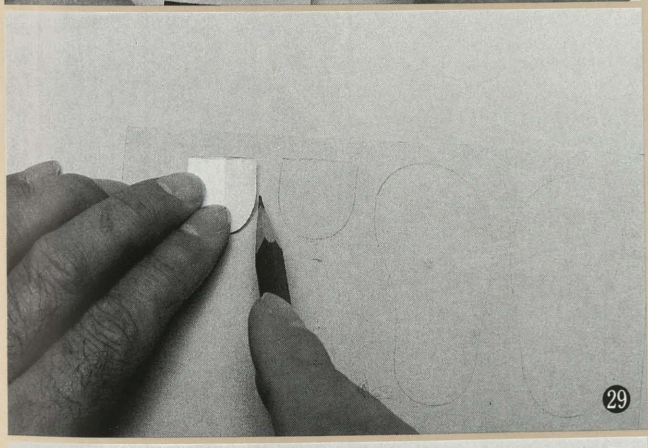
9−㉖ 親指の爪を使って、のりしろを底にぴったり接着させる。

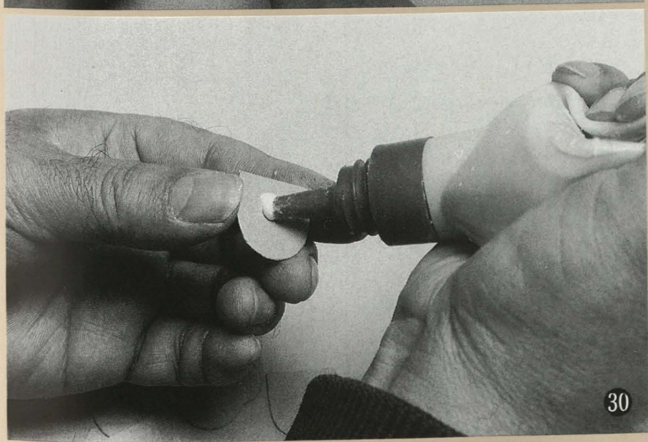
9−㉗ 靴の側面と甲がついた状態。



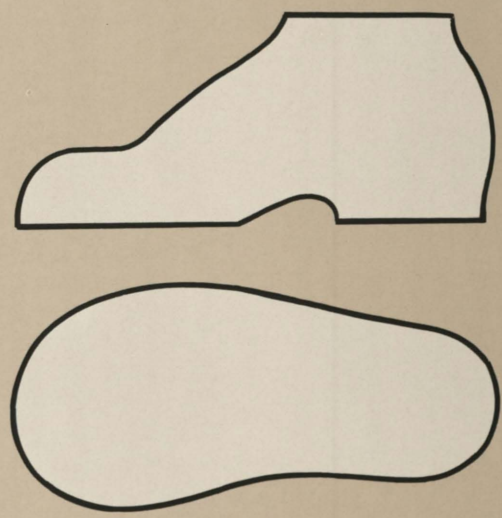








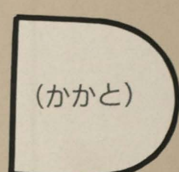
靴

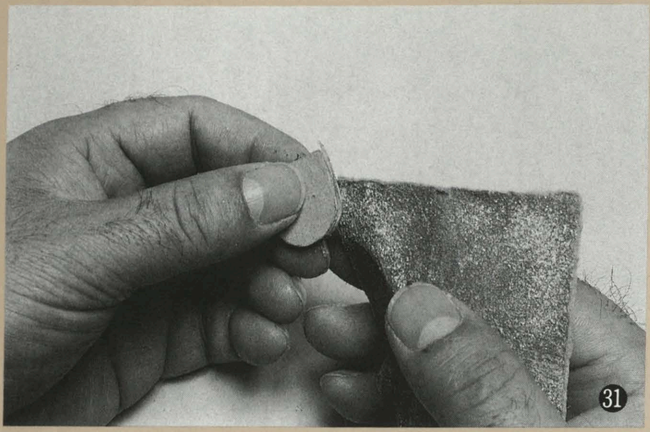


9−㉘ 薄めのボール紙に靴の底の型を2枚とる。

9−㉙ かかとの部分も4〜5枚ずつ、型をとる。かかとの高さが3mmぐらいになるように、人形の足の下に置いてみて、立ち具合によってはボール紙の枚数を調節する。

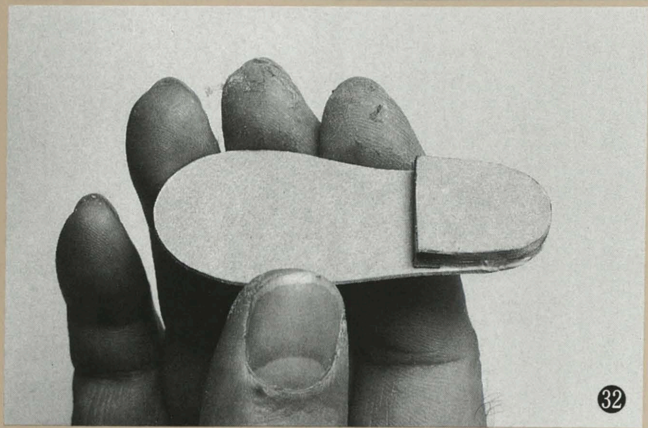
9−㉚ かかとのボール紙をボンドではりあわせる。

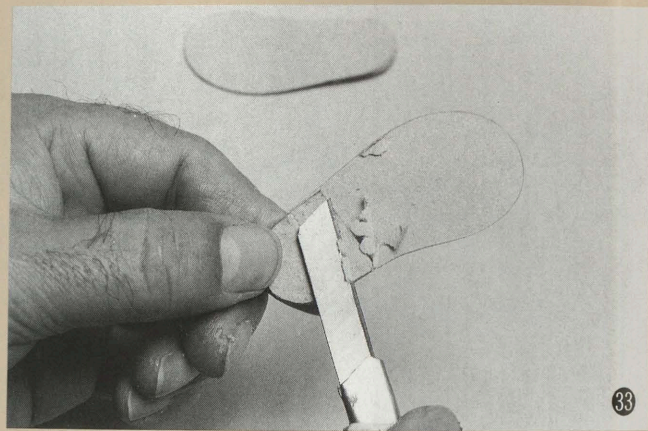


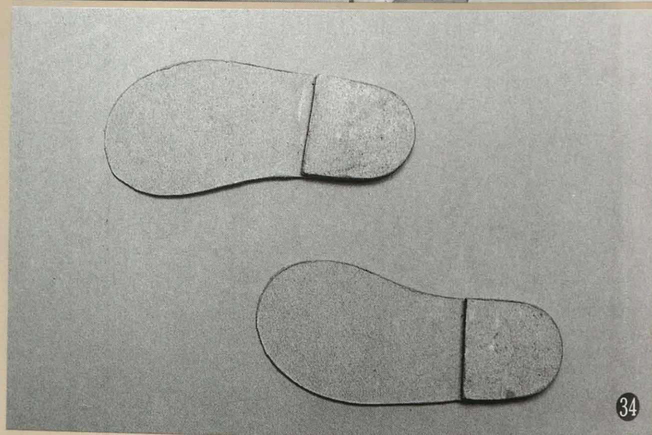


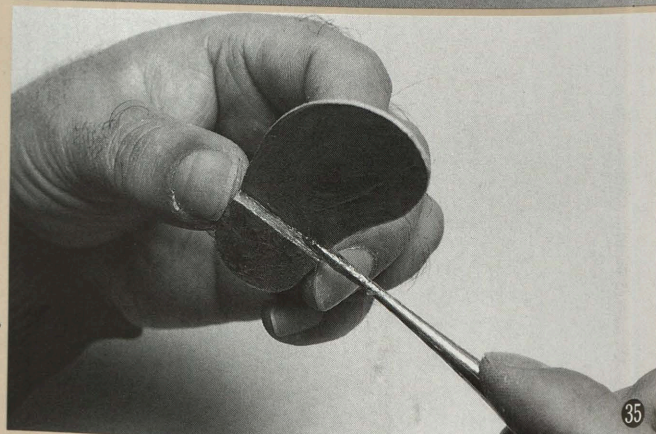
9−㉛ 接着剤が乾いたら、側面を紙やすりやこてを使ってきれいにする。

9−㉜ 靴の底にはりあわせる。









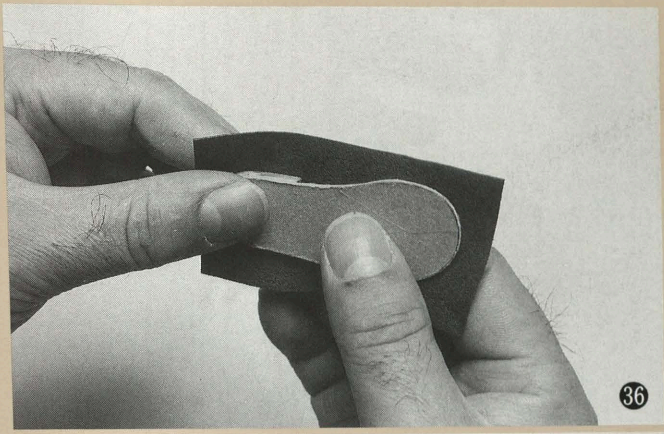
9−㉝ かかとはカッターで前方に斜めに削り、底が地面につきやすいようにする。

9−㉞ 同じようにもう片方の底もつくる。

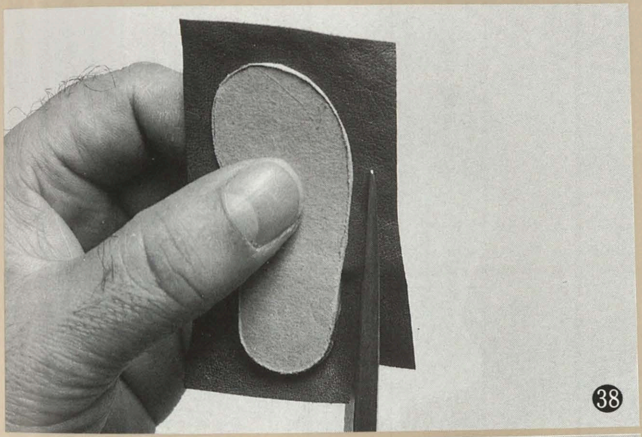
9−㉟ 靴の底に接着剤をつける。かかとの段差にも念入りに接着剤をつける。

9−㊱ 皮の裏が表になるように、底にぴったりはりつける。

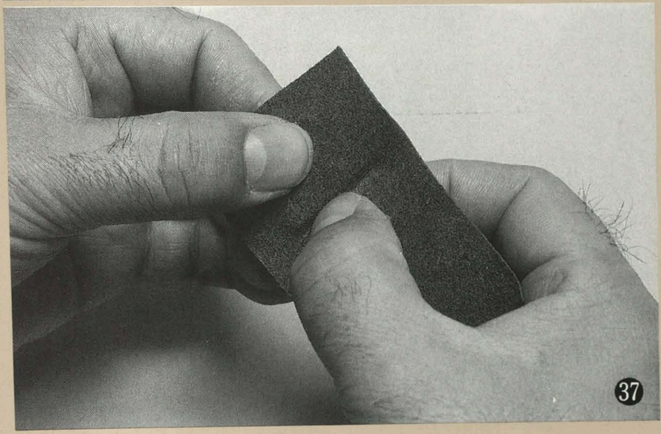
9−㊲ かかとの段差も親指の爪できっちり押さえる。



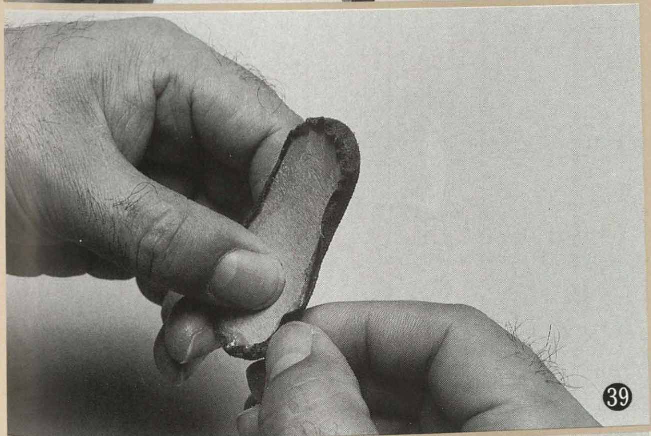
㊱



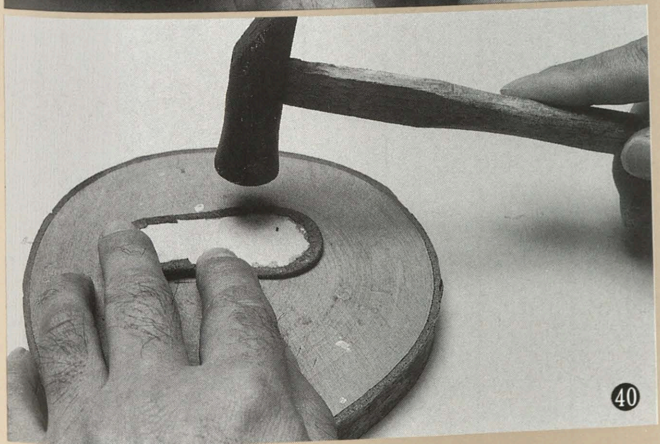
㊳



㊲



㊴



㊵

9−㊳ 底の厚さプラス3㎜ののりしろを残して、周りを切る。かかとの高さに気をつけて、かかともきちんと覆うようにする。

9−㊴ のりしろに接着剤をつけて折り返す。

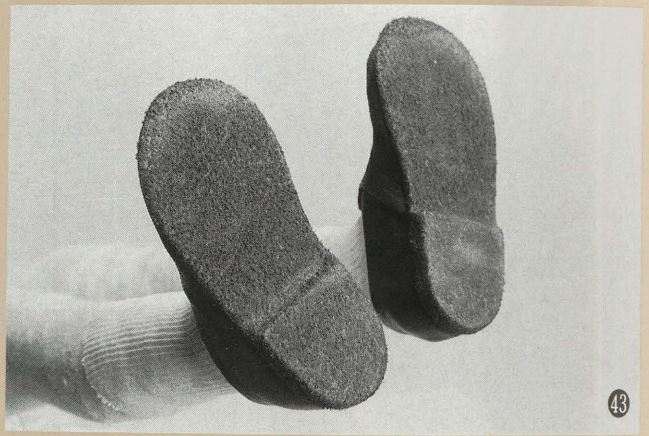
9−㊵ 折り返した部分を金づちでたたき、たいらにする。

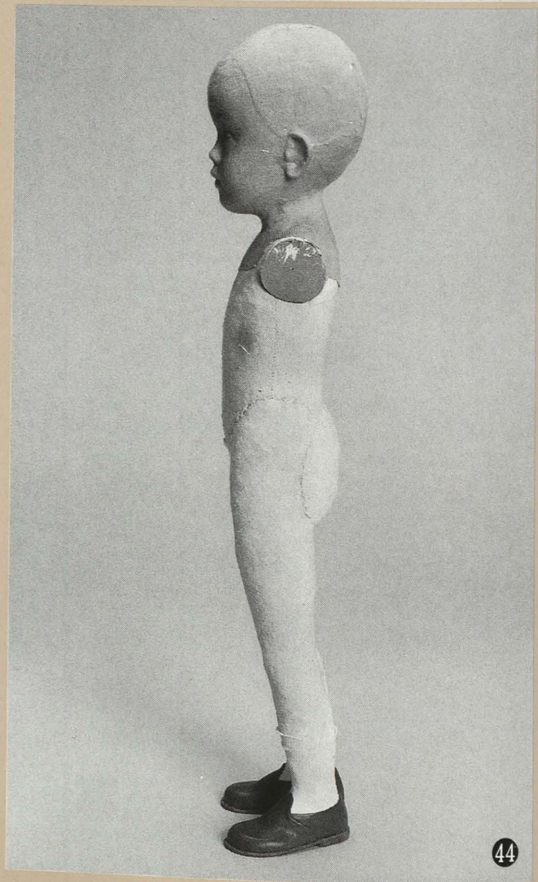


9−❹❶ 靴の本体と底を接着剤ではりあわせる。目打ちなどを使って、接着剤がはみ出ないようにきれいにつける。

9−❹❷ 靴ができあがった状態。少し爪先をそらすようにすると感じがでる。





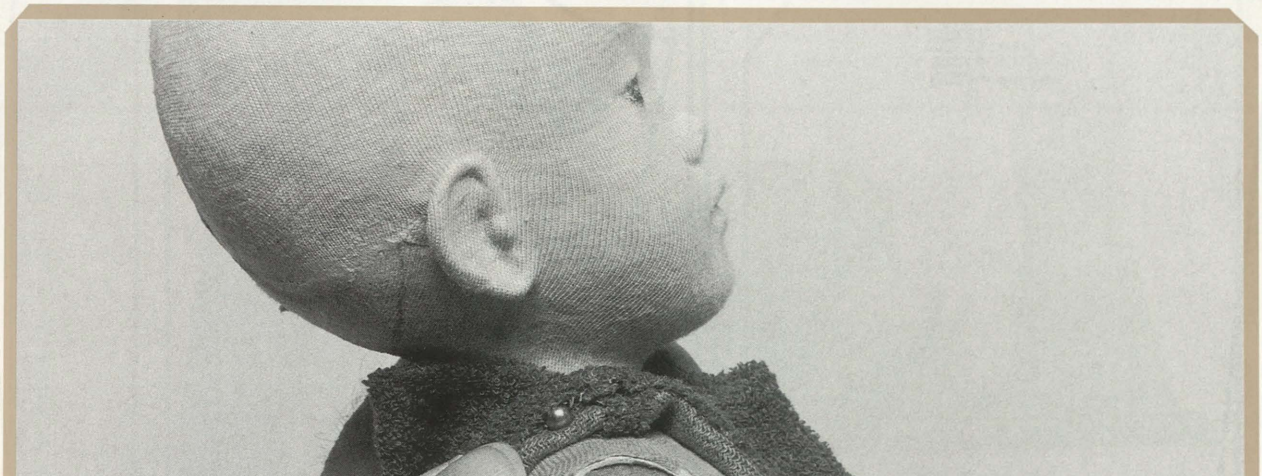


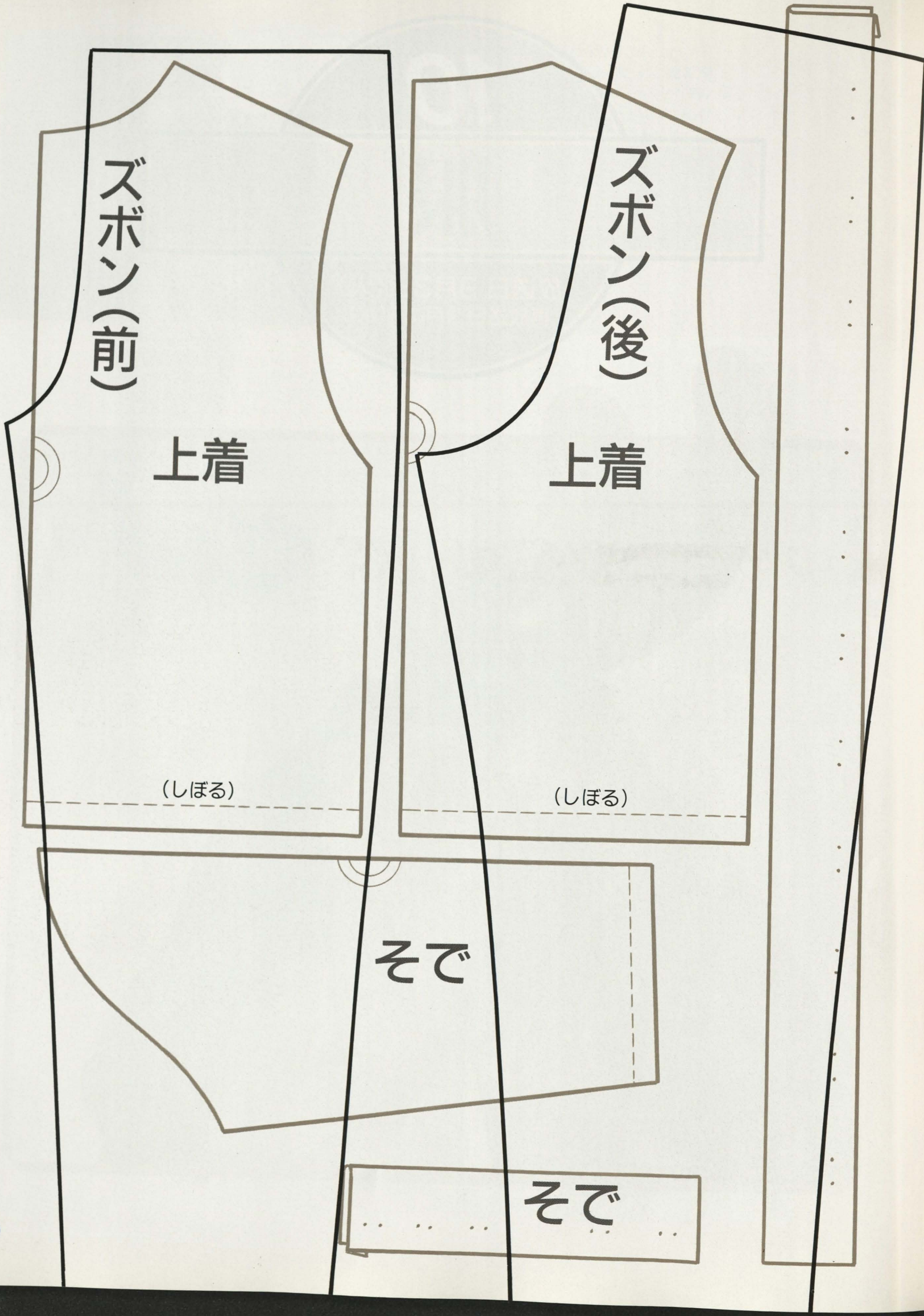
9−❹❸ 靴の裏のようす。

9−❹❹ やや後ろにそっていた人形の姿勢がちょうどよくなる。

10
服

放送日 9月3日（火）
再放送日 9月4日（水）




ズボン（前）
上着
（しぼる）
ズボン（後）
上着
（しぼる）
そで
そで

「服の着せつけ」

◉腕づけ

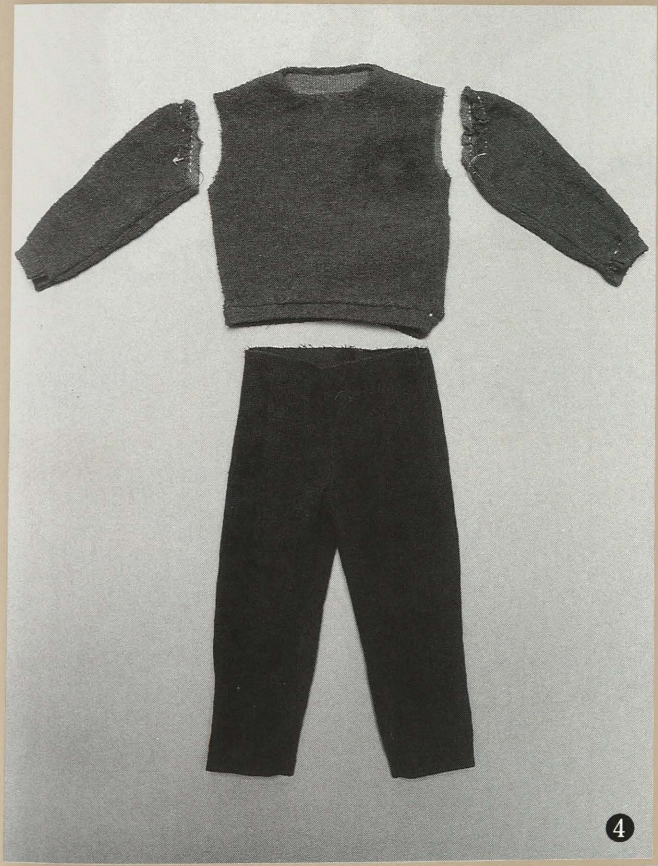
10−❶ 天竺など薄手の布で簡単な下着をつくる。

10−❷ 下着をつけることで服のラインが自然になる。

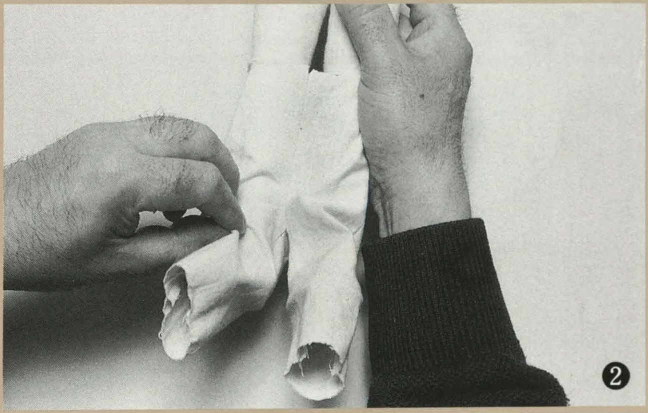
10−❸ 下着を人形のウエストに縫い付ける。同じようにして、ズボンを履かせる。



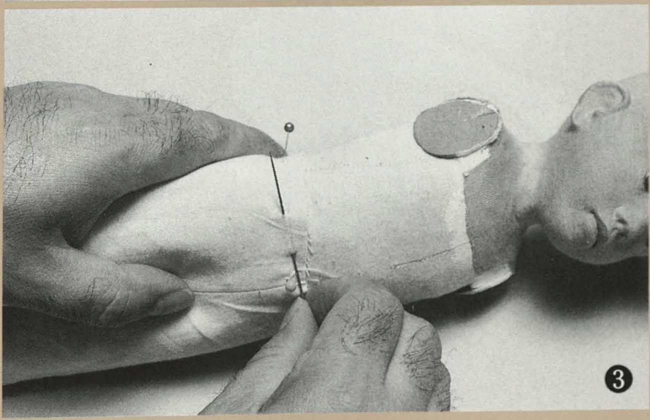
❶



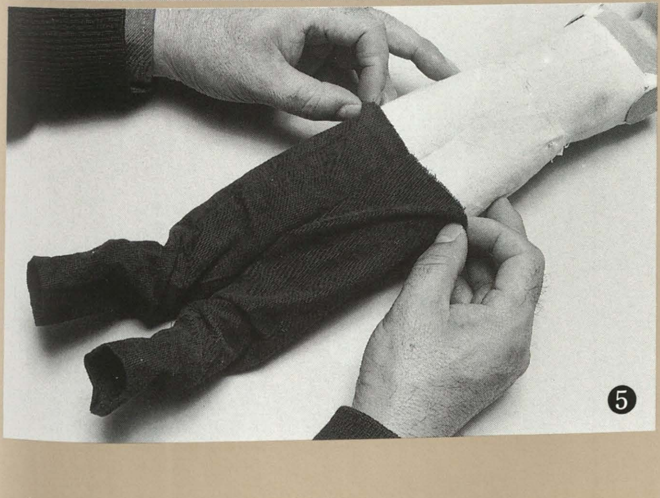
❹



❷



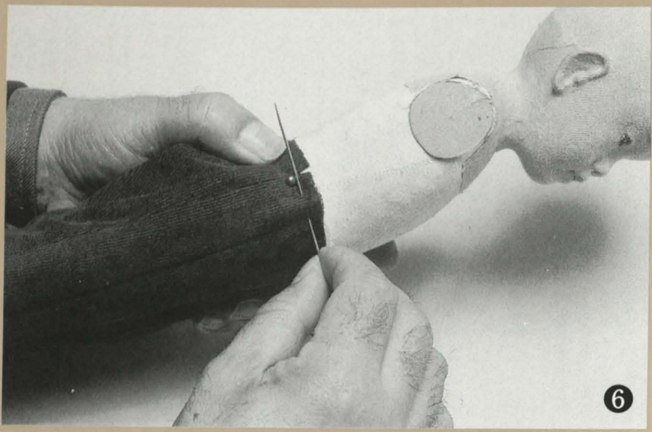
❸



❺

10−❹ 型紙を使って洋服をつくる。まだ上着のそでは身ごろと縫い合わせない。そで口は開けておく。身ごろの肩の縫い合わせは後で少しほどくことになるが、とりあえず縫っておく。

10−❺ 人形にズボンを履かせる。

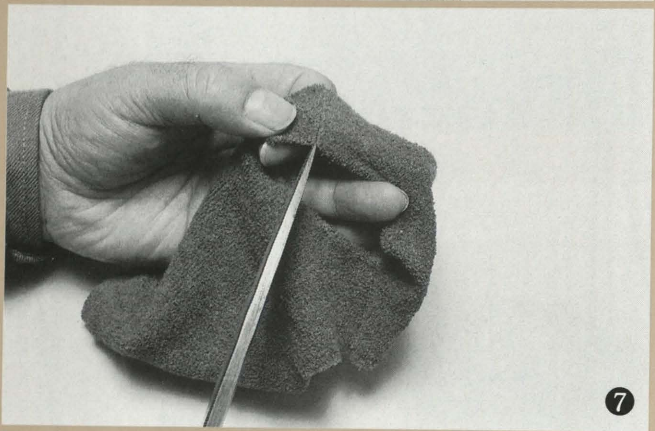


❻

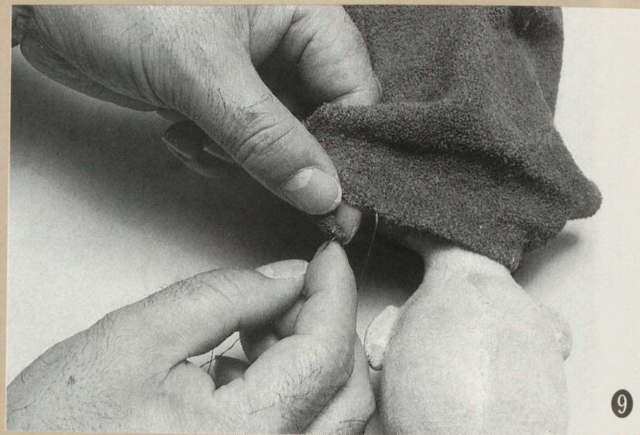
10−❻ ウエストを縫い付ける。

10−❼ 上着の身ごろは肩の縫い目を片方だけほどき、人形の頭が入るように開く。

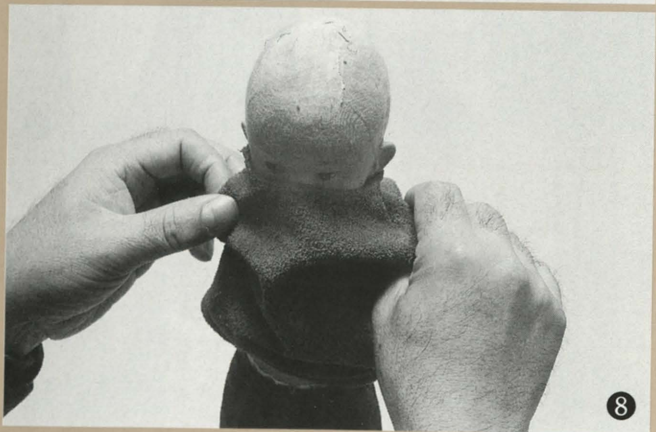
10−❽ 人形の頭をくぐらせる。



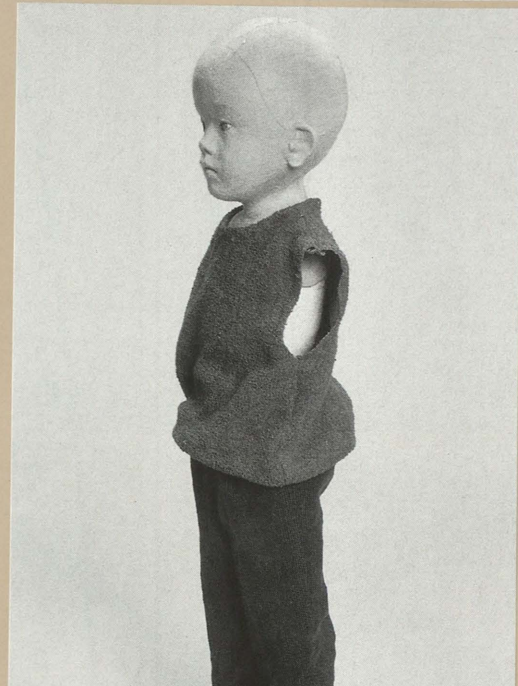
❼



❾



❽



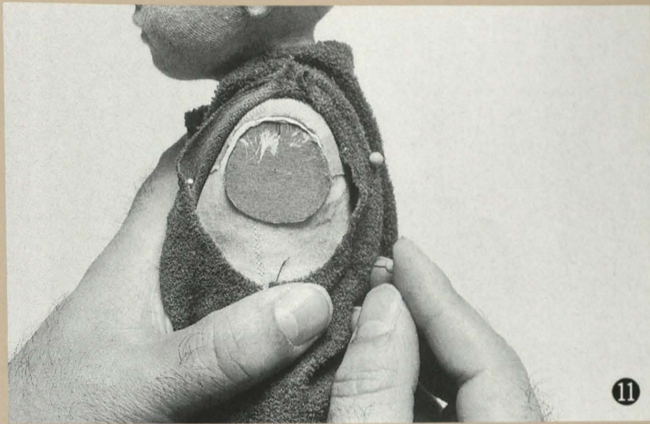
❿

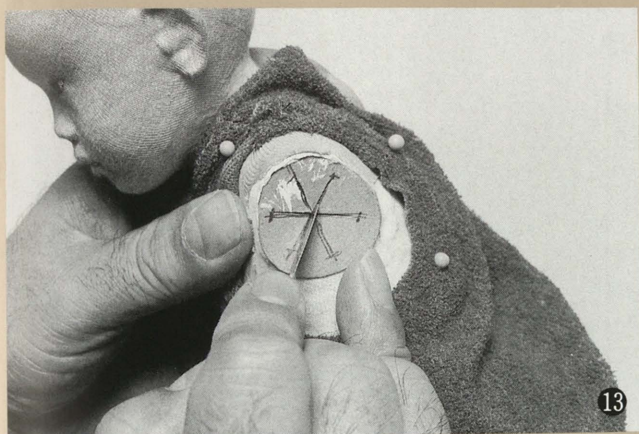
10−❾ ほどいた肩の縫い目を前に縫ったとおりに縫い直す。

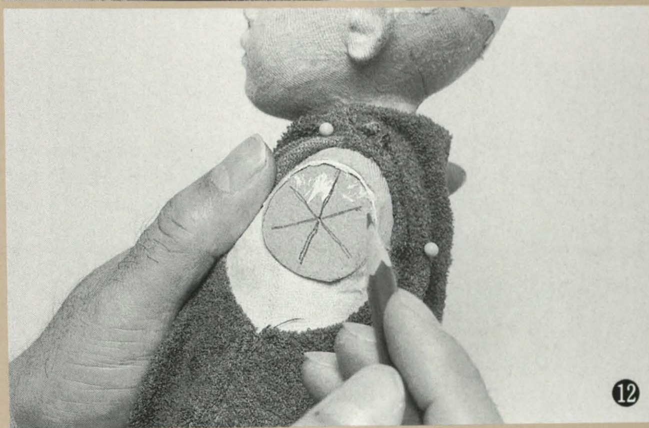
10−❿ 着せつけた状態。

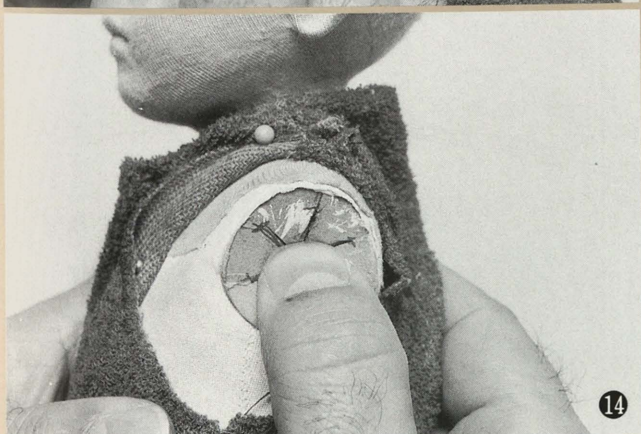
10−⓫ 腕の付け根が見えるように、そでをまくってまち針で止めておく。

10−⓬ 腕の付け根につけたボール紙に鉛筆で放射線状の印をつける。







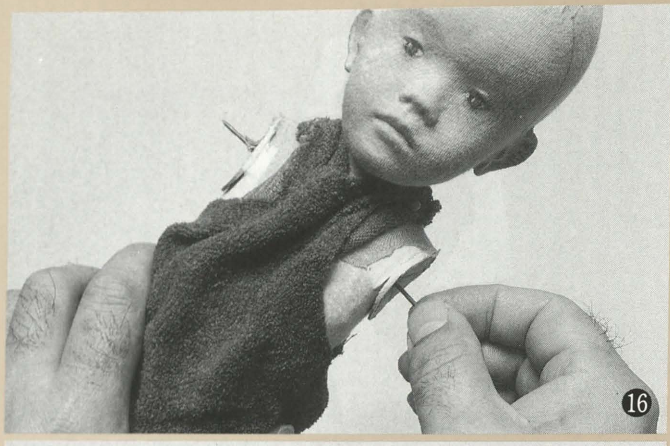




10−⓭ 線のとおりにカッターで切り込みを入れる。

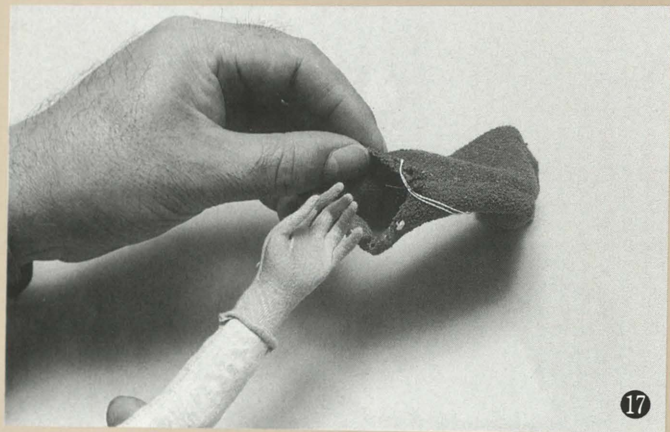
10−⓮ その上を指で押さえ、くぼみをつくる。こうしておくと、腕をつける時にぴったりおさまりやすくなる。左右同じようにする。

10−⓯ 千枚どおしを腕の付け根の片側から反対側に突き通す。



10-⑯ 突き通したあとに長さ12cmの16＃の針金を通す。

10-⑰ 腕にそでを通す。この時はそではひじぐらいまで下げておく。





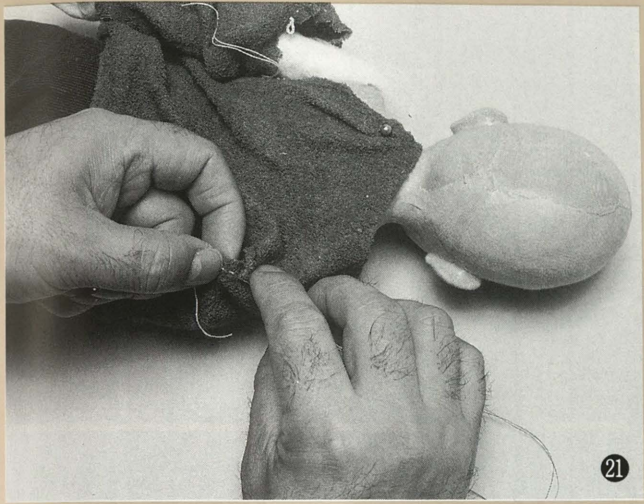


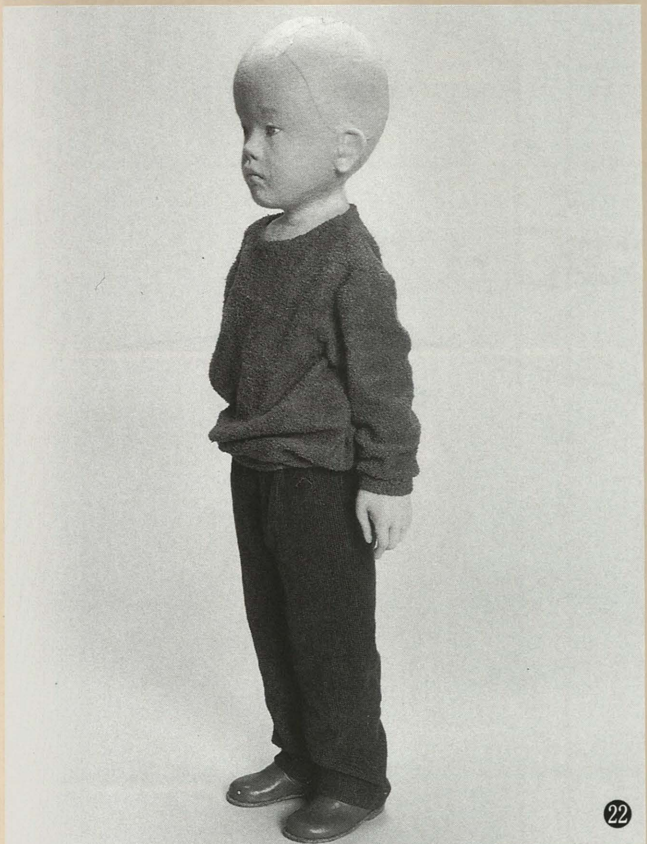
10-⑱ そで口を縫い合わせる。

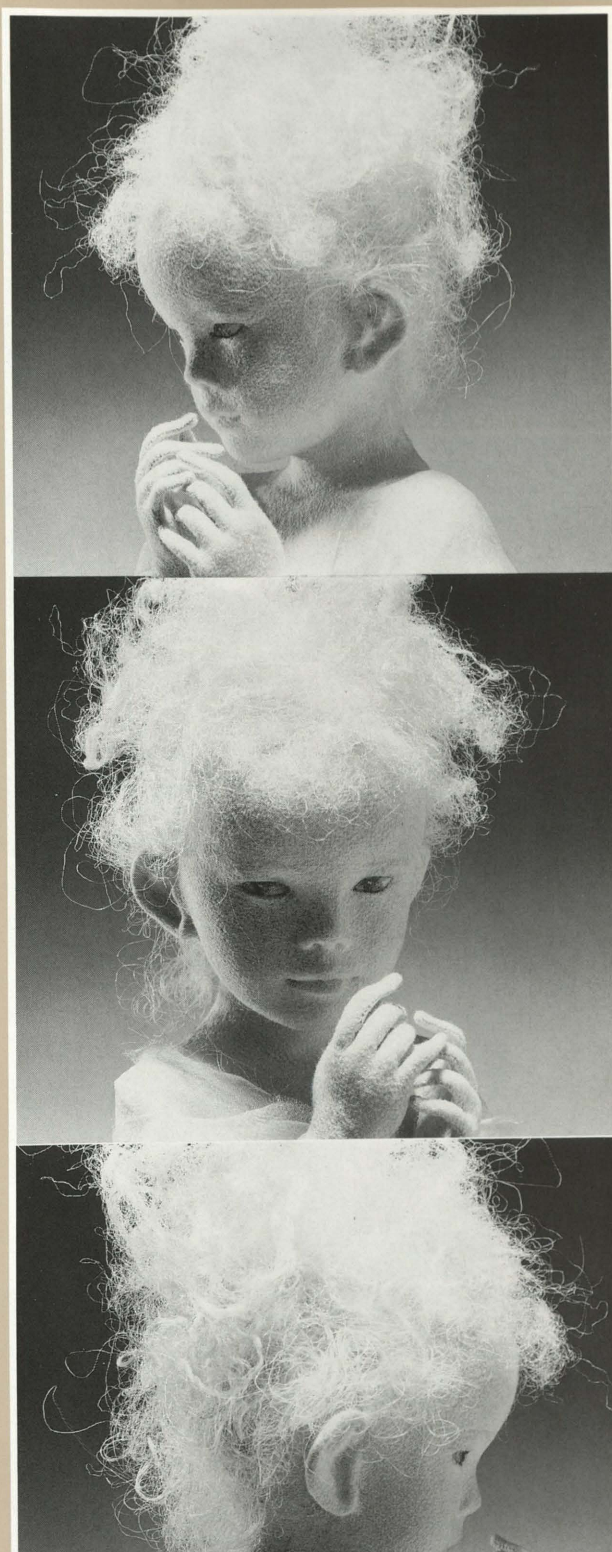
10-⑲ 肩から突き出ている針金の位置に合わせて、腕にも穴を開ける。

10-⑳ 針金に腕を差し込み、腕から突き出た針金の先を腕のぎりぎりのところで折り曲げる。反対側にも腕を通し、突き出た針金を強く引っ張りながら腕のぎりぎりのところで曲げる。針金が少しくいこむようにするとしっかり固定する。



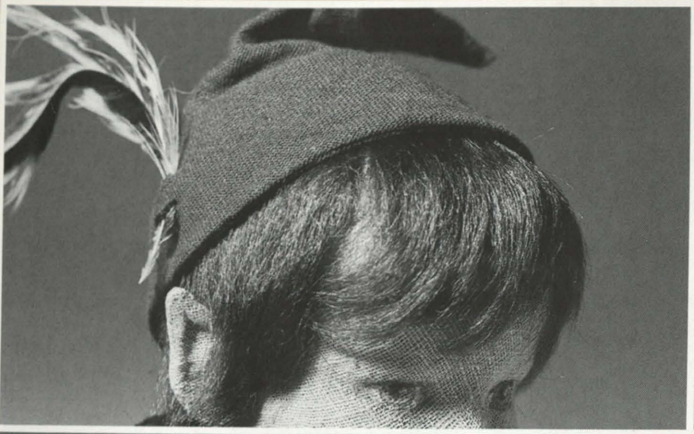


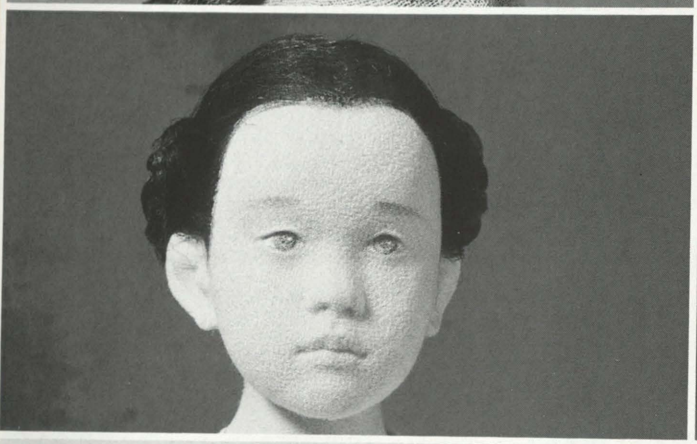


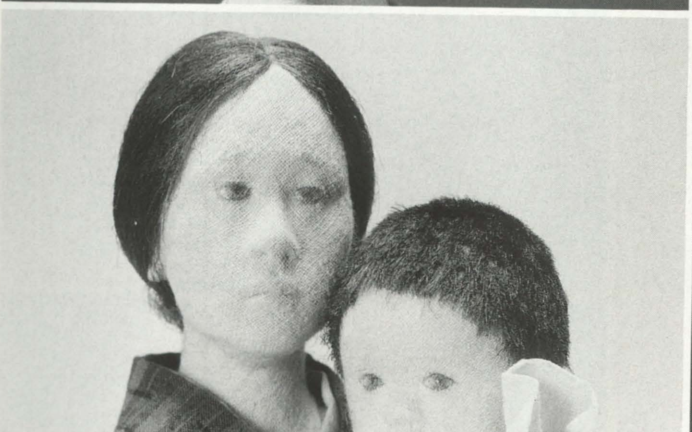
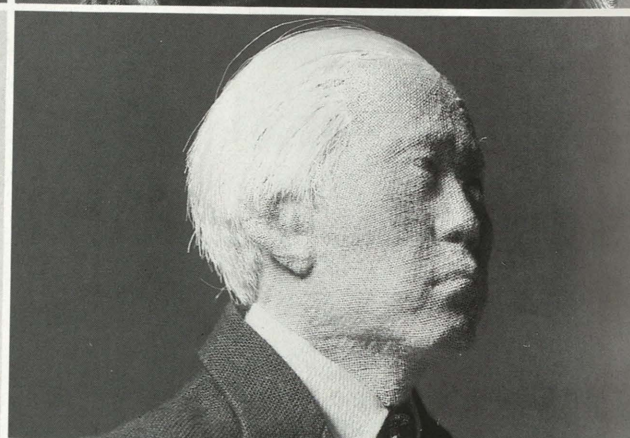


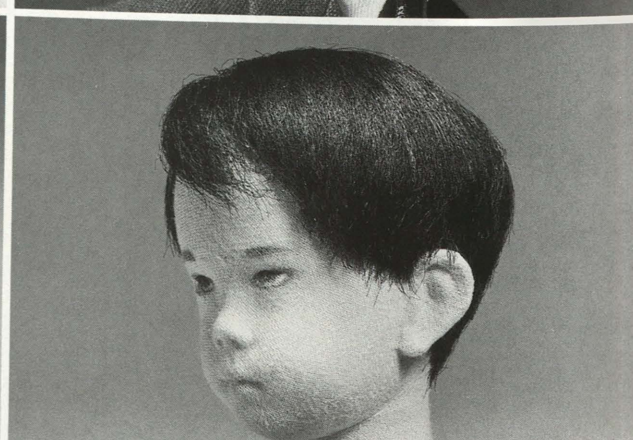
10-㉑ 身ごろとそでを縫い合わせる。脇の下までは縫えないので、見える部分だけでよい。

10-㉒ 服の着せつけが終わった状態。







11
髪

放送日 9月10日(火)
再放送日 9月11日(水)

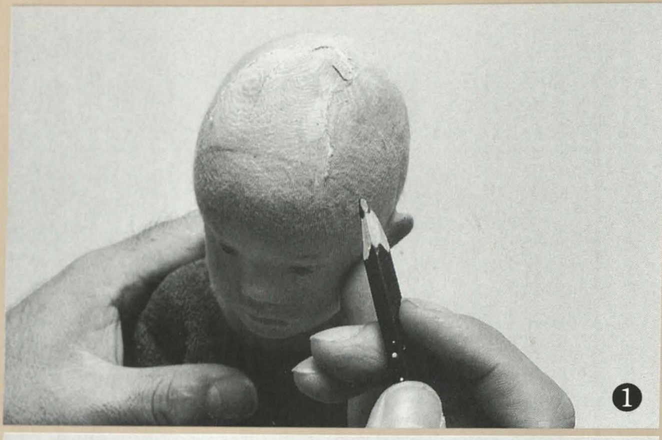


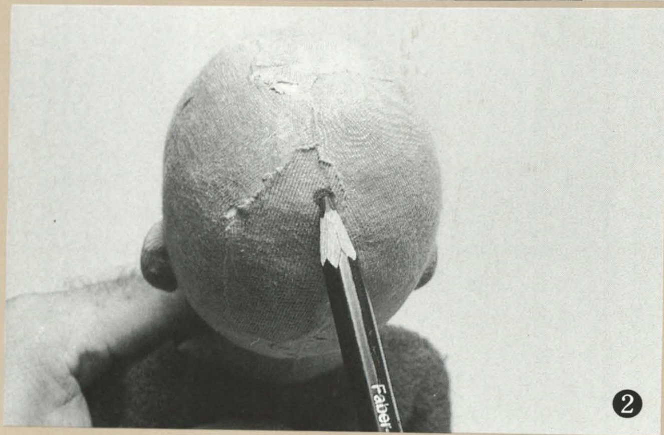
「総仕上げ」

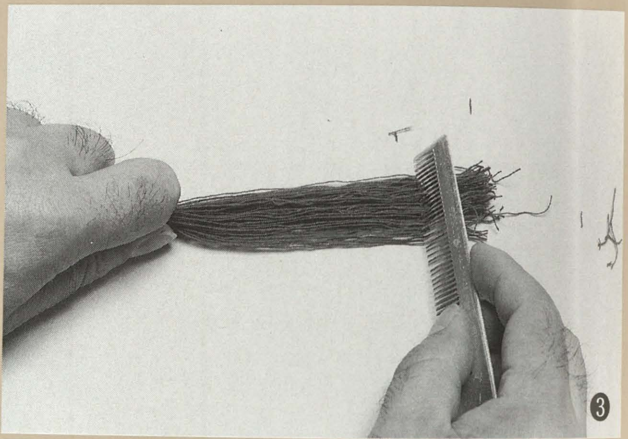
◉髪づけ

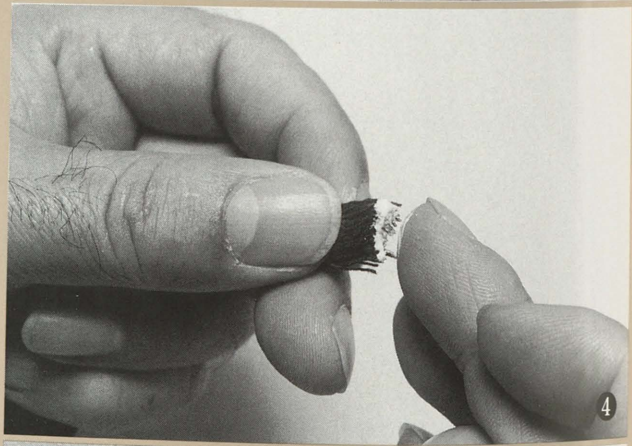
11−❶ 鉛筆で髪の生え際のラインを描く。

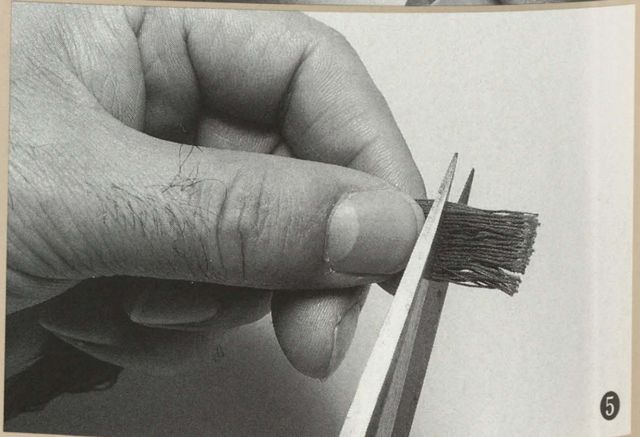
11−❷ 同時につむじの位置も描いておく。











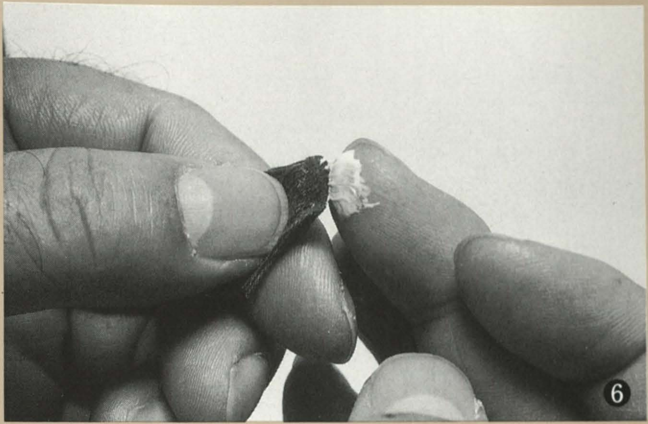
11−❸ ダークブラウンに染めた白毛を30〜40本そろえてくしでとかす。

11−❹ 先をそろえて切り、ばらばらにならないように、切り口にボンドをつけて固める。

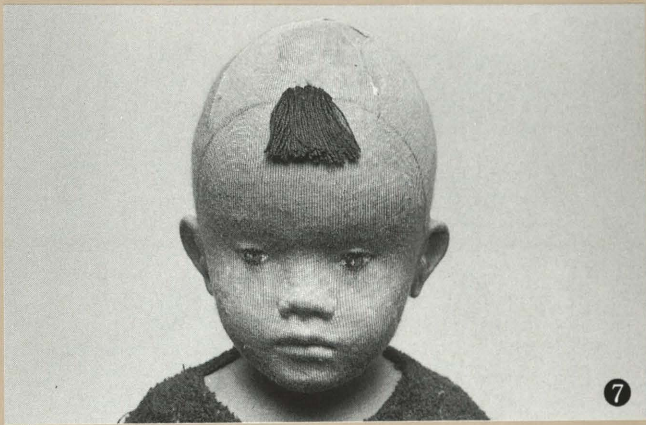
11−❺ それを2cm幅ぐらいに切る。同じものを50枚ほどつくっておく。

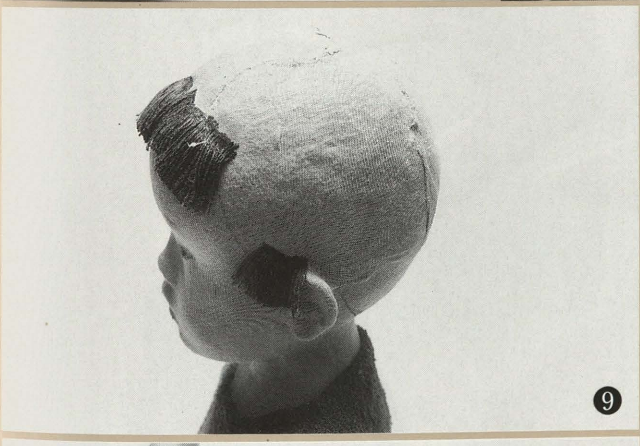
11−❻ つくっておいた髪の毛の束の根本にボンドをつける。

11−❼ 生え際のラインに沿って、正面からはっていく。











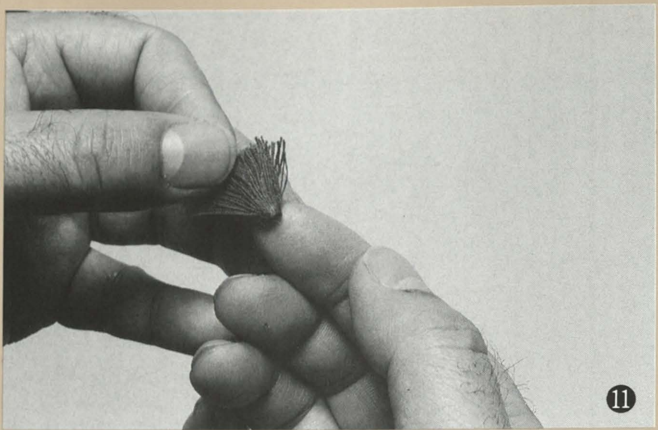
11−❽ ボンドをつけた部分をこてで押さえ、よく接着させる。

11−❾ もみあげの部分は少し耳の上にかかるようにはる。束が重ならないように、一まわりはっていく。

11−❿ 2段目は1段目の根本と少しずらしてはっていく。これを繰り返し、頭のてっぺんまで進める。

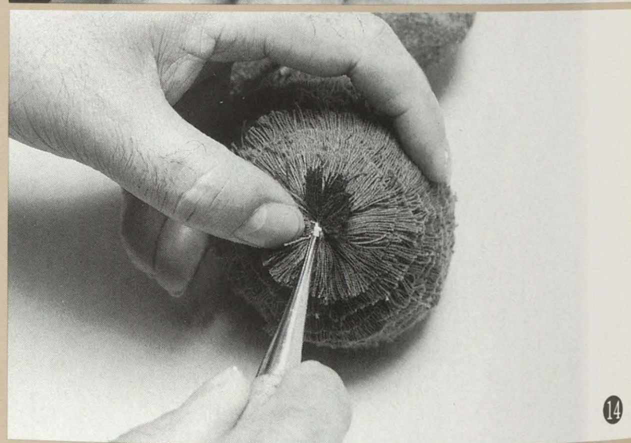
11－⓫ つむじに近づいてきたら、髪の束の根本をつまんで扇形にしたものを5、6枚つくる。

11－⓬ つむじを中心にはっていく。













11－⓭ 残りがつむじだけになったら、つむじの印に目打ちで穴を開ける。

11－⓮ 扇形にした髪の束の先を穴の中に目打ちで押し込む。穴のまわりから3枚ぐらい髪の束を押し込み、穴をうめていく。

11－⓯ 髪に等間隔で段々がついた感じになる。

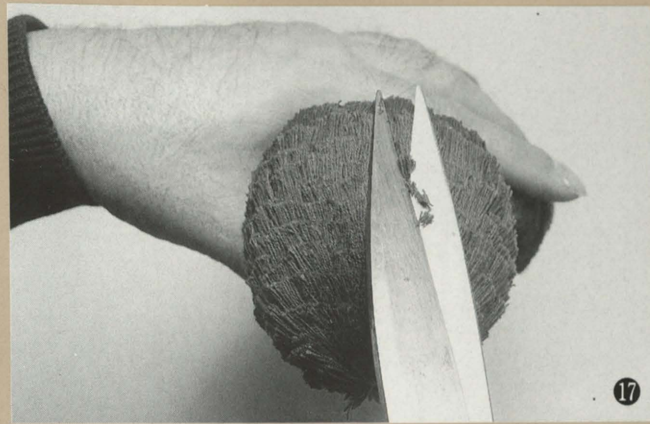
11－⓰ 髪をくしで整える。

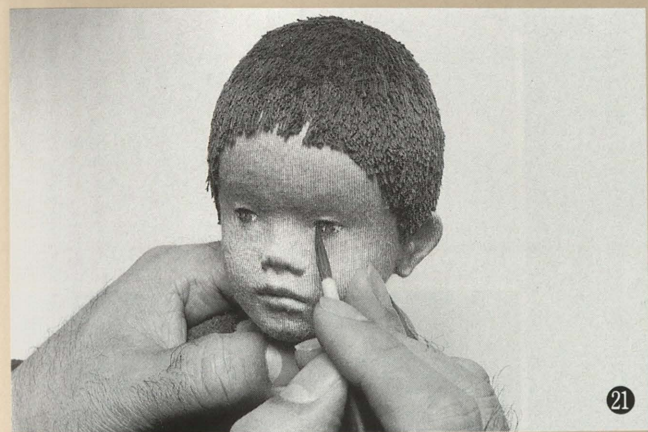
11－⑰ 髪の毛の流れに沿って、縦にはさみを入れていく。時々くしでとかしながら様子を見て、自然な形になるように細かくはさみを入れていく。切りすぎないように注意する。

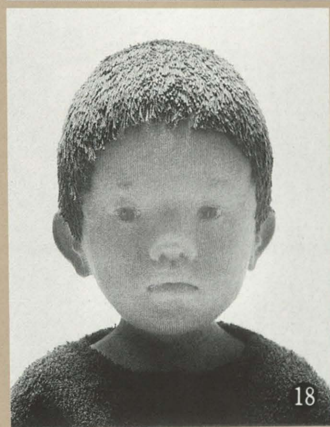
11－⑱ 髪づけ完成（正面）。

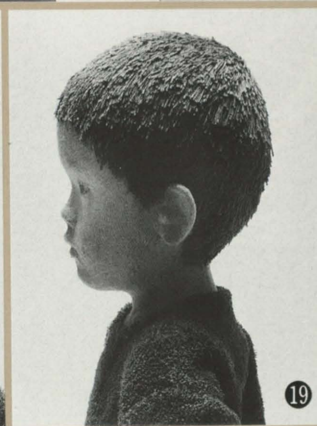
11－⑲ 髪づけ完成（横）。

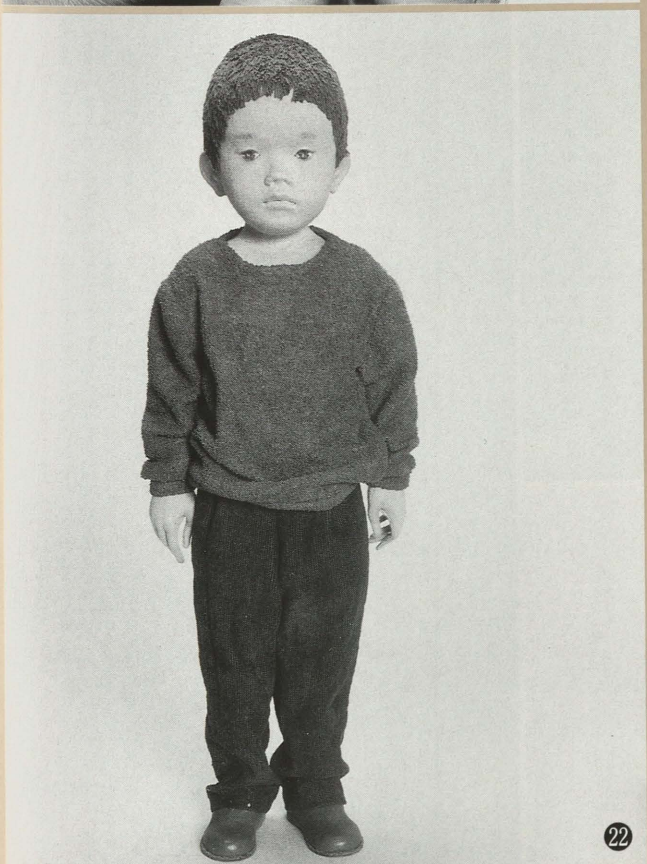
11－⑳ 髪づけ完成（後頭部）。

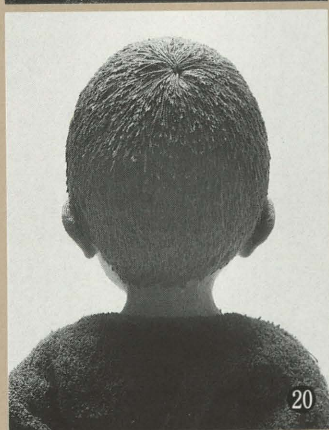

⑰


㉑


18


⑲


㉒


20

◉メイク

11－㉑ 全体の仕上がりを見て、最終的なメイクをする。仕上がり次第で顔の感じも変わってくる。

11－㉒ 「男の子」の完成。





12
道化(Ⅰ)

放送日 9月17日(火)
再放送日 9月18日(水)



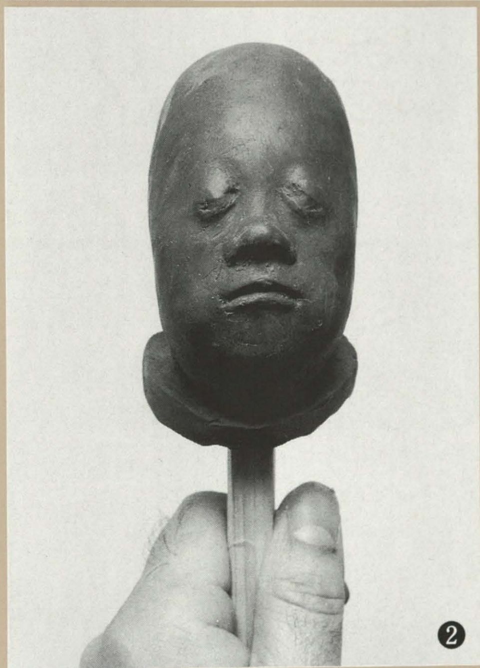
「道化」をつくる

デッサンと完成

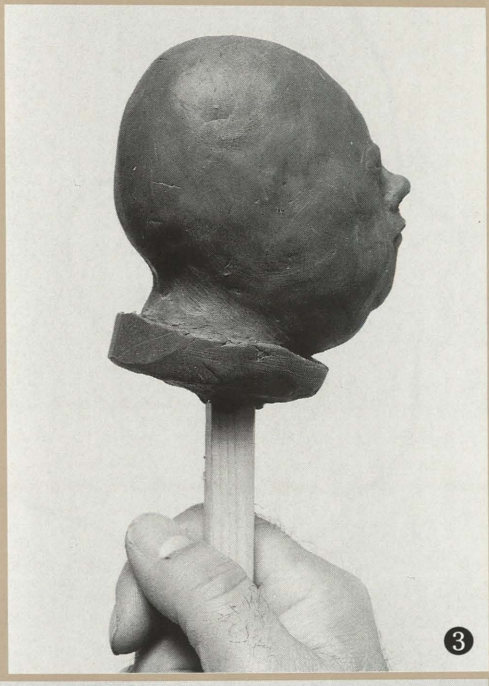




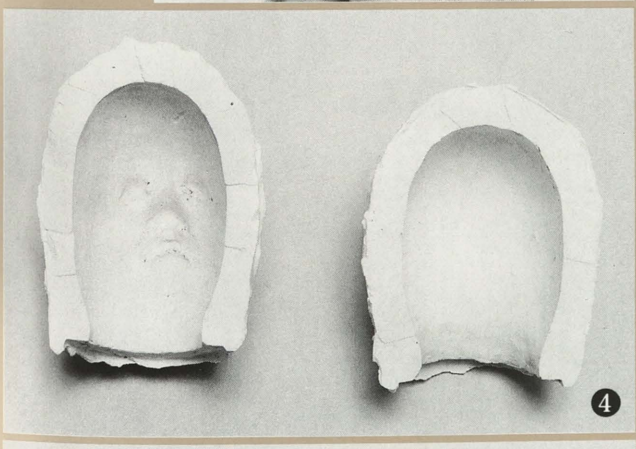
❶



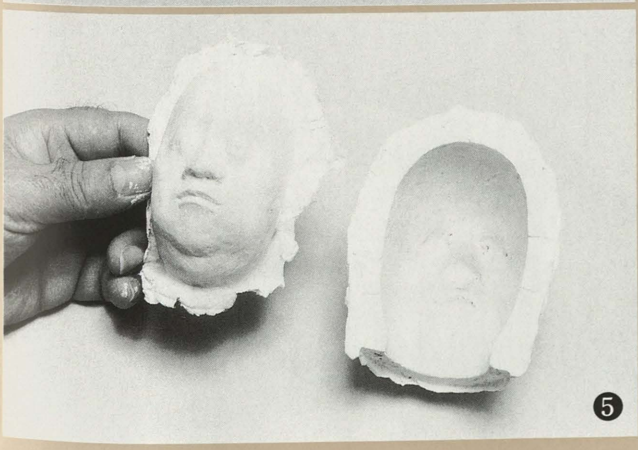
❷



❸



❹



❺

「道化づくり」

◉頭部づくり

12−❶ 油土で頭部原型をつくる。しんや油土の大きさは「男の子」の時より少し小さめのものになる。首を短くし、あごの下や頬にたるみをつける。

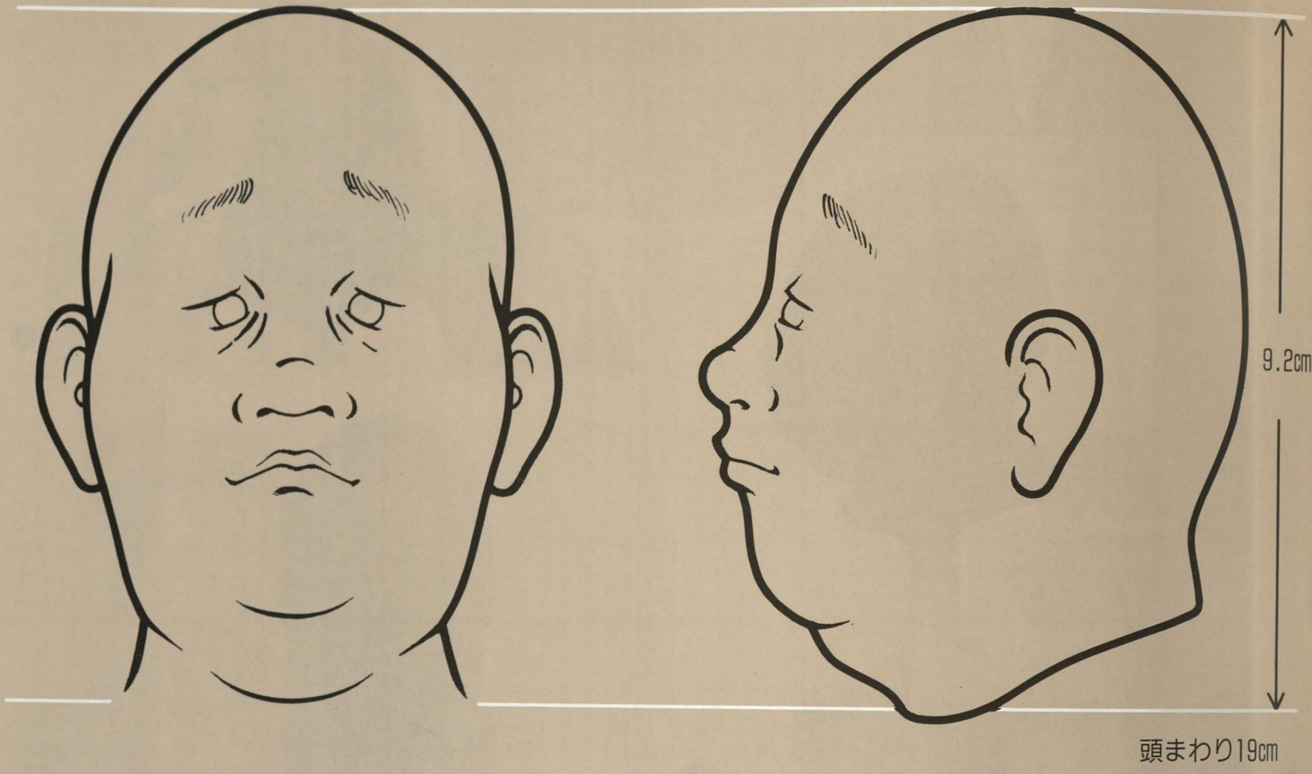
12−❷ 正面から見ると、面長の感じになる。

12−❸ 前の部分はほとんど首がないようになる。

12−❹ 「男の子」の時と同じ要領で、頭部原型に石膏をかけ、型をとる。

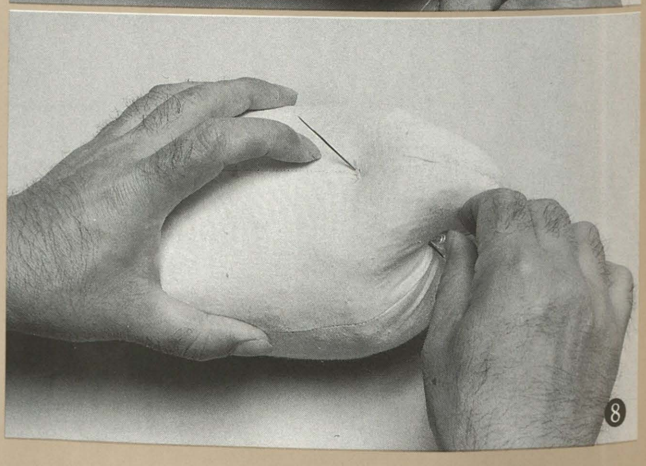
12−❺ 石膏の型で顔面、後頭部ともに張り子をする。

頭部原寸大図









◉ボディ

12-❻ 型紙にそって胴、腕、脚をつくる。胴に入れる木毛は約140gで、胴は腹をふくらませ、脚の太腿やふくらはぎも太くなる。

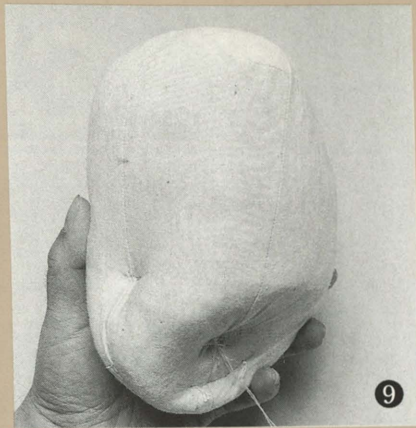
12-❼ 胴の脚の付け根を縫いしぼって、中の木毛を引き締めておく。かや縫い針やテント針など長い針を使って、脚の付け根から背中の中心の下5cmぐらいのところに針を通す。

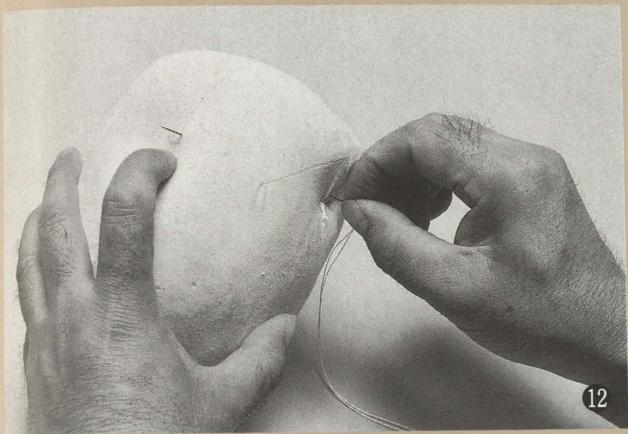
12-❽ それを2、3回繰り返し縫い、おしりが突き出るようにする。

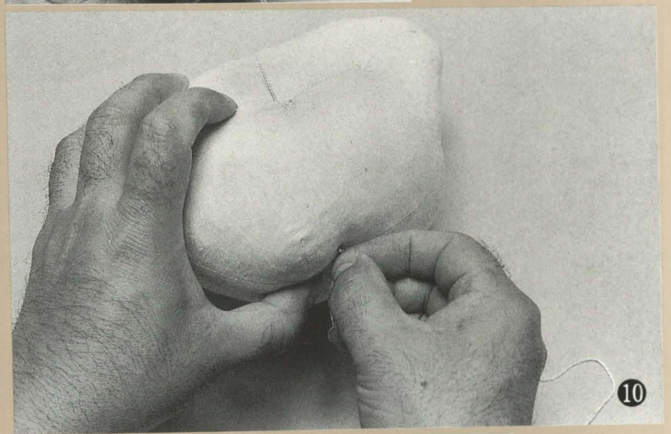
12−❾ 反対側からも同じように針をとおす。

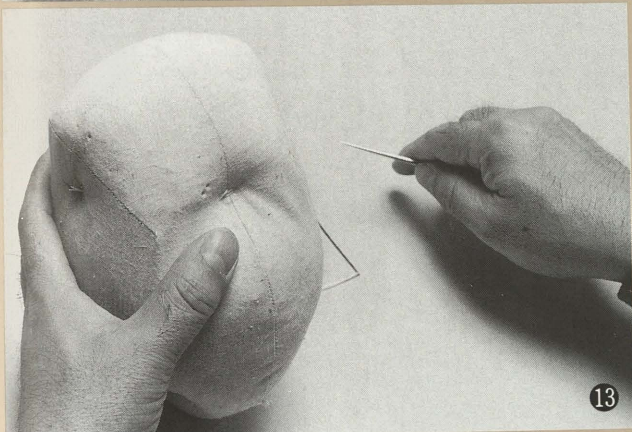
12−❿ 次に腕の付け根から、背中の中心の上7cmぐらいのところに針を通す。左右両側から2、3回繰り返し、背中を少しそらす感じにする。

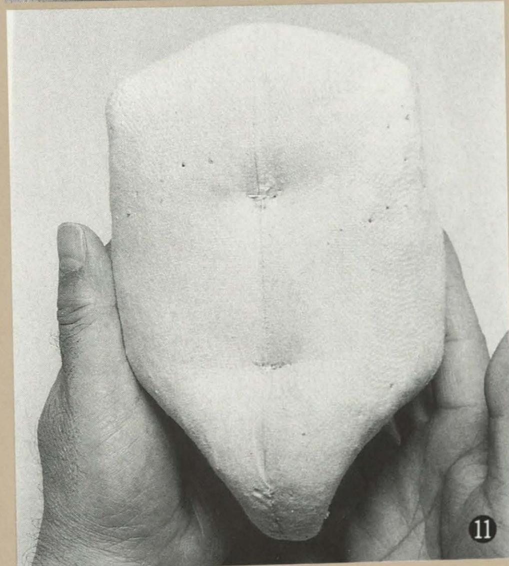
12−⓫ 背中の縫いしぼりが終わった状態。

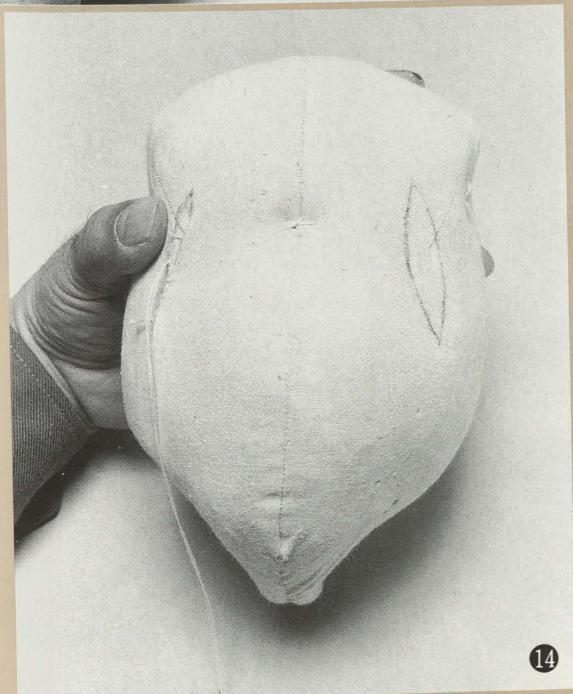












12−⓬ 胸の上6cmぐらいのところに腕の付け根から針を通し、2、3回繰り返して縫いしぼる。

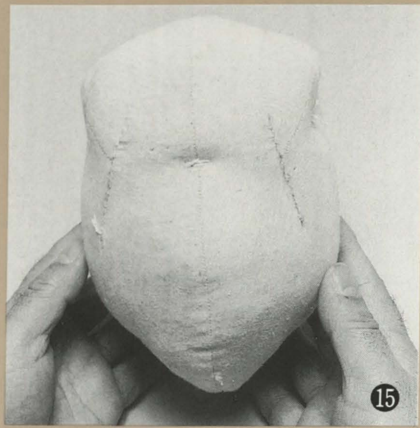
12−⓭ 反対側も同じようにする。

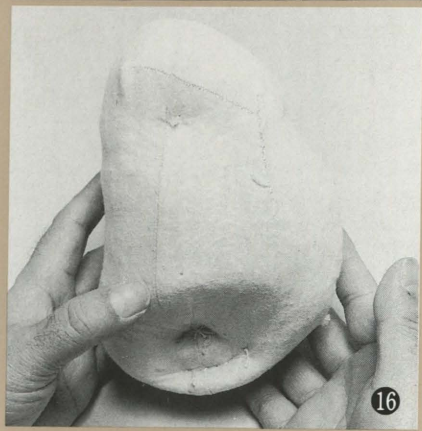
12−⓮ 胸の両脇、中心から3.5mmぐらいのところを最大幅1cmほど縫いしぼる。

12－⑮ 縫い目の長さは5、6cmぐらいになる。

12－⑯ 縫いしぼることで腹のでっぱりが形づくられる。

12－⑰ 耳をつけてから頭部を胴につける。ついで両脚をつける。腕の付け根にはボール紙をはり、まち針で止めておく。

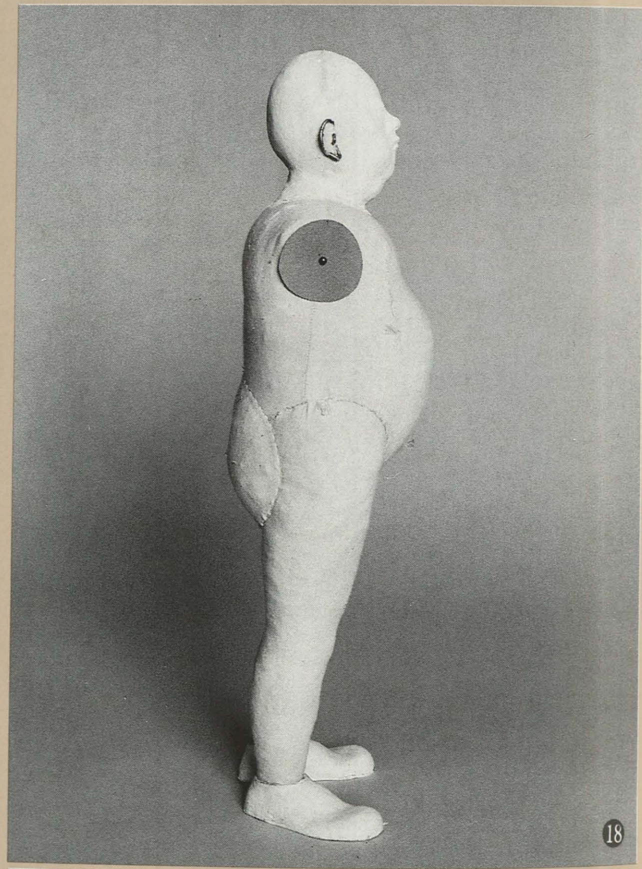


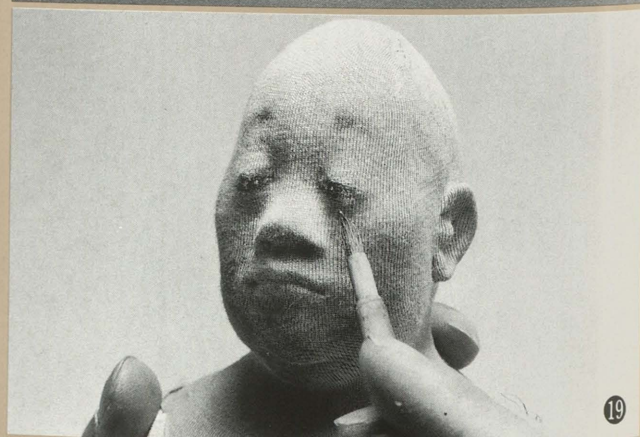




12－⑱ おしりにふくらみをつけ、足をつける。

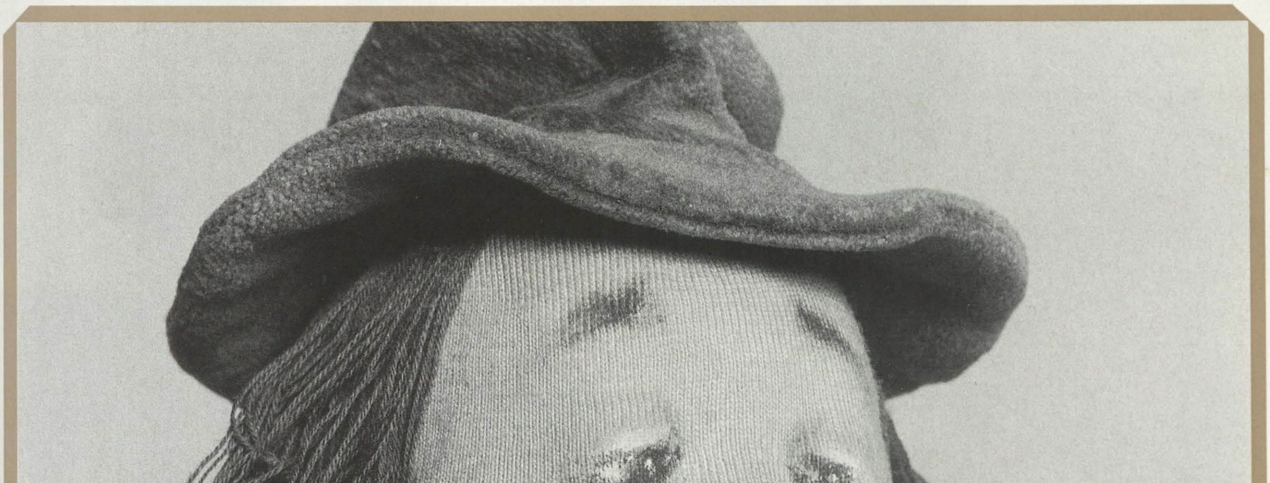
12－⑲ 頭部に肌色に染めたメリヤスをはり、簡単なメイクをする。





13
道化（2）

放送日 9月24日（火）
再放送日 9月25日（水）



◉靴

13-❶ 足にメリヤスの靴下を履かせる。

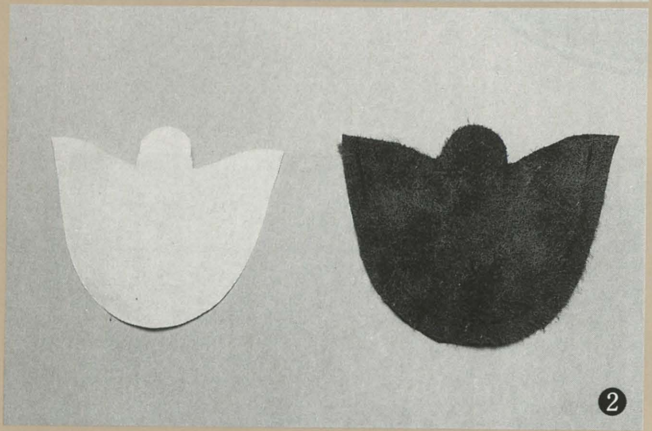
13-❷ 皮に靴の型をとる。皮は薄くやわらかいもの、色は黒系がいい。

13-❸ 道化の場合はひも靴なので、甲の部分からはっていく。靴の底はかかとが4mmぐらいの高さになるようにつくる。

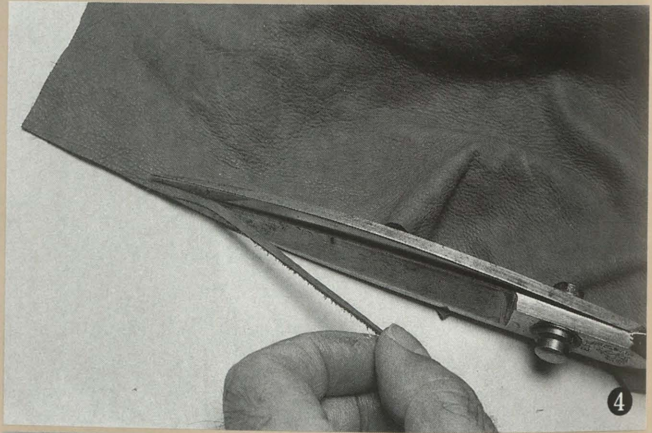
13-❹ 皮を幅2mm、長さ20cmぐらいに2本切って、靴ひもをつくる。

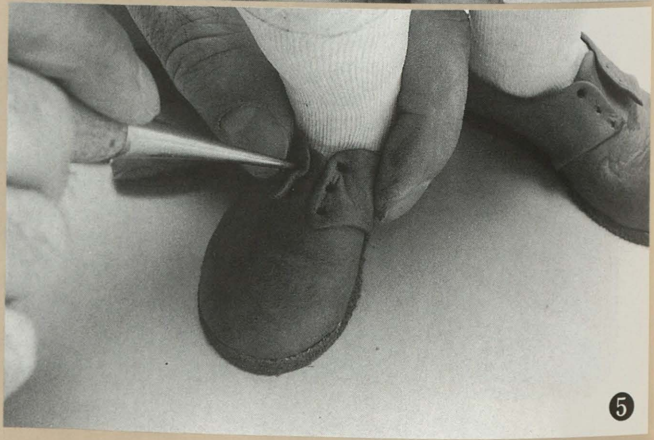
13-❺ 目打ちで靴にひもをとおす穴を開ける。

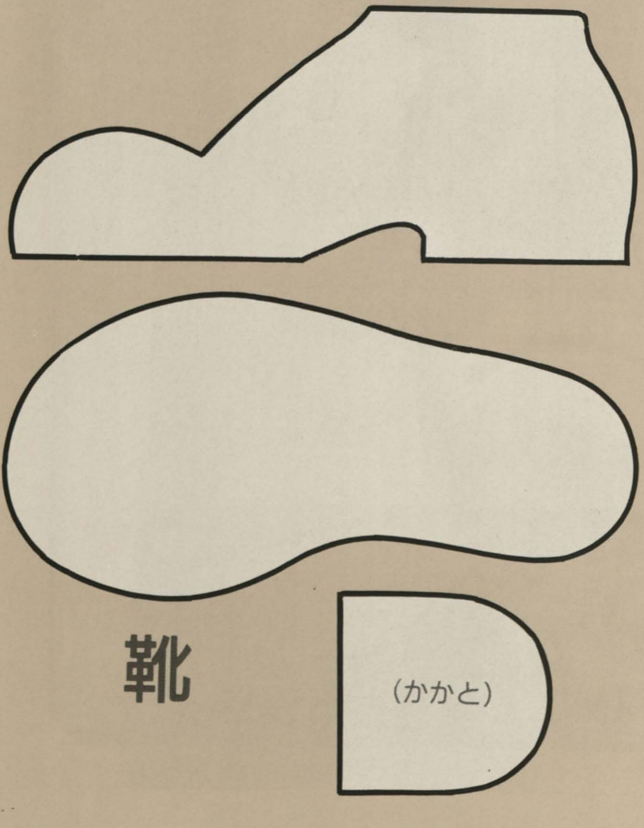

❶


❷


❸


❹


❺

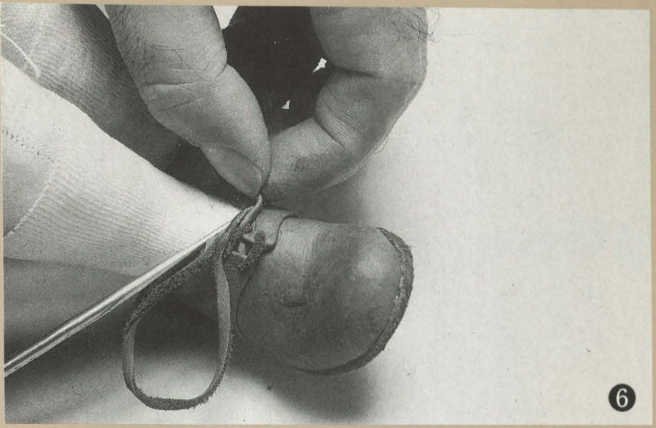


13-❻ 目打ちの先で押し込みながら、穴にひもを通す。

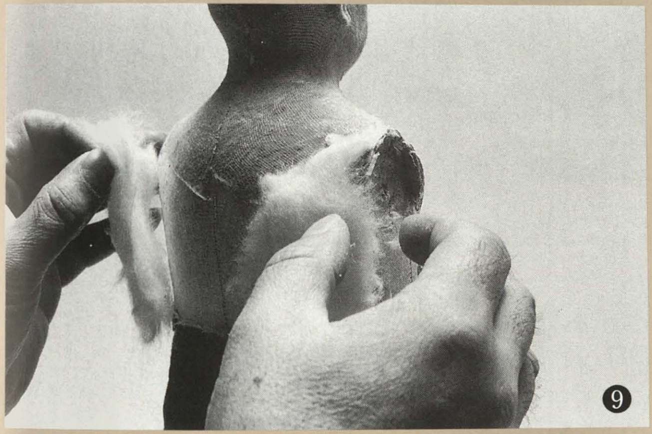
13-❼ ひもを結び、余分なひもを切る。靴の爪先を少しそらせるようにする。

◉服

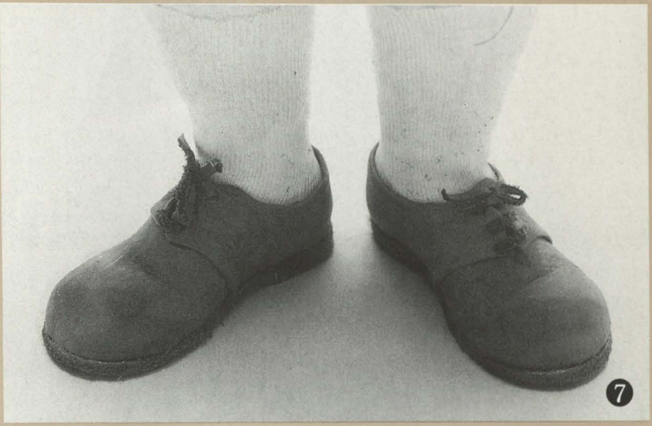
13-❽ 「男の子」と同じ要領で手をつくる。腕の先、5mmほどのところをカッターで切り落とす。切り口の中央に目打ちで穴を開け、そこにボンドをつけて、こてをあてておくと、木毛がむき出てこない。



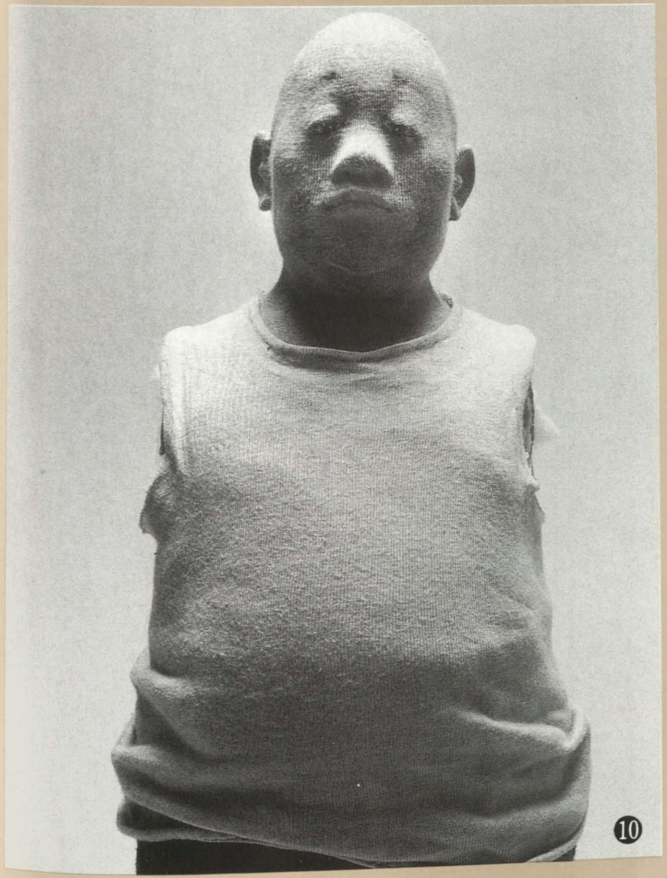
❻



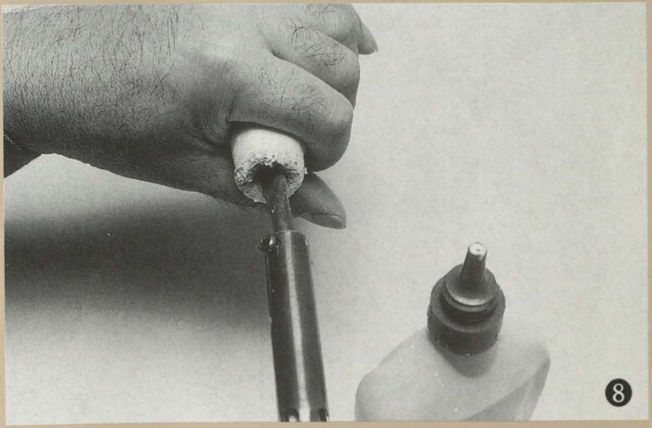
❾



❼



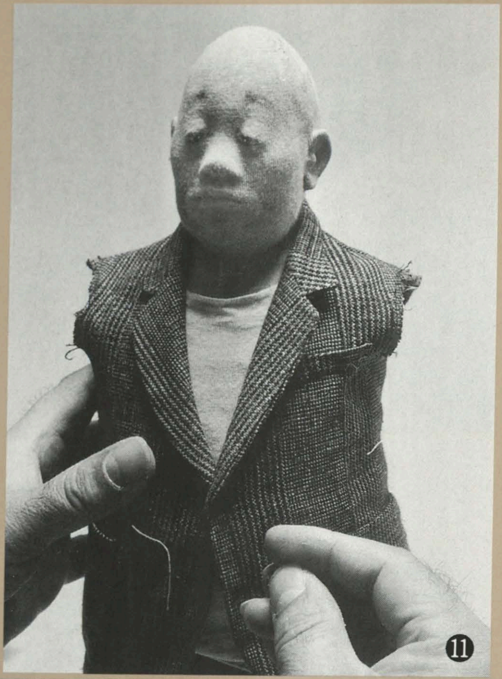
❿



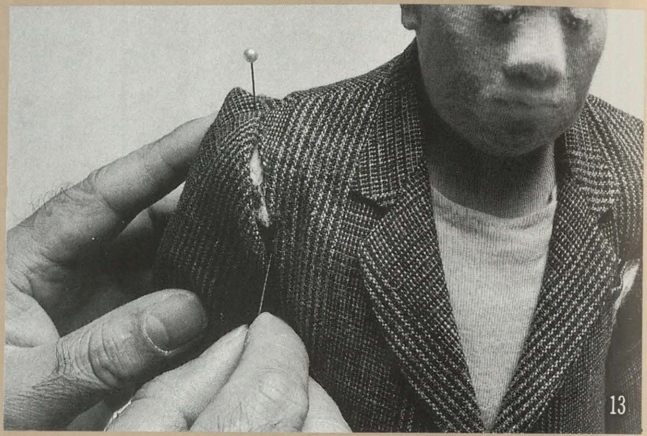
❽

13-❾ 背中や胸などに綿をあて、肉付きを調節する。

13-❿ ズボン、シャツ、上着、ネクタイはそれぞれ型紙に合わせて縫っておく。シャツは身ごろだけ、上着は身ごろとそでを離しておく。あてた綿がずれないようにシャツを着せる。

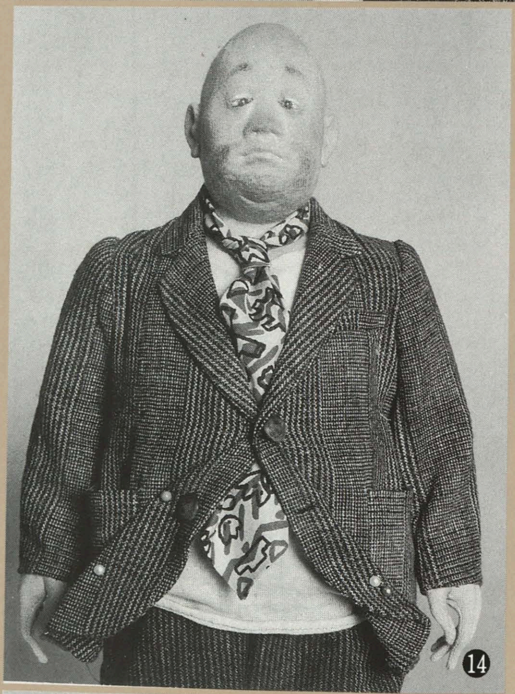


13−⓫ 上着の身ごろだけ着せ、前を合わせてボタンをつけ、縫い合わせる。ボタンは一つだけ掛けた状態にして、掛けていないほうのボタンホールもきちんと縫っておく。





13−⓬ 腕をつける時に邪魔にならないように、そでをまくり上げ、まち針で止めておく。「男の子」と同じ要領で腕を胴につける。腕と肩の継ぎ目に張り子紙をはってこてをあて、腕をしっかり固定させる。

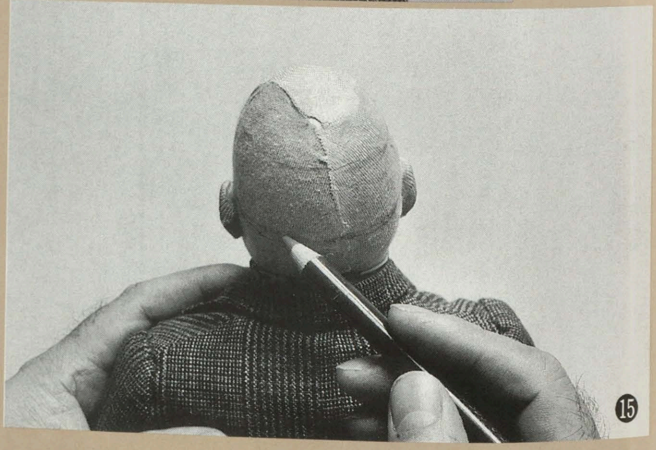


13−⓭ そでを身ごろに縫い付ける。

13−⓮ ネクタイを締め、全体のバランスを見る。上着のすそなどは折り曲げてまち針で止め、霧吹きをかけておくと自然なしわが出る。

◉頭部仕上げ

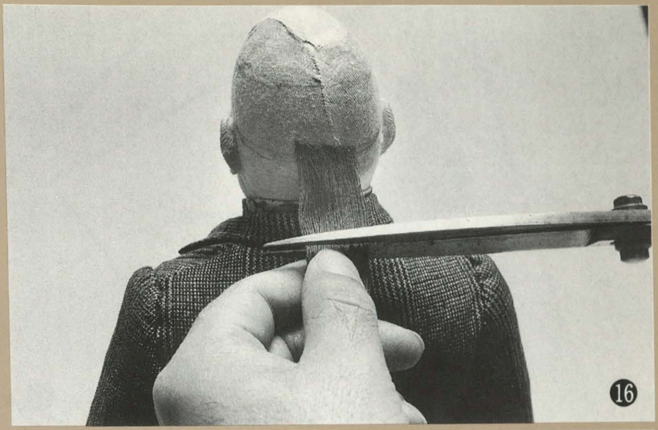
13−⓯ 髪をつける位置を鉛筆で描く。帽子をかぶせるので、頭のてっぺんはつけなくてよい。また、髪が長いので「男の子」のように細かくつけないで2段ぐらいでよい。

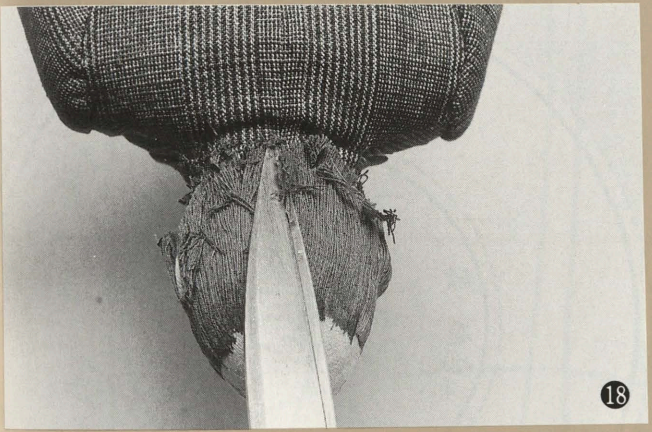


13-⑯ ダークグレーに染めた白毛を50～60本くしでとかし、先を揃えて切る。そこにボンドをつけて鉛筆の線に沿ってはり、1段目はえりが隠れるぐらいの長さに切る。

13-⑰ 2段目はそれにかなりかぶさるような長さに切る。

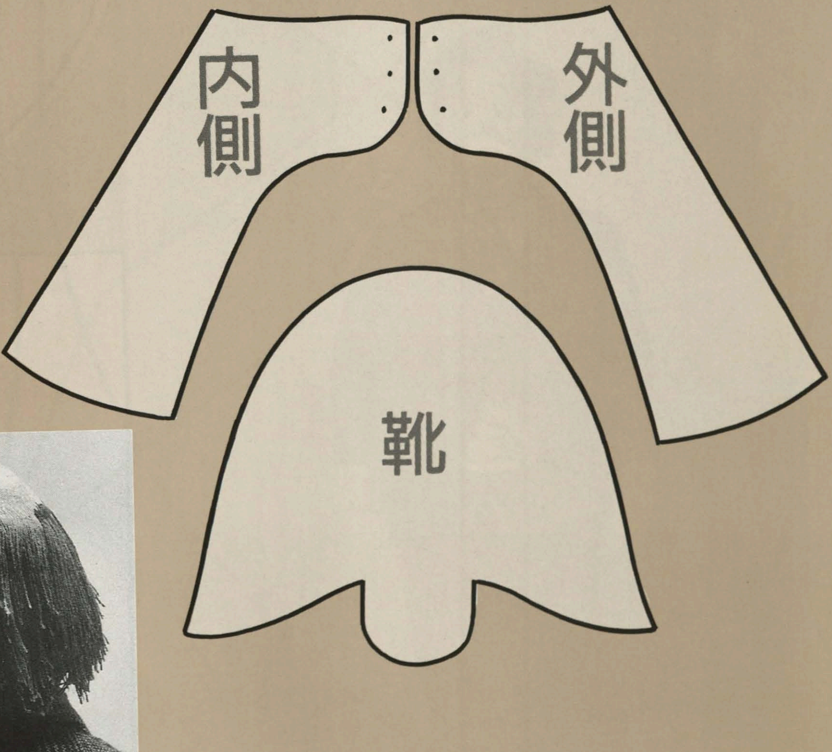
13-⑱ 髪の流れにそって縦にはさみを入れる。毛先があまりそろわないように、もじゃもじゃの感じをつくる。


⑯

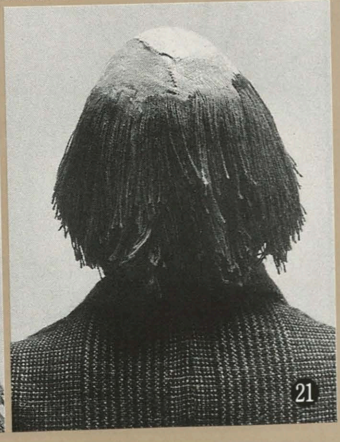

⑱


⑰


⑲



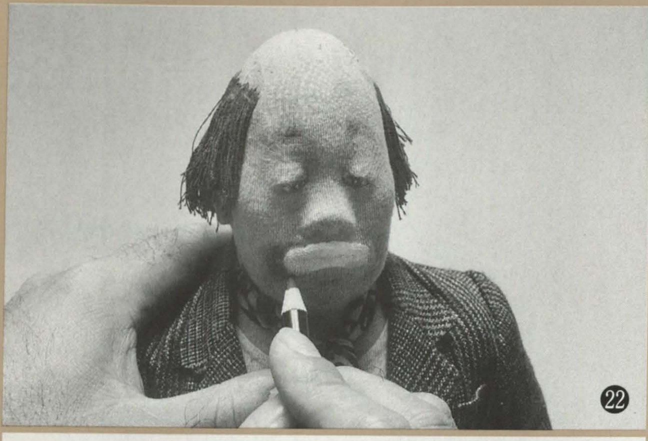

⑳


㉑

13-⑲ 髪づけ完成(正面)。

13-⑳ 髪づけ完成(横)。

13-㉑ 髪づけ完成(後頭部)。





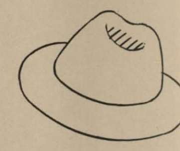


13－㉒ 口のまわりにジェッソを塗ってひげを描き、鼻を赤くぬるなどして、最終的な道化のメイクをする。

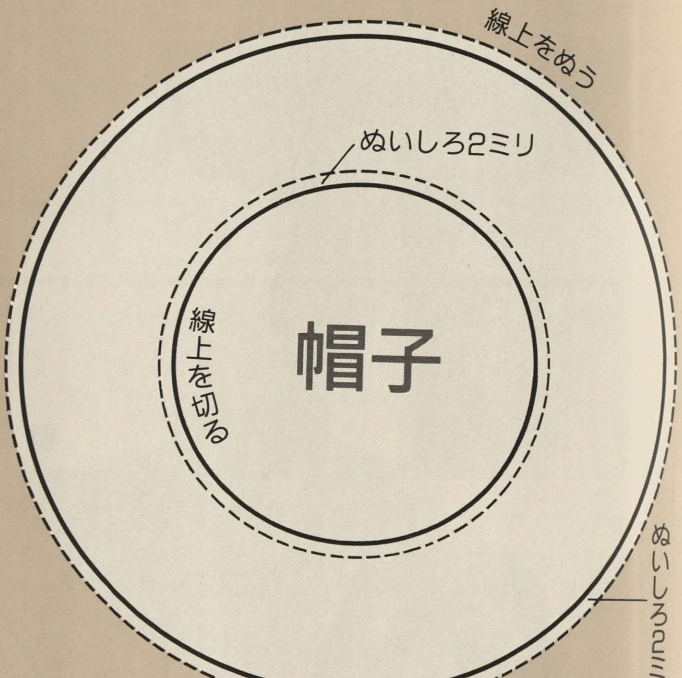
13－㉓ 帽子をつくる。つぶした感じにする。

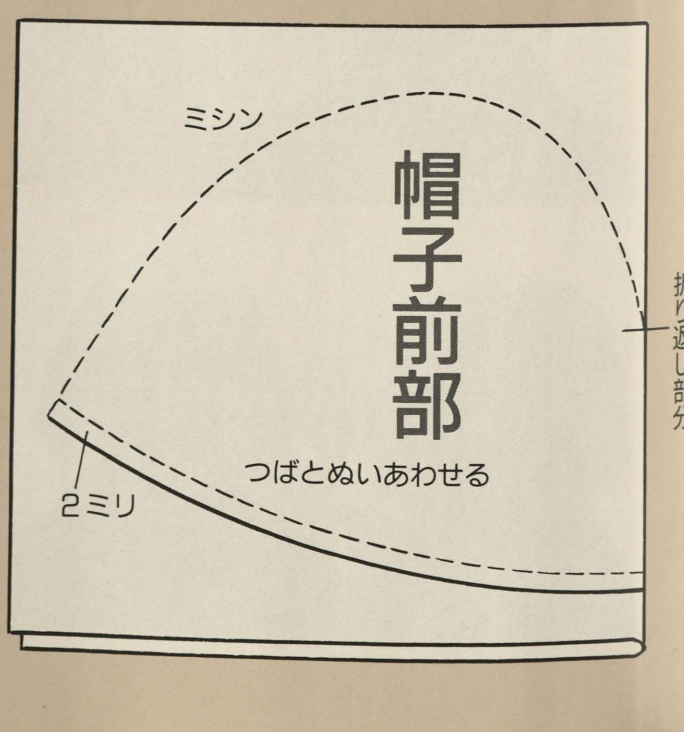
13－㉔ 帽子をボンドで頭部に接着し、仕上げのメイクをほどこして道化の完成。

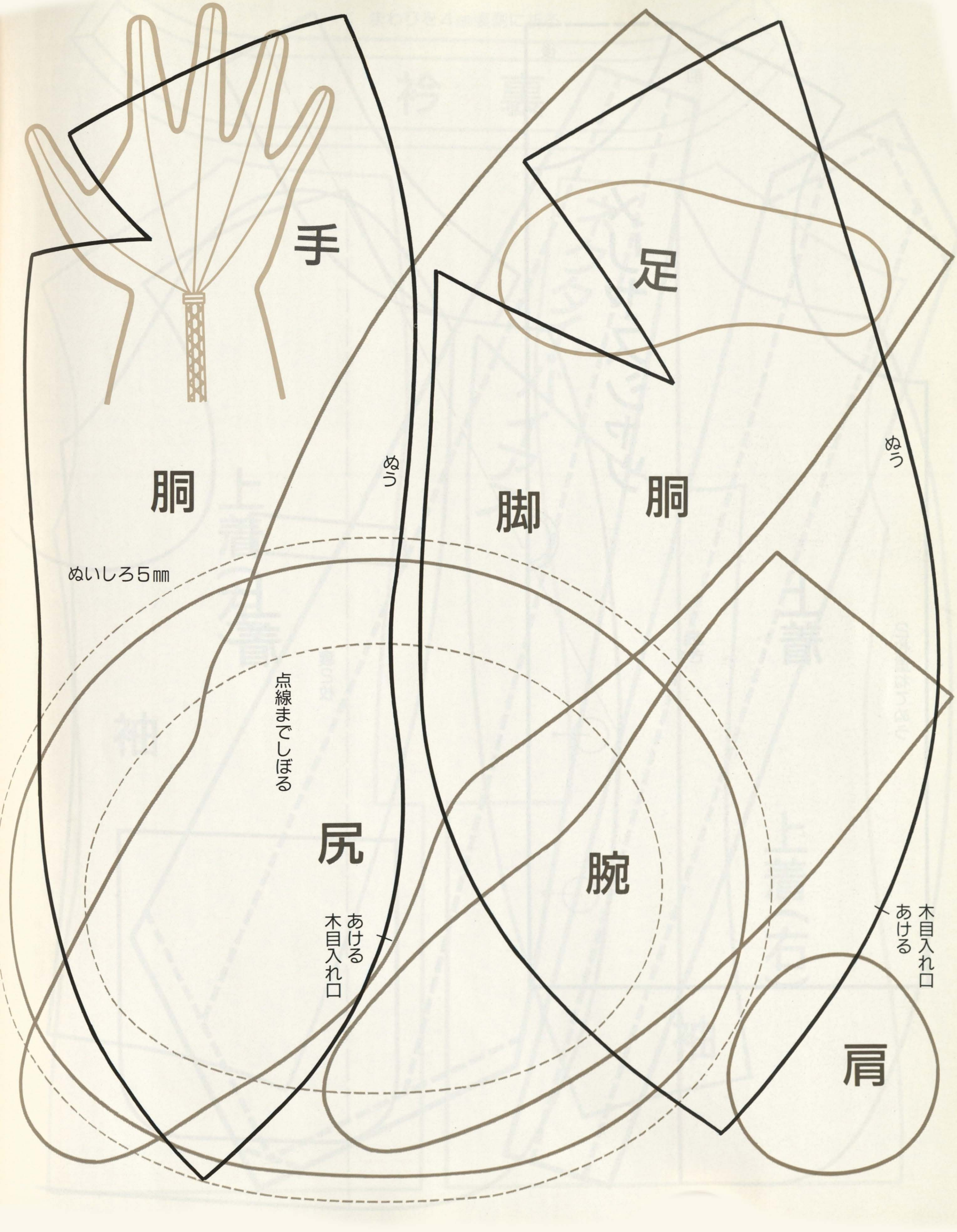
出来上がったら、てっぺんをつぶす。

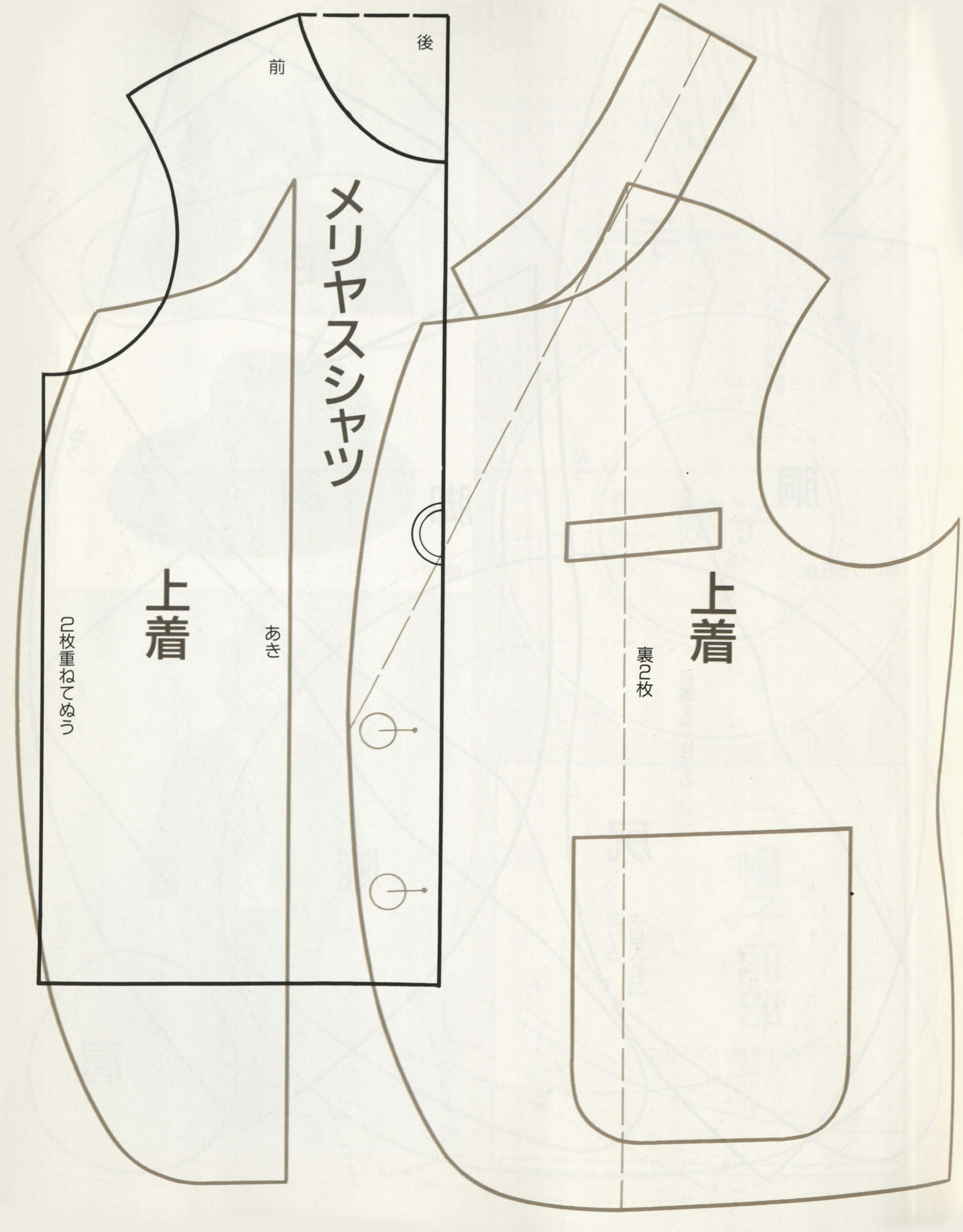


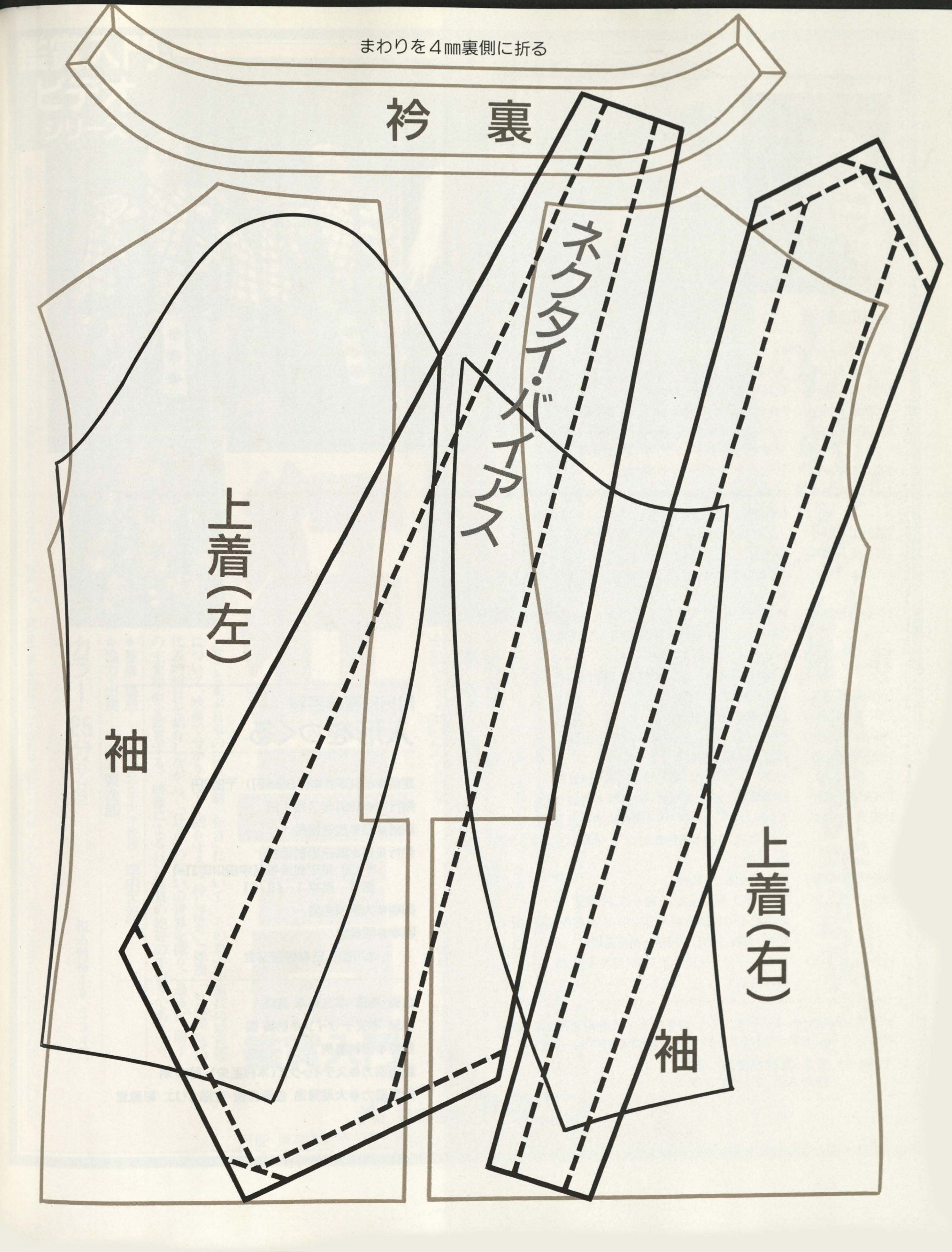
布2枚をつばの線上をぬってドーナツ型にし、ぬいしろ2ミリでひっくり返し、帽子とぬいあわせる

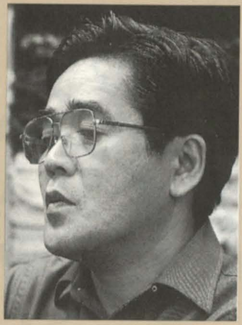





手
胴
ぬいしろ5㎜
ぬう
点線までしぼる
尻
あける
木目入れ口
足
脚
胴
ぬう
腕
木目入れ口
あける
肩


前
後
メリヤスシャツ
上着
2枚重ねてぬう
あき
上着
裏2枚


まわりを４㎜裏側に折る
衿裏
ネクタイ・バイアス
上着（左）
袖
上着（右）
袖



◉講師略歴

与 勇輝(あたえ ゆうき)

1937(昭和12年)	9月17日川崎市に生れる
1950(昭和25年)	川崎市立中原中学校卒業
1953(昭和28年)	川崎市立商業高等学校へ入学するも2年で中退
1956(昭和31年)	マネキン人形の会社に就職 デザイン、制作、ディスプレー等に携わる
1963(昭和38年)	日本デザインスクール卒業
1965(昭和40年)	マネキン会社に勤めるかたわら、この頃から布の材質に拘り、創作人形を作り始める
1968(昭和43年)	人形作家曽山武彦師を知り、指導を受ける
1970(昭和45年)	川本喜八郎、辻村ジュサブロー等、人形作家のグループ「第2回〝グラップ〟人形展」に参加以後第6回まで参加
1971(昭和46年)	毎日新聞社刊、人形絵本『シンデレラ』『ピノキオ』(飯澤匡監修、土方重己デザイン)人形制作担当
1977(昭和52年)	ギャラリー・ヤエスにて個展 サンリオ映画〝くるみ割人形〟人形制作参加
1979(昭和54年)	彩鳳堂画廊にて個展
1981(昭和56年)	彩鳳堂画廊にて個展
1984(昭和59年)	銀座松屋「人形代表作家13人展」に出品
1985(昭和60年)	彩鳳堂画廊にて個展 『人形・与 勇輝作品集』を求龍堂より刊行
1986(昭和61年)	銀座松屋にて「子供の刻・与 勇輝人形展」開催
1987(昭和62年)	大阪八尾デパートホール「現代人形の造型展」出品、いわさきちひろ絵本美術館にて「与 勇輝といわさきちひろ展」開催
1988(昭和63年)	彩鳳堂画廊にて個展
1990(平成2年)	『与 勇輝人形作品集』を駸々堂より刊行 銀座松屋にて「魅惑の人形たち・与 勇輝作品展」開催 札幌、大阪、福岡等全国6ヶ所を巡廻展
1991(平成3年)	パリ・ルーブル美術館工芸館「世界人形フェスティバル」招待出品

＊入門者用教材セットを準備しました。切手をはった返信用封筒に宛名を明記の上、下記にお問い合わせください(数に限りがあります)。

〒104-91 東京・京橋郵便局 留置
創作人形 アトリエ ノラ

NHK趣味百科
人形をつくる

定価●880円(本体854円) 〒260円
発行日●1991年7月1日
編集●日本放送協会
発行●日本放送出版協会
〒150 東京都渋谷区宇田川町41-1
振替 東京1-49701
印刷●大熊整美堂
製本●明泉堂

企画・構成・本文●与 勇輝
表紙・本文デザイン●柿崎 壽
撮影●田村泰男
編集協力●スティックス(木村至央)/鈴木 明
撮影協力●大滝秀治/佐藤忠良/佐藤オリエ/彩鳳堂

鑑賞入門ビデオシリーズ

映像による伝統芸能鑑賞の手引き!!





能 鑑賞入門

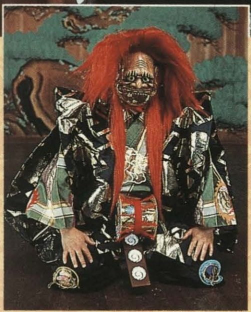


日本の伝統演劇「能」について、その歴史をはじめとして、能舞台、能面と装束、演技の特色などを紹介、わかりやすく解説を加えたものである。また能を完成させた世阿弥と「風姿花伝」にもふれ、人間の情念を舞台に純粋に結晶しようとする能の世界をさぐる。映像による能鑑賞の手引である。

●監修・構成――武蔵野女子大学教授・増田正造
●協力・出演――梅若六郎・梅若会

カラー・25分(VHS)　税込価格18、334円

狂言 鑑賞入門



「能」と並ぶ日本の伝統演劇「狂言」について、その舞台や演技の特色等について、映像で分かりやすく紹介する。「棒しばり」「鎌腹」「蚊相撲」等の代表的演目を紹介しながら、「狂言」の笑いの世界を探り、最後に「附子」の主要場面を鑑賞する。映像による狂言鑑賞の絶好の手引きである。

●監修・構成――武蔵野女子大学教授・増田正造
●協力・出演――山本東次郎

カラー・25分(VHS)　税込価格18、334円

お近くの書店、レコード店を通じてご注文下さい。また直接小社へご注文の場合は「教育ソフト課」まで現金書留もしくは郵便振替にてお申し込み下さい。なお、ご希望の方には目録をお送りいたします。

株式会社アポロン
〒162　東京都新宿区余丁町3-8・☎03(5379)3556　郵振・東京5-172060

'91年7月1日発行

定価八八〇円（本体八五四円）

日本放送出版協会　〒150 東京都渋谷区宇田川町41-1　TEL (03) 3464-7311　Printed in Japan　雑誌 61881－24